

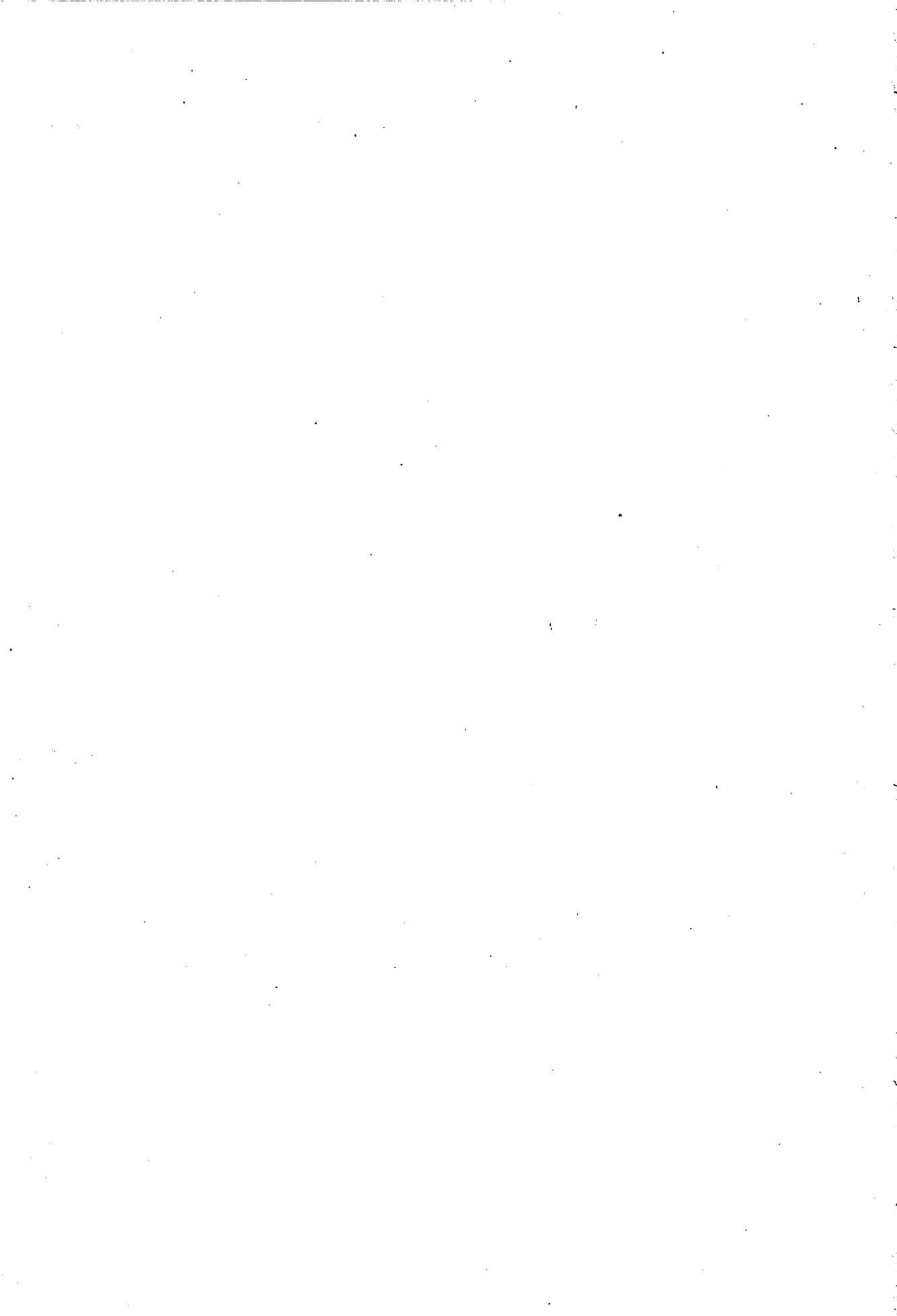
日曜学校教案誌

vol. **10**
2003.7,8,9月号



とどろけ、海とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものよ

日本キリスト改革派教会 中部中会教育委員会



も く じ

まえがき	遠山信和	4
巻頭説教	木下裕也	5
日曜学校・教会学校訪問		
大屋伝道所日曜学校の紹介		8
聖書研究・説教展開例・分級展開例		11
2003年7・8・9月分カリキュラム		12
7月6日		13
7月13日		20
7月20日		27
7月27日		34
8月3日		41
8月10日		48
8月17日		55
8月24日		62
8月31日		69
9月7日		76
9月14日		83
9月21日		90
9月28日		97
幼稚科・小学科下級教材		104
2003年度下半期カリキュラム		105
あとがき		107

まえがき

遠山信和（恵那教会牧師）

多くの学校の先生方が「子どもは変わった」と言われます。「今まで通用していた指導が今年のクラスには通用しない。」「指示が入らない」と言われます。不登校、いじめ、家庭内暴力、リストカット、自殺願望、万引き、ドラッグ、援助交際、学級崩壊などという言葉も生まれてきましたが、子どもたちの心の思いを探っていくと、セルフイメージが弱く、自分を好きだと思えないで、「私の人生はどうせたいしたことはない。だからどう生きたって変わらない」という思いを持っている子どもたちが急増しているように思われます。若いときから、すでに人生をあきらめてしまっているわけです。

こうした現象を見ると大人たちは、子どもにきちんとした生活規範を身につけさせなければと思うのですが、それ以前に大人たちは、子どもの心に寄り添ってきたのだろうか、子どもと向き合ってきたのだろうかという反省を求められます。

あるテレビ局の中学生を対象とした番組で、「死にたいと思った人はいる？」と聞くと、半分近くの生徒が手を上げました。「どんなとき？」と聞くと、みんな答えは同じで、「お母さんと話したあと」、とくに食事のときだということでした。食事をするのは本来楽しいときははずなのですが、なかなか話す機会がないためにお母さんはつい言ってしま

います。「もうすぐ期末試験でしょう。だからだらしてたらいけませんよ。がんばってね。」インタビューに答えた一人の生徒は、お母さんに辛かった思いを告白しました。「今日、部活で先輩と〇〇で・・・。」しかし、お母さんの答えは、「なんだ、そんなこと。あなたの方が先輩なんだから、あなたがしっかしければすむことじゃないの。しっかしなさい。」お母さんに自分の気持ちを伝えても分かってもらえない。子どもにしてみたら、「そんなことがあったの、大変だったね」と、うけとめてもらいたかったのです。

罪の闇とむなしさが地上を覆っている、心傷ついた子どもたちが大勢いるこの時代です。親に認められたい一心でよい子を演じる子どもたち、かまってほしいと授業中に立ち歩く子どもたち、一人になるよりはましといじめに耐え続ける子どもたち。彼らが立ち直っていくのは、信頼できる大人に出会うことによってです。「この人は私を拒絶しない。この人は私を受け入れてくれる。」主が私たちをそのように受け入れてくださったように、私たちも、子どもたちの隣人となるために祈ってまいりたいと思います。

伝道においても、牧会においても、教会形成においても、子ども（の心）と出会うこと、子どもの心に届くこと、これが今日もっとも求められていることではないでしょうか。

「真理と命に至る道」

- ヨハネによる福音書 14 章 1 ~ 7 節による説教 -

木下裕也 (豊明教会牧師)

ヨハネによる福音書 14 章 6 節で、主イエスはこう仰せになっています。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」。

また、同じ 14 章の 1 節ではこう仰せになっています。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」。

このふたつのみ言葉の密接なつながりということをまず覚えておきたいのです。

主イエスは、6 節では、真理と命に生きる道は、わたしのほかにはないと言われます。真理はひとつであり、命もひとつです。そして真理も命も、神のもとにあります。そして私たちが神に近づき、真理と命にあずかる道も一本きりなのです。それがイエス・キリストという通路です。ほかの道はないのです。

そのことを前提としたうえで、1 節で主イエスは弟子たちに、心を騒がせることなく、私を信じなさいと言われるのです。

私たちが主イエスを信じるとは、主イエスに身を委ねることです。ほかの誰でもなく、イエス・キリストを真理と命に至る、まことの神に至る、ただひとつの道であると思い定めて、このお方を私の人生の中心として選び取っていくことです。

そうである以上、信じるということは、あいまいなことではありません。本当かどうかわからないけれども、とりあえずこちらにも立ち寄ってみようか、といったたぐいのことではないのです。信じることは、その意味で

は決意することだと言ってもよいでしょうし、明確な意志表示であると言ってもよいのです。

そしてそのように主イエスを唯一の道として選びとる時に、私たちの人生は初めて腰のすわったものになります。背筋がしゃんとしてくるのです。主イエスを信じることによって私たちの心は定まり、命に中心が生まれ、そこには確かな人格をもった人間が生まれます。パウロは、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく造られた者なのだと言っていますが(コリントの信徒への手紙二 5 章 17 節)、信仰によって人はそのような人間としてまさに新しく生まれるのです。それゆえに信じるといういとなみは、私たちが人間であるための、また人間となるための、もっとも根源的な土台なのです。

ところでヨハネによる福音書のこの場面は、主イエスが十字架にかけられる前夜に、弟子たちに告別の説教を語っておられる場面なのです。すでに主イエスはイスカリオテのユダの裏切りとベトロの否認とを予告しておられます。弟子たちの心は騒いでいます。つまり恐れと不安にもまれています。

そうした中で主イエスは、心を騒がせるなどお命じになるのです。

心を騒がせるなどは、じっと静かにしていればよい、心を動かさなくともよいということではありません。また、ちりぢりに乱れた思いをただうまくしずめるということでもありません。

そうではなく、人に本当の命を与えてくだ

さるお方は誰であるのか、人が真に信じ従っていくべきお方は誰であるのか、そのことを今こそ誤りなく見定め、そのひとりのお方を選び抜いていく勇気と決意をかためよということなのです。

私たちが今現に生きている社会は、割合にほどほど、ということや、仲を取りもつ、ということ、あるいは中庸ということが重んじられている社会です。けれども主イエスを信じるとは、おそらくはそのような態度からはもっとも遠いみ言葉ではないでしょうか。

ルカによる福音書には「レギオン」の記事がありますが(8章26節以下)、現代という時代のひとつの特徴は、人間の心も体もバラバラに引き裂かれているというところにあるとも言われるのです。現代人も社会のいろいろな場所に身を置き、いろいろな顔を持ち、けれどもそれぞれの場所にある慣習や価値観の板挟みとなり、またさまざま不安や恐れや怒りをかかえて生きています。その点では、十字架を前に心を騒がせている弟子たちときわめて似た状況だとも言えるのではないのでしょうか。

さらに現代社会には、世界のどの場所でも差別や偏見や争いがあります。そういう状況に自分自身もまた置かれているひとりひとりとして、私たちはやはりしっかりと確かめておきたいと思います。信仰とはそのような分裂を、あるいは矛盾や対立をうまくカバーし、調和させるための道具ではないのです。信仰とは勇気と決断のもとに選び取られるものです。そこではじめて、真理が見えてくるのです。命が見えてくるのです。

さて、主イエスは弟子たちに心を騒がせるなどお命じになりました。けれども12章27節ではこう仰せになっていました。

「今、わたしは心騒ぐ」

十字架の死を前にして、主イエスはおんみ

ずから心騒がせておられたのです。心騒がせる弟子たちを前に、ご自分だけ超然としておられたのではなかったのです。人間の祈りやたたかい、恐れや不安を、手にとるように理解しておられたのです。と言うよりも、ご自身がそのただ中に身を置いておられたのです。

しかもなおかつ、心を騒がせるなど仰せになりました。なぜなら私たちが唯一の真理と命の道としてこのお方を選び取るなら、もはや究極的に心を騒がせる必要はないからです。

主イエスは私たちが心騒がせる者であることを知り抜いておられ、なおかつ私たちの住まいを用意してくださるのです(1節)。私たちを受け入れ、私たちの命を肯定してくださるのです。そして、私たちに信仰によって歩む者としてくださるのです。

旧約の時代のイスラエルは荒れ野の旅路にあつて、昼は雲の柱、夜は火の柱に導かれて歩んだとあります(出エジプト記13章21-22節)。私たちの道はイエス・キリストです。このお方を通して、私たちは神の真理と命に至ります。イエス・キリストが指さされるその方向に、イエス・キリストにともなわれて歩むとき、私たちは父なる神に至り、真理と命に至るのです。

信仰とは単なる思いや憧れや感情といったものではありません。主イエスのみ言葉に聞き、またみ言葉に従う意志であり、また決意です。決意にともなって服従が生まれます。すなわち主イエスというお方を選び取る時、私たちはおのずから主イエスのみ言葉に従うのです。そして、み言葉に聞き従う歩みを重ねていくことによって、私たちは真理を知り、命を知るに至るのです。真理と命に至るための秩序というものがあるのです。イエス・キリストという通路を通るといって

す。時間をかけながら、その道を忠実に歩んでいくということです。

宗教改革者カルヴァンは、教会の教育ということを重ねたと言われます。子どもたちを信仰告白に導くカテキズム教育も重視しましたし、大人たちを礼拝の説教やさまざまな学びの備えによって教育することにも意を用いました。

教会員たちは、それこそ召されるまで教育されました。母なる教会は信徒たちを生涯教え続けました。それはカルヴァンが、真理や

命は一足飛びに、劇的な出来事によって一挙に獲得できるものではなく、道なる主イエスのみ言葉に養われ続けることによって与えられる賜物であることを知り抜いていたためだと思ふのです。

主イエスが備えてくださった天の住まいに迎え入れられるときまで、私たちはこの地上で主イエスにつながり、主の教会につらなることによって、真理と命に至る唯一の道なるお方に従い、そのみ言葉に養われて歩み続けるのです。

大屋伝道所教会学校の紹介

大屋伝道所宣教師 西牧夫

1. 大屋伝道所と教会学校

大屋伝道所は、兵庫県北部に位置する養父郡大屋町（五千七人の小さな過疎の町）にあります。周りは山々に囲まれ、川の流れる緑豊かな谷間の町です。1968年に開拓伝道が始まり、1991年に中会所属伝道所になりました。教会学校は、1997年から始まり、現在7年目に入っています。主日の朝9時15分から1時間ですが、はじめに全員で「子どもの礼拝」をささげ、その後は各分級に分かれます。

いつも来ている子どもたちは、契約の子どもたち10人と未信者の子ども1人です。そのほかに、時々来る子どもたちが数名います。教師は、若い両親、青年を中心として8人います。

2. 礼拝

教会学校は、子どもたちが（親も大人も共に）喜んで神様に礼拝し、神様の前に生きる教会の一員として成長することを目的として、始められました。礼拝が、教会教育の始まりであり、終わりであることを認識しながら、礼拝を充実したものにするために、努力しています。昨年3月からは、中部中会教育委員会『日曜学校教案誌』と『子どもカテキズム』を採用して、礼拝を行っています。礼拝プログラムは、次のようなものです。

オルガンのぜんそう
こどものさんびか
しゅのいのり
子どもカテキズムのこうどく

おいのり
せいしよ・せつきょう
あんしょうせいく
おいのり
こどものさんびか
けんきん・おいのり
しょうえい
しゆくふく
オルガンのこうそう

司会と説教は、月3回は牧師が担当し、残り1回を教会学校教師が順番に担当しています。献金・お祈りは子どもたちが順番に奉仕しています。

3. 分級

分級は、幼稚科3名、小学下級科2名、小学中級科3名、小学上級科3名、中学科2名に分かれています。それぞれの分級は、1名から2名の教師が担当します。

幼稚科と小学下級科は、主に工作や絵を描きながら、聖書の物語を学び、小学中級科以上は、教師との対話を通して、子どもカテキズムを学んでいきます。特に、この分級の時間は、子どもたちと教師との対話的な関係の中で、お互いが深く触れ合うことを大事にしながら、年齢に合わせて学び、考えていくことを重視しています。

4. 年間の主な行事

①『世界に平和を、世界にパンを』

1月の2回の礼拝献金を、世界の戦争・飢餓・障害などで苦しんでいる人々のために働

いている機関や施設に献金します。そのために、事前の合同分級で、献金先の国や機関や施設のことについて学びます。世界の広がりや現状に目を向け、さまざまな人々と、平和を求めて、共に生きるための祈りを深めます。

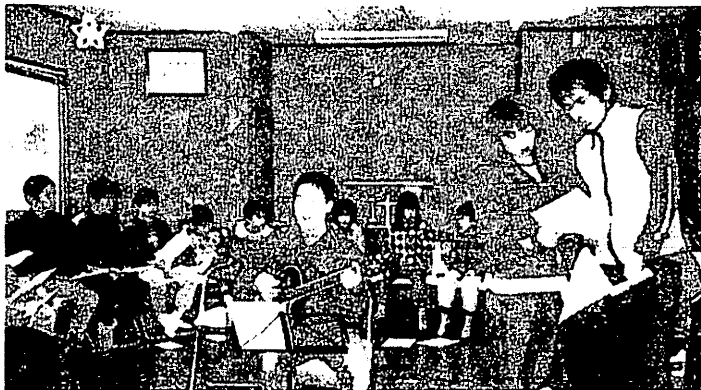
去年は、戦争のあったアフガニスタンで活動している「ベシャワール会」に、今年は、施設を訪問して身体障害者の方々と交わり、障害を持つことの意味を考えながら「聖恵授産所」に献金しました。

②イースターとクリスマス

イースターには、分級時間にみんなでイースターエッグ探し、共同礼拝後のイースター祝会の中では、教会学校で賛美の披露をして、

楽しいときを持ちます。

クリスマスには、毎年12月の第1土曜日の午前に、近隣の子どもたちへの伝道として、子どもクリスマス礼拝の集会を持ちます。第1部でキャンドル礼拝を行い、第2部では賛美や楽器演奏、ゲームやクリスマスにちなむ工作を楽しみます。第3部で教会学校の生徒による聖書物語劇を披露し、最後にクリスマスケーキをもらって帰ります。最近は、このクリスマス集会が地域に定着したようで、子どもと親を合わせて50名ほどの人数が集まるようになりました。このことを通して、地域に教会学校の存在とその働きが理解されるように願っています。



2002年12月8日(土) 子どもクリスマス礼拝(讃美の時間)

③一日夏期学校と中会合同夏期学校

一日夏期学校は、夏休みに入る直前の日曜日の午後から月曜日の朝にかけて、教会に1泊して行います。教会庭で、飯盒炊飯やキャンプファイヤーをしたり、賛美やゲーム・スイカ割などをしながら、大人も子どもも楽しめます。特に、子どもは、いつもとちがって教会に泊まるので、わくわくします。

夏休みの一大イベントは、神戸である二泊三日の合同夏期学校です。距離的にも遠く離れ、ほかの教会をあまり知らない子どもたちにとって、合同夏期学校は、ほかの教会の友だちに出会う大きな出会いの場になっています。この出会いを通して、教会の大きな広が

りに心が開かれていきます。

④老人ホーム訪問

去年から、母の日とクリスマスに、町の老人ホームを訪問しています。楽器演奏や賛美を披露したり、一緒にお年よりの方々と歌い、触れ合いながら交わりの時を持ちます。

この訪問を、お年寄りの方々が本当に喜んで下さり、その喜びが子どもたちにとっても、人に仕えることの大きな喜びとなっています。教会学校が、外に向かって開かれ、地域に貢献できる一つの契機になっています。

⑤こじか文庫

今年の4月より正式に本の貸し出しが始まりました。大屋町には、図書館がありません。

ですから、地域の子どもたちに本の世界に少しでも触れてもらいたいとの願いから始められました。この文庫の働きを通して、豊かな可能性を秘めた子どもたちが、世界の見えない豊かさを感動をもって知り、自分からも創造できる人間へと成長するための、一つの働きを担えればと願っています。



2003年5月11日(日) 老人ホーム訪問

5. 教会学校教師会

教会学校教師会は、毎月最終主日の午後に行われます。教師は、教会学校未経験の若い契約の親や青年が多く、現在8名おります。大屋伝道所にとっても、契約の子どもの教育の経験は初めてのことで、全員が試行錯誤を繰り返しながら、一緒に学びを続けています。その学びにあたって、中部中会教育委員会の日曜学校教案誌の聖書研究・カテキズム研究・説教・分級例が、大きな導きとなっています。

毎月の教師会では、各分級の子どもたちの状態とその祈りの課題について報告し、諸行事について話し合います。特に、教師会として大切にしているのは、お互いの教師として

の成長のための学びと議論です。参考までに、これまで取り上げた学びと議論には、次のようなものがあります。

○学びのテキスト

- ・『希望の教育 2 (子供と祝うキリスト教の祭り)』、レギーネ・シントラー著
- ・『信徒のための神学講座 (子どものための説教入門)』、加藤常昭著
- ・『響かせていくこととしての信仰教育』(大会レポート、教案誌創刊号掲載)、三川栄二著
- ・『契約の子どもの教育』(大会レポート)、吉岡良昌著 など

○議論のテーマ

- ・十戒の第一戒と第二戒をめぐって (日本の偶像崇拜的精神土壌の中で)
- ・福音の光に照らされた罪の理解とその教え方について
- ・公同礼拝に向かう子どもたちの姿勢の育成について (礼拝する喜びに向かって)
- ・コミュニケーションにおける言葉をめぐって (教える言葉・対話的言葉など) など

6. 現状と課題

現在は、子どもたちとともに、真実に神さまに礼拝をささげるあり方をめぐって、もっともっと学びと理解を深め、体得していく必要を覚えています。そして、この福音に生かされる礼拝の喜びが豊かにされることを通して、契約の子どもたちが信仰告白へ、未信者の子どもたちが洗礼へと導かれることを祈っています。

地域に開かれた教会学校の伝道と奉仕の働きは、これからの大きな課題です。すでに始められているクリスマス集会・老人ホーム訪問・こじか文庫などの働きを通して、教会学校の福音宣教と愛の業と文化的奉仕の働きが、小さいながらも着実に地域に広げられ、浸透していくことを祈っています。

聖書研究・説教展開例・分級展開例

日曜学校 2003年度カリキュラム (2003年7～9月分)

—救済史に基づく一年間のカリキュラム—

月 日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
7月6日	神の人モーセ	出エジ2:1-10,3:1-10	出エジプト 2:24-25
	契約に真実な神を仰ぎ、教会共同体のために神に応答するよう励ます		
7月13日	主の過ぎ越し	出エジプト 12:21-27	出エジプト 12:26-27
	贖いのみわざによって罪赦され、神の民とされる恵みに招く		
7月20日	出エジプト	出エジプト 14章	出エジプト 14:14
	神の救いの確かさ、その力の偉大さを讃美しよう		
7月27日	契約のしるし	出エジプト 24章	出エジプト 24:8b
	契約の恵みに応答することへと招く		
8月3日	約束の地	ヨシュア 3章	ヘブライ 13:8
	信仰による確かな歩みへと招く		
8月10日	ダビデとゴリアト	サムエル上 17:41-54	詩編 18:36
	神の勝利を確信して、神のための戦いを戦おう		
8月17日	ダビデ契約	サムエル下 7:1-17	サムエル下 7:9
	主イエスを証しする預言の確かさ、神の約束の真実さを覚えよう		
8月24日	ソロモン王	列王上 3章	列王上 3:14
	神の祝福を神と人とのために用いる祝福へと招く		
8月31日	ユダの滅亡	エレミヤ 18:1-17	エレミヤ 18:6b
	神の見えない御手の創造と滅ぼすみわざを覚えよう		
9月7日	回復の預言	エゼキエル 34:11-31	ヨハネ 10:14
	真の牧者なる神の羊の群れとされている幸いを感謝しよう		
9月14日 (15敬老の日)	捕囚からの解放	イザヤ 45:1-13	ローマ 13:1
	異邦の王キュロスさえ用いて救う神の力と恵みを讃美しよう		
9月21日	礼拝の再建	ネヘミヤ 8:1-12	ネヘミヤ 8:10b
	礼拝がどれほど大きな恵みであり務めであるかを覚えよう		
9月28日	新しい契約	エレミヤ 31:31-34	エレミヤ 31:33b
	キリストにおける契約の成就を指し示し、旧約を福音として受け止めよう		

テキスト 出エジプト記 2章1～10節、3章1～10節

(1) モーセの出生

ヨセフの時代にエジプトに移住したイスラエル人は、エジプトの地で国中に溢れたと言われるほど多くなっていました。そのため、ファラオは、イスラエル人の「生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め」と命じました。このような絶望的な命令が下された時代に、モーセはイスラエル人としてエジプトの地に生まれました。

モーセの可愛さ故に、モーセの家族はファラオに逆らい、モーセを殺さずに隠していました。しかし、隠しきれなくなり、モーセをバビルスで編んだ籠に入れて、ナイル川の葦の茂みの中に流しました。イスラエルの民とモーセは、絶望的な状況に置かれました。

(2) ファラオの娘に拾われる

さらに絶望的と思われることが起こりました。しかも、モーセには何もできません。すなわち、ファラオの娘に見つかるのです。モーセはどうなるのか！その緊張感があります。しかし、ファラオの娘は、残虐な父とは逆に、このヘブライ人の子どもを育てる決意をします。こうして、奴隷の子であったモーセが、エジプト人の子どもとして引き上げられ、これからの働きに備えることとなります。必要な賜物も備えられ与えられるのです。

まるで神様がおられないのではないかと思える状況の中で、神様の救いの御業の備えが、静かに着実になされています。ここに、摂理の神がおられ、神の救いの御業があります。

(3) モーセの民族意識と民の拒絶

40歳になり、モーセは、イスラエル人としての民族意識を持ち、痛みつけられ苦しめられている同胞を助けようとします。その中

で彼はエジプト人を殺してしまいます。また、イスラエル人同士が争っているときに民を裁こうとしたモーセを同胞の民は拒絶し、エジプト人を殺したことを指摘するのです。これらのことはすぐにファラオにしれるところとなり、モーセは荒れ野に逃げなければならなくなりました。モーセは強い意識と自らの力で民を救おうとしたのですが、しかし、それは神様の御心にかないませんでした。モーセは、荒れ野で神の器として整えられることとなります。

(4) モーセの召命

モーセは荒れ野に追いやられ、ミディアンの祭司エトロのもとで羊飼いとして生活します。そこで40年生活し、80歳になったときに、神様がモーセを召し出しました。

その召しは、神様の契約に基づいて、イスラエルの民をエジプトの地から約束の地へ導き入れるために、モーセを立てて用いるというものでした。しかし、この時年老い、家族を持っていたモーセは、すでに40歳の頃のカや気力も意気込みもなくなっていたのでしょう。召命を拒絶しました。しかし、そのように自らの力に頼らなくなったモーセを神様は召しておられました。

絶望的な状況の中でナイル川から引き上げられた何の力も持たないモーセは、再びすべての力が失われたとき、神様によって引き上げられました。神様はご自身の契約に基づいて御自身のご計画と御力によってその民を救い出されます。それは、その契約を捨て去ることのない神様の真実です。そして、神様は弱者をこそ用いて、その真実と御力を示されるのです。
(春名義行)

テキスト 出エジプト記 2章1～10節、3章1～10節

〔単元のねらい〕

モーセの誕生と召命を取り扱う。モーセの生涯から、救済の歴史は、一気にその核心へと動き出す。聖書の神は、御自身の民イスラエルをその契約の故に、徹底して救われる。そのために神は、御自身の僕をお立てになられる。それがモーセである。具体的なモーセという人物なしに御業はありえない。また、聖書の神は、我々のために働かれる神であることもますます明らかになる。契約の子はもちろん、子どもたちひとり一人が神の召しを受け、神のために、神の民のために立ち上がる使命と幸いを伝えたい。

「神の人モーセ」

エジプトに住み着いたイスラエルの人たちは、神さまの祝福を受けて人口が増えてゆきました。やがて、あのエジプトの総理大臣にまでなったヨセフさんのことをまったく知らない王様が現れ、このように考えました。「このまま行くと、イスラエル人がどんどん増えて、ついには、この国はあいつらのものになってしまうかもしれない。」そこで、王様は恐ろしい法律を作りました。それは、「イスラエル人として生まれてくる赤ちゃんが男の子であれば殺せ、ナイル川に放り込んでしまえ」というものでした。何と恐ろしい法律でしょうか。けれども、それに従わなければ、その人も、殺されてしまうのです。

さて、あるとき、祭司の家の男の人が結婚して、男の子の赤ちゃんが生まれました。その赤ちゃんは、それはそれは、かわいかったです。殺してしまうことはどうしてもできませんでした。三ヶ月の間、隠し続けたのです。けれどもどうとう、赤ちゃんの泣き声も大きくなって、隠し通すことができなくなってしまいました。そこで、両親は、水が入らないように工夫した籠の中にその赤ちゃんを

入れてナイル川に流したのです。いくら水が入らないようにしても、ナイル川をどんどん流されていってしまったら、きっと死んでしまいます。その子のお姉さんは遠くから流されてゆく赤ちゃんを追いかけました。すると、どうでしょう。水浴びに来ていた、王女さまが赤ちゃんを見つけました。王女様はすぐに、これは、イスラエルの赤ちゃんだと気がついて、かわいそうになりました。それを見ていたお姉さんは、勇気を出して言いました。「その子に、お乳を飲ませるイスラエルの女の人を呼んできませんか。」するとどうでしょう。王女様はにっこり微笑んで「そうしておくれ」と言ってくれたのです。そこで、お姉さんは急いで、お母さんと呼んできて、赤ちゃんはお母さんのおっぱいで大きくなることができました。この赤ちゃんが、今日から4回お話する主人公のモーセです。

やがてモーセは、立派な大人になりました。ある日のこと、宮殿の外に出て、エジプト人がイスラエル人を奴隷のように酷く働かせているのを見ました。モーセは、そのエジプト

人を殺してしまいました。そればかりかなんと、その事が、王様の耳に届いてしまいました。そのため、モーセは、王様のもとから逃げ出し、羊飼いをしている祭司の娘と結婚しました。そこで、羊飼いとしてずっと働き続けました。

長い月日が流れました。ある日のこと、モーセは、いつものように羊を飼って、ホレブという山に来ましたが、とても不思議な光景を見ました。柴の木の間に炎が燃え上がっているのです。そのような火事はたまにあります。不思議なことは、その柴の木が燃え尽きません。するとどうでしょう。その燃えている木の間から神さまが「モーセよ、モーセよ」と呼びかけられたではありませんか。モーセは「は、はい」と答えるのが精一杯です。すると神さまは、「ここに近づいてはならない。靴を脱ぎなさい。あなたのたっている場所は聖なる土地です。」「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」「わたしはエジプトにいるわたしの民が苦しみを見た、叫んでいるのを聞いた。モーセよ、今、あなたは王様ファラオのところに行かせる。私の愛する民をエジプトから連れ出すのだ。」神さまは、モーセを、イスラエルを救い出すために、選ばれたのです。

考えるとモーセの生まれたこと、危ないところを王女さまに助けられて、エジプトの皇

太子として育てられたこと、そこから逃げ出して羊飼いとして普通の暮らしをしていたこと、全部が神さまの御計画です。それは、神さまが、神さまの民イスラエルを救うという、アブラハム、イサク、ヤコブたちと交わした契約の故です。神さまは、この約束を覚えておられ、そのために、モーセを選び出されたのです。

僕たち私たちは、「生まれる前から神さまに愛されてきた〇〇ちゃんの、誕生日です。おめでとう」と誕生会のときに歌います。ここにいる僕たち私たちは、神さまから選ばれています。まだ赤ちゃんのうちに、知らないうちに、教会に来ている子も、友だちに誘われて来てくれたお友だちも、神様から選ばれているからここにいるのです。まだ大人にはなっていませんが、神さまは、皆さんを必ず、神さまの救い、神さまの栄光のために、教会を通して神さまが大きな働きをさせてくださるに違いありません。神さまが育ててくださるのです。その日のためにも、僕たち私たちは、イエスさまを信じ続けて、教会学校を大切にします。そして、先生たちは皆をそんな子どもたちと期待しています。そして、一番期待し、信じておられるのは、皆を生まれさせ、教会に導いてくださった神さまです。モーセの神さま。アブラハムの神さまです。そしてその神さまは先生の、僕たち私たちの神さまです。
(相馬伸郎)

〔今日の暗唱聖句〕 出エジプト記 2章 24～25節

神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた。

〈ねらい〉

神様に愛されて、神様の子どもとして生まれたことを教えましょう。

〈展開例〉

今日は、モーセさんが生まれてから大人になるまでのお話を聞きましたね。モーセさんは、生まれる前から、神様にイスラエルの人たちを助けるために選ばれていました。そして、神様にとっても愛されていました。だから、エジプトの王様が子どもを皆殺しにしようとしたときも、神様に守られてエジプトの王女に助けられたのです。

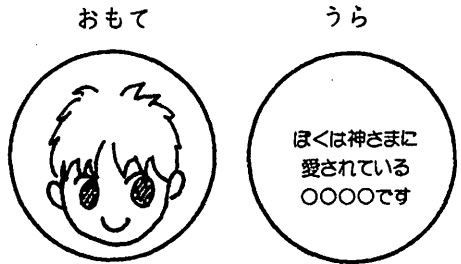
今、教会にきているお友だちも、生まれる前から神様に愛されて、今も神様に愛されています。ここにいる〇〇ちゃんも、△△くんも（一人一人の名前を呼びましょう）、神様に愛されて生まれてきたんだよ。そして、神様は、神様の言葉を聞いて大きくなれるよう、みんなを最初から選んで教会に呼んでくださって、来れるようにしてくださったのです。

神様がここにみんなを呼んでくださっているのですから、みんなは教会にきて神様の御言葉を聞いて、神様と教会が大好きな人になりましょう。

〈やってみよう〉

がいのカードを作ろう！

- ①まるい適当な大きさの画用紙を用意します。
- ②表には、自分の顔を描きましょう。
- ③裏には、「わたし（ぼく）は、神さまに愛されている〇〇〇〇です」と書きましょう。



〈さんびしよう〉

○「うまれるまえから」をうたいましょう。

日本基督教団出版局、『こどもさんびか』、80番

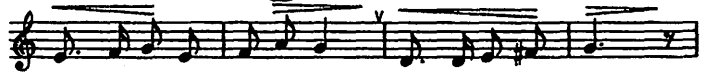
うまれるまえから

富岡 ぬい 作詞 1966
うれしそうに ♩=80

三島 徹 作曲
1966



1. う ま れ る ま え か ら か み さ ま に
2. う ま れ て き ょ う ま で み ん な か ら



ま も ら れ て き た と も だ ち の
あ い さ れ て き た と も だ ち の



た ん じ ょ う び で す お め で と う
た ん じ ょ う び で す お め で と う

(麓聖母)

「ともだちの」の部分に名前を入れてうたいましょう。

〈暗唱聖句〉

出エジプト記 2章 24節～25節

〈学びのポイント〉

1. 神様は、救いのためモーセを用いられたように、私たち一人一人をお用いになる。
2. 神様のために何が出来るかを考え、喜んで出来るようにしたい。

〈展開例〉

モーセは大人になってから、自分と同じイスラエル人がエジプト人にいためつけられ苦しめられているのを見て、誰も見ていないと思い、そのエジプト人を殺して砂に埋めてしまいました。

次の日、イスラエル人同士がけんかをしているのをとめようと、「どうして自分の仲間をなぐるのか」と言うと、「エジプト人を殺したように私も殺すつもりか」と言われてしまったのです。よかれと思ってしたことがわかってもらえなかったのです。

ファラオにも知れて、モーセはミディアンへ逃げ出しました。神様にどうすればいいのか聞かなかったモーセ、自分で何とか出来ると思って逃げ出したモーセ。

それから 40 年間羊飼いをして、80 才になった時、神様はモーセに、語られました。自信のないモーセに、何度も何度も語られました。やっと神様に自分をゆだねることの出来たモーセは、エジプトからイスラエル人を導き出すためにエジプトへ出かけたのです。

神様は私たちを選んで用いられます。神様に自分をゆだねる時、だめだった自分が本当に生かされるのです。モーセのように。

〈祈りましょう〉

生まれたときから、おまもりくださり、かんしゃします。まだ神さまのために、なにもしできないわたしです。モーセさんのように、よばれたら、いつでも「はい」とこたえます。

〈聖書を開きましょう〉

出エジプト記 3章 6節

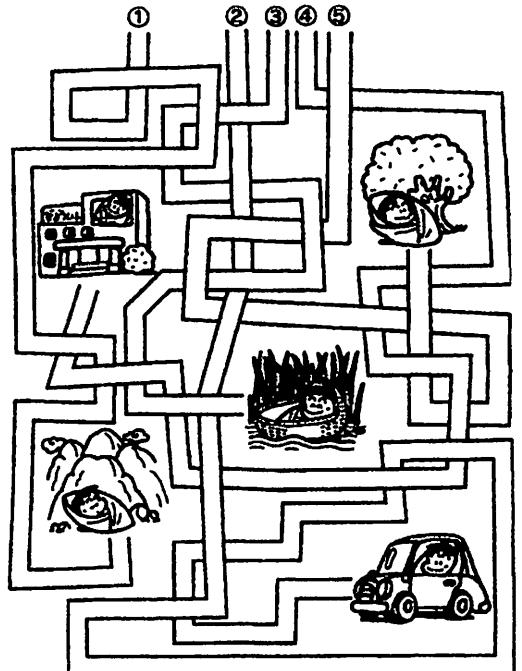
- () をうめて、ことばを完成させましょう。

「わたしは、あなたの () の神である。() の神、() の神、() の神である。」

〈やってみよう〉

かくした赤ちゃん

- モーセは赤ちゃんのとき、どこにかくされましたか。正しい場所に行ってください。



〈ねらい〉

ヤコブの一族がエジプトに来て 350 年ほど経った。その間に、総理大臣だったヨセフのことも忘れられ、イスラエルの人々は奴隷として働かされるようになった。でも、神様はイスラエルの人々を恵み、その数は空の星のよう増えた。そのことは、エジプトの脅威となり、イスラエルの人々を迫害した。そのような中でのモーセの誕生の意味を学ぶ。

〈展開例〉

1. エジプトについてどんなことを知っているか。

→エジプトの学びの準備として、聖書地図などを参考に、エジプトとカナンの地の位置関係を確認するといだろう。四大文明の発祥の地。ピラミッドなどの異国的雰囲気。

2. 聖書の中でエジプトはどんな国だろう。

→経済的また軍事的な大国。それだけに、イスラエルの人々にとっては、恐れ、また、憧れの思いもあったかもしれない。聖書は偽りの神を持つ地として描く（ヨシヤ 24:14 など）。また、聖書の重要な登場人物の多くが、様々な形でエジプト滞在を経験している。アブラハム、ヤコブと子どもたち、エレミヤ、など。イエス様も（マタイ 2:13 から）。

3. ヤコブの一族とその子孫がエジプトに滞在してからモーセの時代までのことを、聖

書は何も記さない。神様は黙っておられたようにみえる。どうしてだろう。

→聖書の歴史には、神様が黙っておられると思われる時代がある。このエジプトの時もそう。なぜかは人間にはわからない。でも、神様は約束を守り、それを行われる。神様が遠くにおられると感じるときにも、神様は私たちを知っていてくださる。神様はエジプトにいるイスラエルの人々の嘆きを聞き、契約を思い起こされた(2:24)。

4. モーセは王女に拾われて育てられる。どうして、そのようなことが起こったのだろう。

→モーセに特別な働きをさせるために、神様はモーセを救い、エジプトの王の一族の中で育つようにされた（使徒 7:17-22）。

5. どのようにして、モーセは助け出されただろう。また、神様はなぜご自分が直接なさらずに、人をお用にいられたのだろう。
- モーセの救いは、王女によるだけでなく、母親の憐れみ、弟を思う姉の機転などを通してなされた。神様がなぜ人を用いられるかはわからないが、それが神様のなさり方。

6. 神様は今も人をお用にいられるのだろうか。

→神様は今も人を用いて神様の尊い働きをなさる。教会の牧師、長老、執事も。そして、私たち一人一人も。場合によっては、神様を知らない人もお用にいられる。

ねらい

- モーセの生涯を学ぶことによって、私たちの生涯も神の計画の中に置かれていることを信じていることができるように導きたい。

展開例

- モーセの誕生と生育を巡る出来事から（男児殺害の命令、ナイル川の葦の茂みに隠す、ファラオの王女の水浴び、実母が乳母となる等）、神の摂理的な導きを考えよう。

- 40歳で失敗したモーセと、80歳で召命を受けたモーセを比較して、人間の計画と神の計画について考えよう。

話し合ってみよう！

- 40歳のモーセの失敗の原因を話し合ってみよう。使徒言行録 7:17-35 を参照。40歳のモーセは、自らの力に依り頼んでいた。

祈り

神からの促しの声を心の内に聞いて、神に導かれる人生を歩ませてください。

○暗唱聖句○

出エジプト 2:24-25

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 出エジプト記 1章 1～14節
- 月 出エジプト記 1章 15～22節
- 火 出エジプト記 2章 1～10節
- 水 出エジプト記 2章 11～25節
- 木 出エジプト記 3章 1～22節
- 金 使徒言行録 7章 17～29節
- 土 使徒言行録 7章 30～35節

☆三二日記☆

テキスト 出エジプト記 12章21～27節

(1) 過越の祭儀

過越の祭儀において動物とその血を用いることは、創造の秩序と深く関係しています。過越の祭儀において、被造物の命が犠牲となり、贖いのしるしとなります。

この過越において起こることは、動物の血を家の入り口の鴨居と二本の柱に塗っていない家の初子を皆殺しにするということです。血を塗っていない家にとって、これは厄災以外の何ものでもありません。ここで塗られる血は、異教の祭儀でなされるような、それ自体が厄災を自動的にしりぞける、厄除けというようなものではありません。この血は神様の約束のしるしであって、その血に何か効力があるというわけではないのです。この血の塗られたところを過ぎ超すと、神様が約束してくださったのです。

このところで塗られる血には命があり、血は命そのものです。イスラエルの人々の命も、エジプト人と同様に死すべき命でした。その命を救い、彼らに命を与えるのは、被造物の命でした。贖いの御業には被造物の命の犠牲が必要とされました。神様から与えられ、犠牲としてささげられた被造物の命と、その命をしるしとする神様の契約によって、イスラエルの子らは命を得ます。被造物の血が身代わりとなって流されることによって、イスラエルの人々の血が流されずにすむのです。

(2) 神様を礼拝するために

イスラエルの人々は、犠牲の動物である傷のない小羊の血によって、生命を得ましたが、それは、ただ子どもの命を救ったというだけではありませんでした。後の契約締結においてさらに明らかにされることですが、彼らは

奴隷の状態にあり、神様を礼拝することを中心として生きる生き方ができない状況にありました。彼らは異教の生活にどっぷりと浸かっており、罪の中に生きていたのです。その罪の支配であるエジプトの中から贖い出されたのです。彼らは、神様を礼拝するために、礼拝者となるために導き出されました。彼らのエジプトからの救出は、罪からの贖いでありました。彼らは小羊の血により、この世に生きる命と共に、神様と交わる真の命に回復されたと言わなければなりません。

(3) 子どもに伝える(共同体の再形成)

この過越の祭儀について、子どもに教え伝えていくべきことが命じられました。しかし、それは単なる回想や、創作童話ではありません。イスラエルの礼拝の中で示される包括的な側面が含まれています。過越は、その祭り(礼拝)の中で繰り返し追体験されるのです。過越を祝うことを通して、まず最初に神様が救いの御業を行ってくださることが明らかにされ、記憶され、追体験されます。過越の御業は一度限りですが、記念し追体験することにより、贖い出された民として、共同体を再形成していくのです。

それは、真の小羊であるキリストによって贖い出された私たちの間でも、起こっていることです。主イエス・キリストの贖いの御業により私たちは救われ、真の命を受けました。私たちは、神様の御前に礼拝を捧げて、礼拝のたびにキリストと出会い、キリストの贖いの御業を記念し、追体験するのです。神様の民が、礼拝において、贖い出された共同体として再形成されていくのです。

(春名義行)

テキスト 出エジプト記 12章21～27節

〔単元のねらい〕

過越の事件は、古いイスラエルにとっては、決定的に重要な事件であった。この祭りを中心にしてイスラエルの祭儀が整えられて行ったのである。過越の祭りは、まさに祭りの頂点である。親は、子らに過越の祭りの意義を教えることが命じられた。これが、言わば信仰教育の核心となる。そうであれば、私どもの教育の核心が聖餐にあることは明らかである。実に、我々の契約の子への信仰教育とは、「聖餐への準備教育」である。聖餐共同体の一員としての自覚を養い育てるために、我々は様々な営みをなす。しかし、その目標が「ここ」にあることを常に意識して取り組みたい。それゆえ、今日の礼拝式で、贖罪の主イエス・キリストを、はつきりと指差し、救いの喜びと感謝をささげたい。

「主の過越」

神さまは、イスラエルの人々がエジプトで奴隷にされていて、とても苦しんでいることをご覧になりました。神さまは、昔、アブラハム、イサク、ヤコブと約束されたことを決してお忘れにはなりません。その約束はイスラエルを祝福するというものです。ですから、神さまはそのために、モーセを生まれる前から選んで、モーセを通してエジプトから救い出すようにしてくださるのです。

神さまの準備された時が来ました。神さまは、モーセに、「エジプトで苦しんでいる人達を救い出すのだ。行きなさい」と命じられました。けれども、最初モーセはこう言ったのです。「神さま、私には力がありません。80歳なのです。お話しするのがへたくそです。だからダメです。」しかし、神さまはモーセを励ましてくださいます。そればかりか、モーセを助けるために、アロンというお話しするのが上手な人を与えてくださいました。こうしてついに、モーセは、勇気をもって、王様ファ

ラオのところに出掛けて行くのです。そしてこう言いました。「わたしの民を去らせて、荒野でわたしのために祭りを行なわせなさい。」ところが、ファラオは言いました。「主って何の何か、お前たちの神さまなんてワシは知らん。決して、出て行かせはしないぞ。働いて働いて働くのだ！」

僕たち私たちも、イエスさまのことをお友だちに伝えてあげようとして、馬鹿にされたり、からかわれたりすることがあります。けれども、神さまは必ず力を与えてくださいます。勇気をもって日曜学校に友だちを誘い続けよう。

さて、そこで神さまは、その強い手でエジプト全土に災いを下して、神さまが生きておられることをお示しになりました。ナイル川が血によって染まってしまったり、かえる、ぶよ、あぶが信じられないくらい増えてしまったりしました。そのような自然災害を9回も起こされたのです。ところが、それでも、

ファラオは、神さまを畏れてイスラエルを脱出させようとはしませんでした。

そこでついに神さまは、最後の 10 番目の災いをくだすことにしました。それは、エジプトで生まれた赤ちゃんのうち、初めて生まれた赤ちゃんは、動物も人間もすべて死んでしまうというものでした。神さまは、モーセにお命じになられました。「イスラエルの人々が死なないように、小羊の血を玄関の二本の柱と鴨居に塗っているなら、わたしの審きは、その家を過ぎこして行きます。あなたがたは、その小羊のお肉を焼いて食べなさい。パンを食べなさい。」

モーセは、人々にこれを告げました。そしてイスラエルの人々はこの神さまの言葉を忠実に守って、実行したのです。ですから、神さまの約束どおり、イスラエルの子どもは誰でも助かったのです。そして、エジプトの人々は最後の最後まで神さまに反抗したので、神さまが予告なさったとおりになってしまうしました。

この出来事から、神さまの民イスラエルは、毎年毎年、過越の出来事を記念する過越祭をお祝いするようになりました。そして大人も子どもも、神さまの御言葉の約束は真実で、確かなことを覚え続けたのです。

それなら、今、教会ではこの過越の祭りをお祝いしているのでしょうか。していません。けれども、今、皆の目の前にあるテーブルを見てください。聖餐桌と言います。ここで、先生たちは大人の礼拝式で聖餐をお祝いします。イエスさまが十字架の上で裂かれたお体をあらわすパンと流された血をあらわすぶどうのジュースを食べ、飲むのです。前にならった聖餐の礼典です。この聖餐のお祝いにあずかる人には、神さまの審きは通り過ぎてしまいます。何故なら、イエスさまが僕たち私たちの身代わりになって、十字架で血を流してくださいましたからです。僕たち私たちは、罪の奴隷として滅びなければならないのですが、イエスさまがあの過ぎ越しの小羊になってくださいましたからです。このイエスさまを信じれば誰でも、罪から救い出され、神さまの子、神さまの民の一員にさせていただきます。ですから、教会は、この聖餐をお祝いしているのです。イエスさまは、僕たち私たちもまた一日も早く、この聖餐を受けて欲しいと願っておられます。招いておられます。僕たち私たちも、そのために祈りしましょう。

(相馬伸郎)

〔今日の暗唱聖句〕 出エジプト記 12 章 26 ~ 27 節

また、あなたたちの子供が、「この儀式にはどういう意味があるのですか」と尋ねるときは、こう答えなさい。「これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである」と。

〈ねらい〉

過越の出来事が主イエス・キリストによって完成し、主イエスにより救いの恵みが与えられている。過越が主イエスを指し示す出来事であることを伝えましょう。

〈展開例〉

- 過越の出来事が子どもの心に印象的に残るように、エジプトに下された十の災いや過越の出来事、また出エジプトの出来事を描いた絵本や聖書物語の読み聞かせをしましょう。紙芝居をするのもよいでしょう。
- 読み聞かせのあとで、今日の御言葉について、振り返る時を持ちましょう。
- エジプトからイスラエルの人たちが救い出されるとき、エジプトには大きな悲しい出来事が起こりました。それは、エジプトのすべての生き物の、最初の子どもが全員殺されたのです。
でもイスラエルの人たちは、誰一人も死

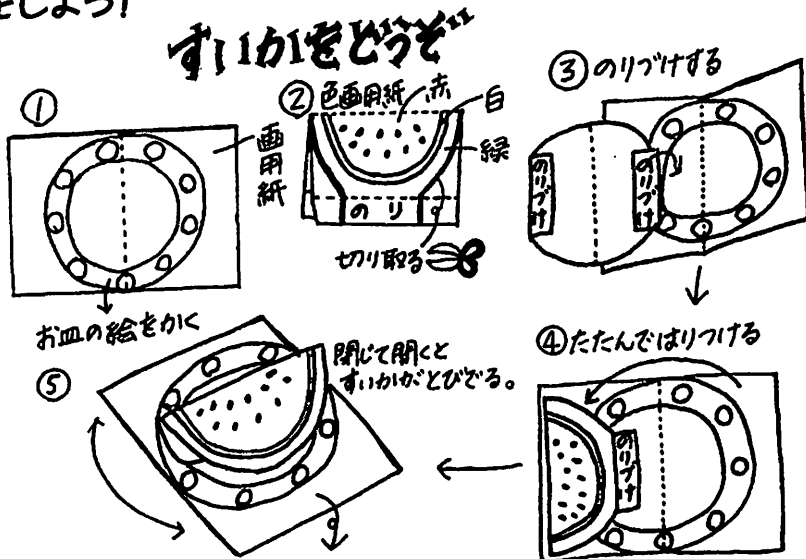
にませんでした。それは、家の入り口の柱と鴨居に塗りなさいと神様から命じられていた小羊の血を、みんな塗っていたからです。神様は小羊をイスラエルの人たちの身代わりにして、イスラエルの人たちを怖い死の罰から救い出してくださいました。

神様がイスラエルの人たちの身代わりに小羊を殺されたことと、イエス様が十字架に架かってくださったことは同じことです。イエス様が十字架に架かってくださって、死んでくださって、このイエス様を信じることによって私たちの罪の心をきれいにして、罪の中から救いだしてくださるのです。これは神様がみんなを大好きだからです。だからみんなが救われるように神様はみんなの罪の身代わりの小羊としてイエス様を与えてくださったのです。

このイエス様を信じて神様に私たちの罪も赦していただきましょう。

〈やってみよう〉

工作をしよう!



〈暗唱聖句〉

出エジプト記 12章 26節～27節

〈学びのポイント〉

1. イスラエル人をエジプトから救い出された神様は、私達の身がわりにイエス様を送ってくださった。
2. パンとブドウ酒によって十字架のイエス様をあおぎ、新しいいのちをいただいたことを喜び感謝するのが聖餐式。
3. 自分の口でイエス様は主であると告白できるよう子どもたちを励ましたい。

〈展開例〉

神様はエジプトからイスラエル人を救い出されるために、10の災いの最後の災いをエジプトに下されました。それはエジプトの人も家畜も、初子が死ぬというものでした。イスラエル人は神様が命じられたとおり小羊の血を柱とかもいに塗り、やいた小羊の肉と、

酵母を入れないパンを苦菜をそえて食べ、その夜は外に出ませんでした。神様の救いを思い出して感謝するための祭りが過越しの祭りです。このことを必ず子どもたちにも教えなさいと、神様はおっしゃいました。エジプトの奴隷だったイスラエル人を救い出された神様は、罪の奴隷だった私たちをイエス様をとおして救われます。

イエス様は私たちの身がわりに十字架にかかって死んでくださいました。パンを食べ、ブドウ酒を飲むことによって、十字架のイエス様を見て、喜び、感謝するのが聖餐式です。自分の口で「イエス様は主です」と告白できる日を楽しみにしています。

〈祈りましょう〉

イスラエルのひとびとを、すくわれた神さま。わたしたちに、イエスさまをくださったことを、なによりかんしゃします。いつでも、イエスさまといっしょに、いさせてください。

〈聖書を開きましょう〉

出エジプト記 12章 27節

- () をうめて、ことばを完成させましょう。

「こう答えなさい。『これが主の () のぎせいである。

主が () をうたれたとき、() にいた () の人々の家を () し、われわれの家を () ののである』と。」

〈やってみよう〉

- 種なしパンを作ろう！

小麦粉を耳たぶくらいの柔らかさにこねて、ホットプレートで焼いて食べよう。

- なぜ種なしパンを食べたのかな？ 考えてみよう。

〈ねらい〉

出エジプトのときに起こったことを確認するとともに、その新約的な意味を学ぶ。「まことの過越、神のこひつじ、十字架にほふられ、愛はしめされる。」(讃美歌第二編 100:5)。

〈展開例〉

1. エジプトのファラオが、イスラエルの人たちがエジプトから出ることを拒んだとき、神様はモーセとアロンを通して、エジプトに10の災いを与えられた。それらの災いを言ってみよう。

→生徒たちから答えを聞いた後、新共同訳聖書の見出しなどを利用してそれらを確認する。最後は初子の死。

2. 災いの最大のものは何だったか。

→初子の死。それは、エジプトの中の人間も家畜にも行われた。

3. 過越に、神様は何を行うようにと命じられたか。

→家族ごとに小羊(山羊)を屠り、その血を家の2本の柱と鴨居に塗る。肉は焼いて、酵母を入れないパン、苦菜とともに食べる。食べるときは腰帯を締め、靴を履き、杖を手にして、急いで食べる。

4. 過越のときに行われたことにはどういう意味があるのか。

→血が塗られた家には初子の死の災いがもたらされないため。その家では神様の裁きが過ぎ越し、災いから逃れられた。つまり、小羊の血は初子の死の身代わりと見ることができる。そのほかのことは、あわただしくエジプトを出ることのため。イスラエルの人々は、その意味をいつまでも忘れないため、神様のご命令により、後の時代まで祭りの儀式としてこれらのことを行った。

5. 過越とイエス様との関係は？

→イエス様も過越の祭りを祝われ、最後の晩餐も弟子たちと祝った過越の食事だった(マタイ 26:17 から)。しかし、イエス様こそが、罪に対する神様の裁きによって滅びるべき人間の身代わりとなられた真の過越の小羊だった(コリント一 5:7)。

6. 今、教会では過越の祭りをしているのか。

→新約の時代、過越の祭りは聖餐の礼典に代わった。真の犠牲(贖い)であるイエス様の十字架を記念するため、教会で信仰告白をしたクリスチャンは、喜びをもってイエス様の肉と血をあらわすパンとぶどう酒をいただく。

ねらい

- 過越の犠牲が主イエスの十字架の血による罪の赦しの予表となっていることを理解する。

展開例

- 人の命の源が神の命に由来していることを、創世記1～2章から確認しよう。神がお与えくださった過越の恵みにより、罪と死から命へと変えられたことを学ぼう。

- 過越の恵みが、伝承として、子どもに繰り返して教えられ、受け継がれたことを学ぼう。

私たちにおいても、主イエスの恵みが繰り返して示され、受け継がれている。

話し合ってみよう!

- 人間の命が植物や動物の命の犠牲によって支えられていることを、話し合ってみよう。

祈り

神の大いなる恵みに感謝します。

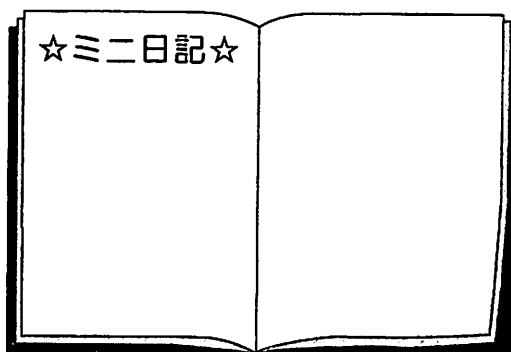
○暗唱聖句○

出エジプト 12:26-27

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 出エジプト記 7章14～21節
- 月 出エジプト記 7章25節～8章11節
- 火 出エジプト記 8章12～28節
- 水 出エジプト記 9章1～35節
- 木 出エジプト記 10章1～29節
- 金 出エジプト記 12章1～20節
- 土 出エジプト記 10章21～36節



(1) 火の柱と雲の柱

出エジプト記 14章 1節～31節には、紅海を渡る出来事が書かれています。これはエジプト脱出において非常に大きな出来事ですが、その前に、火の柱と雲の柱について見ておく必要があるでしょう。それは、この火と雲の柱は、出エジプト全体に、またイスラエルの歴史と人々のあり方に、非常に大きな意味があることだからです。

神様の契約に対する真実と大いなる御業によって、イスラエルの民はエジプトの地から贖い出されました。神様はその民を昼は雲の柱、夜は火の柱をもって導かれました。火や雲は、旧約聖書の中ではしばしば神様の御臨在や顕現を示す現象です。すなわち、火の柱と雲の柱によって、神様がイスラエルの民のもとに御臨在しておられたことが表されているのです。つまり、神様がただモーセを用いらただけではなく、神様御自身がいつも民と共におられたのです。

(2) エジプト人と葦の海に挟まれる

神様が共におられ、神様に導かれてエジプトを脱出した民でしたが、その民に脅威が迫ってきます。ファラオとエジプトの民が、イスラエル人を逃亡させたことを後悔して追ってきたのです。イスラエルの民の目の前には葦の海が迫り、後ろにはエジプト人が迫ってくるという状況の中で、彼らには逃げ道は残されていませんでした。イスラエルの民は命の危機の中に置かれました。彼らには、敵が迫って来る一方で、神様が遠ざかっているように思えたでしょう。恵み深い大いなる御業の後だけに、なおさらその思いは強くなったことでしょう。

(3) 葦の海を渡る

この危機的な中で、神様のご計画が進められ、神様の偉大な御業が示されます。

神様は民に落ち着くように命じます。民は逃げるのではなく、持ち場にあつて身構えるべきなのです。しかし、彼らが戦うのではなく、神様が彼らのために戦われます。その救いの御業を見るために、その持ち場にあつて身構えるべきであるのです。モーセは「もう二度と、永久に彼らを見ることはない。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」と命じ、神様の完全な救いの真実を示しています。神様はイスラエルをエジプトからこのところで完全に解放しようとしておられるのです。神様の救いの御業によって、民は奴隷として連れ戻されるのではなく、自由の中へと導き入れられます。

神様は、御自身のご計画に基づいて救いの御業を遂行なさいます。まず神様御自身がイスラエルとエジプトの間に割って入り、エジプト人が近づくことが出来ないようになさいます。同時に、神様が命じられたとおりにモーセが導いて、葦の海が二つに分かれ、イスラエルの民はまるで乾いた地を歩くように海の底を歩いていくのです。彼らが渡り終えて、エジプトの軍勢が海に入り、彼らは海に飲み込まれました。イスラエルは神様の御手により完全にエジプトから救い出されたのです。

神様は、どのような状況の中にあつてもご自身の民と共におられ、民に先立って進み、民を救い出してくださいます。そして、人間の思いをはるかに超えて、民のために御自身の摂理の御業を行い、民を導いてくださるので

(春名義行)

テキスト 出エジプト記 14章

〔単元のねらい〕

旧約聖書の中心は、出エジプトという救済事件にある。これこそ、イスラエルの救いであり、主なる神をイスラエル共同体の神として経験するときとなった。使徒パウロは、この出来事を新約の洗礼になぞらえた（コリントの信徒への手紙一 10章2節）。この出エジプトの壮大な出来事を壮大に物語り、神の救いの確かさを子らの心に刻みたい。これが、キリストが共におられたゆえの救いの御業であり、何よりも今日ここでささげる礼拝式においてこのキリストの現臨があることを気づかせたい。祈りつつ準備し、語ろう。

「出エジプト」

神さまは、モーセを用いてエジプトにいる大人の男の人だけでも 60 万人というたいへん多くの人々を連れ出しました。10 の災いの最後の災い、過越の出来事によって、どうとうエジプトの王様ファラオは、イスラエルの人々を去らせたのです。

この大勢の人々は、荒れ野を進んで行きました。神さまはいつも彼らと一緒にいてくださいました。そのしるしに、昼は雲が柱となってそばにあって、鋭い日差しはやわらげられました。夜になると火が柱のように燃え上がって、彼らの足もとを照らし出しました。イスラエルの人たちが疑わないように、その信仰が弱くならないように目に見える形でお示しくださったのです。

さあ、イスラエルの人々はどうなるのでしょうか。神さまには、深い御計画がありました。ひとつは、エジプトの人々に、私たちの神さまこそ真の神さま、主であるということをとことん明らかにしようとしたのです。もうひとつは、イスラエルの人々にも、主なる神さまがどんなに偉大で力ある、比べるものなど全くない唯一の神さま、約束を決

して破らない真実の神さまであられることを明らかにしようとしたのです。そこで主なる神さまは、モーセに「引き返して海辺に宿営しなさい」と命じられました。それは、ファラオたちが、「ああ、イスラエルのやつらは、海を越えて行けないで困っているのだ、すぐに駆けつけて、エジプトに連れ戻して、奴隷にしてやらねば」と考えさせるためなのです。

すると、どうでしょう、やっぱり、ファラオたちは、エジプトの戦車のすべてを走らせて、追いかけたのです。大軍隊が走る音が遠くから「ゴー、ゴー」と鳴り響いて来ます。数え切れない兵隊達が「待てー、待てー」と叫んで近づいてくる声が鳴り渡って来ます。そして、ついに目の前に彼らの姿が現われたその時、イスラエルの人々は怖くて怖くて叫び出しました。「ああ、こんなところでころされたくないよお。エジプトの奴隷であったほうが良かったのに、主なる神さまとモーセが悪いのだ！」しかし、そこで、モーセは落ち着いてこう言いました。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行なわれる主の救いを見なさい。主があな

私たちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」

こう言うとモーセは、神さまに命じられたとおり、杖を高く上げ、手を海に触れました。すると、激しい風が吹き始めました。その風は、モーセが触れた海の辺りをまっすぐに吹き抜けて、ちょうど海の水を押し上げてしまったのです。海の底が見えました。海の水が大きな壁となったのです。水の壁が出来てしまったのです。波のしぶきだけがぬらすだけで、海の底は乾いた地面になりました。

イスラエルの人々は、この海の中を歩いて岸辺に渡る事ができたのです。まるで夢を見ているようでした。けれども本当のことなのです。追いかけてきたエジプトの戦車部隊は、雲の柱、火の柱によって近づく事が出来なくされてしまいました。そして、イスラエルの人たちが向こうの岸に渡り終えたとき、ファラオたちは「これはまずい。あの主なる神が我々と戦っているのだ、逃げろ逃げろ。」

とその時、モーセはもう一度、神さまに命じられるままに海に向かって手を差し伸べました。すると、今まで壁になっていた海の道が一気に元に戻ってしまったのです。その中にいたエジプトの軍隊は全滅しました。助かった人は誰もいませんでした。

こうして、神さまは、イスラエルの人々を約束どおり完全に救ってくださったのです。これは、事実です。こんなすごいことが本当に起こったのです。ですから、イスラエルの人たちは、神さまが天と地を創造してくださったのだということを心の底から信じてことができました。こんなにすごいことを目の前でしてくださった神さまこそ、生きておられる真の神さまだと分かったのです。

それなら、僕たち私たちは、毎週ここで礼拝をささげていますが、イエスさまは本当の神さまだ、天地を造って、僕たち私たちといつも一緒にいてくださって、お守りくださる神さまだと分かっていますか。信じていますか。「イエスさまにできないことはない。天のお父さまが約束してくださったとおり、本当に僕は神さまの子だ、わたしは神さまの子どもです」と信じていますか。イエスさまは、僕たち私たちのこの礼拝式の場所におられます。目には見えませんが、これは事実です。どうぞ、そのことを忘れないでください。そして、お家に帰って、学校や幼稚園に行っても、そこにイエスさまがいっしょにいてくださることも信じてください。「天のお父さま、イエスさま」とお呼びしてください。

(相馬伸郎)

〔今日の暗唱聖句〕 出エジプト記 14章 14節

主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。

〈ねらい〉

主イエス・キリストは、どんなときにも私
たちと共にいてくださり、守ってくださるこ
とを伝えましょう。

〈展開例〉

今日のお話はすごかったね。イスラエルの
人たちがエジプトの兵隊からもう逃げること
ができなかったときに、神様は海の水を
分けて、そこを通れるようにしてくださった
んだよね。神様は、目には見えないけれど、
イスラエルの人たちといつも一緒にいてくだ

さり、約束の地に入るまで、守ってください
ました。

神様は今も私たちのためにそんなすばらし
いことをしてくださいます。イエス様はイエ
ス様を信じるお友だちといつも一緒にいてく
ださるのです。みんなの目には見えないけれ
ど、イエス様はみんなと一緒にいてみんなを
見守り、助けてくださいます。みんなもその
ことを信じましょう。神様はみんなを助けて
力を与えてくださるお方なのです。

〈やってみよう〉

波を越えていこう

○縄跳びを使ったゲームをしましょう。暗れていれば外で遊ぶのも楽しいかも！

用意するもの・・・縄跳びの縄（普通の縄跳びで十分です）

「大波小波」と同じ要領です。

○遊び方

縄の両端を二人で持ち、低い姿勢になり、地面につけて縄をのばしましょう。

縄を揺らして波を作ります。最初は横に揺らしてだんだん大きな縦の揺れにして
いきます。

縄にさわったら揺らす人と交代します。

先生が二人で縄跳びを揺らすときは次々と飛ばしてあげるとおもしろいです。

子どもが足を引っかかないように気をつけましょう。

〈暗唱聖句〉

出エジプト記 14章 14節

〈学びのポイント〉

1. 雲の柱、火の柱は、神様が共にいてくださるしるし。エジプト軍が海に沈んだのは、この戦いが神の戦いであることを示している。
2. 同じ神はひとり子イエス様を私たちに送って、罪の奴隷より解放して下さり、神の言葉である聖書によって導いてくださる。
3. そして聖霊なる神が、今もここに共にいて私たちの為に戦ってくださっていることを子どもたちに知らせたい。

〈展開例〉

イスラエル人は、昼は雲の柱によって、暑い日ざしから守られ歩くことができました。夜は火の柱によって足もとが明るく歩くことができました。そして神様が一緒にいて導いてくださることがよくわかりました。

エジプト軍が追いかけて来て、すぐそばま

でやって来た時、エジプト軍とイスラエル人の間に雲の柱があって、エジプト軍は近づくことができませんでした。そして、海の水が分かれてイスラエル人が渡りきったあと、海がもとどおりになり、エジプト軍は海に沈んでしまいました。神様が戦ってくださったのがよくわかりました。

エジプトの奴隷だったイスラエル人が救い出されたように、私たちはイエス様によって罪の奴隷から救い出されました。私たちには聖審があります。誰でも手にとって読むことができます。読むと神様がいつも私たちと一緒にいてくださること、導いてくださること、戦ってくださることがよくわかります。今ここのでも神さまが私たちと一緒にいてくださるのです。

〈祈りましょう〉

いつもたすけてくださる神さま。ときどき、しんばいなことに出会います。でも神さまがそばにおられます。せいしよをまなび、お祈りするたびに、神さまの子であると信じます。

〈聖書を開きましょう〉

出エジプト記 14章 14節

○みんなで声を出して読みましょう。

〈やってみよう〉

○一分間、静かに目を閉じている。一分たつたと思ったら、静かに黙って手を挙げよう。

だれが一番、一分に近いかな？

○次は三分間にチャレンジしよう。

※静かに神様に祈る訓練として行いましょう。

〈ねらい〉

旧約聖書の最大の出来事とっていいだろう。このことによって、イスラエルの民は、自分たちが神様と特別な関係にあることを、決定的に知ることとなった。それとともに、神様は、神様から離れているイスラエルの人々に、出エジプトにおいて示された神様とイスラエルの関係を思い起こすように、繰り返し求められた。また、この関係は旧約の民だけに与えられたものではなく、その関係の中に、すべての神の民が置かれている。

〈展開例〉

1. 後ろは海、前にはエジプトの軍隊が迫ってくる。そのような中、モーセが海に向かって手を差し伸べると海は二つに分かれ、イスラエルの人々はそこを渡ることができた。なぜこのようなことが起こったのだろう。

→神様のなしてくださった大きな奇跡。人間の目にはまったく不可能と見えるときも、神様は何でもなさることがおできになる。

2. 海の中に飲み込まれて死んだエジプトの人々は気の毒に思える。十戒で、「あなたは殺してはならない」とご命令になるのに、なぜ神様はそのようなことをなさるのかも疑問だ。さらに、神様は、イスラエルの人々がエジプトを出る前に、「隣人（エジプトの人々）から金銀の装飾品を求め」（11:2）、それを自分たちのものにするようにされた。それも「盗んではならない」に反するのではないか。

→それまでイスラエルの人々を虐げ、また、神様の言葉に背いた（神様がかたくなにされた）ファラオとエジプトの人々への裁きと理解することができる。それでも現代人には、ひっかかるころだろう。一方、旧約の人々は、単純に自分たちの救いを喜んでるようにみえる。神様と自分たちの近さ、そして自分たちを特別な民として選んでくださった神様を素直に喜んでいようだ。現代人は、裁き（そして選び）について、人間的な理性を重視しすぎているのかもしれない。出エジプトは、神様と神様の選びの民が特別な関係にあることを示し、その関係を確かなものにする出来事を記しているといえるのだろう。そこには、ご自分の民に対する、神様の徹底的な愛情（熱情の神）が示され、それを喜ぶ人々の姿がある。

3. イスラエルの人々はこの神様の奇跡をいつまでも覚えていることができたか。

→否。神様に背くことを繰り返した。それは、神様との関係を忘れたからだろう。

4. 私たちの毎日の生活の中では、おそらく出エジプトのような奇跡を経験することはない。神様は、今の時代には働かれないのか。

→今も働かれておられる。私たちの救い、それはある意味で出エジプトよりも大きな出来事。それも神様がなしてくださったことだ。

ねらい

- 出エジプトを洗礼（幼児洗礼を含む）の出来事とみなして、神の大きなみわざと導きを教えてみよう。

展開例

- イスラエルの民は、主なる神のみわざにより、どのように守られ、導かれただろうか。火の柱（夜、足もとを照らす）、雲の柱（昼、強い日差しから守る）や、出エジプトの出来事（追いかけてきたファラオを滅ぼす）について考えてみよう。

- 「皆、雲の中、海の中で、モーセに属する

者となる洗礼を授けられ」（コリント一 10:2）と、パウロは、出エジプトを洗礼の出来事とみなしています。私たちは、洗礼を受けてから、神にどのように守られ、導かれているのだろうか。

話し合ってみよう！

- 主イエスの十字架の死と復活の出来事を、出エジプトの出来事と比較して、話し合ってみよう。

祈り

神の偉大な力によって救いが成就したことを感謝します。

○暗唱聖句○

出エジプト 14:14

○祈りの課題○

聖書日課

日	出エジプト記 13章 17～22節
月	出エジプト記 14章 1～4節
火	出エジプト記 14章 5～14節
水	出エジプト記 14章 15～25節
木	出エジプト記 14章 26～31節
金	出エジプト記 15章 1～5節
土	コリント一 10章 1～4節

☆三日記☆

テキスト 出エジプト記 24章

(1) 契約の締結と「神の民」の成立(1-8)

創世記のイスラエルは家族にすぎませんでしたが、出エジプト記においては「民」(1:9)と呼ばれるほどの大集団でした。その彼らは、すべてがアブラハムの子孫、血縁的なつながりのある縁戚関係にあったのではなく、そこには「種々雑多な人々」(12:38)も加えられていました。エジプトで抑圧され奴隷とされていた雑多の人々の寄せ集まり、それがイスラエルです。こんな雑多な者たちの集まりが、どうして一つになりえましょうか。正式にイスラエルが成立するのは、この24章での神との契約締結においてです。

種々雑多な人々を一つに結び付けていく一致点が神との契約です。ここでモーセは、「主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせ」ます(3)。ここでの「主のすべての言葉」とは、20章1節の「すべての言葉」、つまり「十戒」のことで、「すべての法」とは21章1節以下で語られた「彼らに示すべき法」、つまり20章22節から23章にかけて論じられている「契約の書」のことで、ここで彼らが神と契約を結んだことで、彼らは神の民、「ご自分の宝の民」(申命記14:2)、神ご自身のものとされ、その結果彼らは神の言葉(戒め)に生きる者とされたのでした。契約は「これらの言葉に基づいて」結ばれたとあるとおり(24:8)、「これらの言葉」、つまり十戒に基づいて締結されました。こうしてイスラエル、神の民は、神の言葉(戒め)に従い、守り、それに生きる集団として成立したのです。この神の言葉(戒め)に従って生きることを決意し、約束して、神の民とされるのです。

(2) 贖いによって神の前に立つ者に(9-18)

ここで契約締結にあたって、彼らは飲み食いしました。「神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかったの、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ」のでした。その前に彼らは「和解の献げ物」をささげて礼拝し、祈りました。神の前に立ち、神に祈りました。聖なる神に出会う者は滅ぼされ、殺されなければならないはずなのに、本来は立ちえない方の前に立って祈り、飲み食いしたのです。それは神が手を伸ばされなかったからで、それは「和解」が成り立っていたからです。

祈りとは死ぬことです。神の前に立つ者は死ななければならないからです。しかしそこでなお死なずに、この方の前に立って祈りうるのは、「贖い」があるからです。ここで身代わりの犠牲がささげられているように、贖いによって、罪の赦しがあるから、死なずに神の前に立ち、祈ることが許されています。

そのためには「契約の血」が流されなければなりません。血が流されることで、初めて契約は批准され、締結されたのです(創世記17章)。

聖餐において語られる「これは罪の赦しを得させるために、わたしの血でたてられた新しい契約の血」とは、このことを意味しています。私たちが神の民として、神の前に立って祈ることができることの背後に、犠牲がささげられました。神によって私われた犠牲、イエス・キリストです。この方の血の故に、私たちと神とは契約を結び、神の恵みのうちに生かされて、神の言葉(戒め)に生きる者へと召し出されたのです。(三川栄二)

テキスト 出エジプト記 24章

〔単元のねらい〕

十戒（律法）を与えて永遠の愛を約束し、この愛のもとで生きるよう命じてくださる恵みと契約の神を礼拝する。この説教では、聖餐への招き、洗礼（信仰告白）への招きをしている。もとより、いずれの日曜学校説教もこの焦点を欠いた説教はありえない。キャンプや夏期学校でも、一人の子どもの魂と向かいあう牧会の業がなされますように。

「契約のしるし」

イスラエルの人々はモーセを通してエジプトから解放されました。海の底を歩いて渡った喜びと感謝の歌を高らかに歌いました。神さまは、ご自分の民のイスラエルを愛しておられます。その神さまの愛は、これまでのアブラハム、イサク、ヤコブのことを思い出しても、モーセを通してなされたすばらしい出来事を思い出しても良く分かりますね。でも、今、神さまはこれからもずっとずっとイスラエルを愛し、守り、育ててくださると祝福し、約束してくださるのです。

その証に、神さまはモーセにシナイの山に登らせ、そこで十の言葉、十戒を与えられました。十戒の前書きを覚えていますか。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」です。「このわたし、主なる神があなたがたイスラエルの神さまなのだよ、あなたがたをエジプトから救い出したのはこのわたしだよ。わたしの愛の中でいつまでも生きて行きなさい。二度と、奴隷になってはいけませんよ。そのために、わたしの掟を喜んで受け入れ、感謝して生きて行きなさい。」そのようにして十戒がモーセに与えられたのです。

モーセは、神さまが直接に石の板に記してくださった十戒ばかりか、神さまが語られたすべての言葉を書物に記しました。それを契約の書と言います。神さまの約束が記されているのです。神さまの命令が記されているのです。そして、モーセは、その契約の書を、声を響かせてイスラエルの人々に読んで聞かせました。これを聞いた神の民は、声を合わせて「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います。」と約束しました。とても喜んだのです。神さまの愛の言葉が自分達に与えられたのですから当然です。

すると、モーセは、動物を屠って神さまにささげました。雄牛の血を祭壇に注ぎました。そしてもう一度、契約の書を読んで聞かせました。人々はまた、顔を生き生きさせて、声高らかに約束しました。「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います。」それを見たモーセは、このように言いながら、神の民に残りの雄牛の血を注ぎかけました。「見なさい。これは主がこれらの言葉に基いてあなたたちと結ばれた契約の血です。」

僕たち私たちは、この間も、聖餐の礼典について何度も学びました。先生たちは、大人

の礼拝式で、イエスさまが十字架の上で流された血を意味するぶどうのジュースを飲みます。その時、牧師先生が「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲むたびにわたしの記念としてこのように行いなさい」と聖書の言葉を読んで聞かせてくれます。そして先生は、このぶどうのジュースを配ってくださるのです。

先生は、大人の礼拝式でこの聖餐にあずかることを心から感謝しています。何故なら、目には見えないけれども、ここにイエスさまが本当に一緒にいてくださること、そのイエスさまと先生とが一つに結ばれて、イエスさまの弟、神さまの子とされていることを心から信じていることができるからです。そればかりか、イエスさまのお体を意味するパンを食べることによって、先生の体がイエスさまの体の一部分とされていることも信じます。そして、これは独りぼっちで食べたり飲んだりするのではなく、教会の仲間と一緒にいただきます。ですから、教会の人たちは兄弟であり、姉妹になります。確かに、イエスさまのお体は、ここにはなく、天のお父さまのおられるところにおられます。だから、高く天を仰いで、イエスさまを天のお父さまを仰ぎ見ます。するとますます、「天国に行きたいなあ」と思いが湧きます。イエスさまと天のお父さまが慕わしくなります。そして、今すぐには、天に行けなくても、この地上で、イエスさま

と一緒に歩いてくださることが分かってくるのです。だから、嬉しくなります。イエスさまとの契約、神さまの契約を守りたくなります。守ろうと力が湧きます。

神さまは、昔の神の民イスラエルの人々にも、僕たち私たちにも、契約を与えてくださったのです。これは、一方的な契約です。神さまのほうで、進んで救いと祝福、愛と命の約束をしてくださったのです。ですから僕たち私たちも、喜んで「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と約束したいのです。

でもそれなら、皆の中でこのように考えるお友だちがいるかもしれません。「僕たち私たちは、聖餐にあずかれません。だったら、神さまの子どもにはなれないのかなあ。」そうではありません。今もう、イエスさまを信じているお友だちは、この礼拝式でイエスさまを礼拝しているでしょう。この子どもの礼拝式は、大人の礼拝式の真似をしているのではありません。つまり、本当の、本物の礼拝式です。だから、大丈夫です。けれども、「ああ、もっともっと、イエスさまが生きておられることが分かたら嬉しいなあ。イエスさまを信じて、イエスさまの言葉、神さまの言葉に従って生きてゆきたいなあ」と思っているなら、洗礼を受けて、信仰を言い表して聖餐を受けられるようになってください。

(相馬伸郎)

〔今日の暗唱聖句〕 出エジプト記 24章8節後半

「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

〈ねらい〉

契約は神様の子どもとされていることのしるしであることを教え、神さまとの約束が与えられていることを喜ぶよう導きましょう。

〈展開例〉

神様はイスラエルの人たちに十戒という十の約束を与えて、神様の思みの内に生きることができるよう導いてくださいました。神様がそのように約束をしてくださるのは、神様がイスラエルの人たちを宝物のように思ってくださいっているからです。約束が与えられて、神さまの御心が示されているから、私たちは神様に従って生きることができます。

神様は、その約束を、イスラエルの人たちと同じように、僕たちや私たちにもお与えく

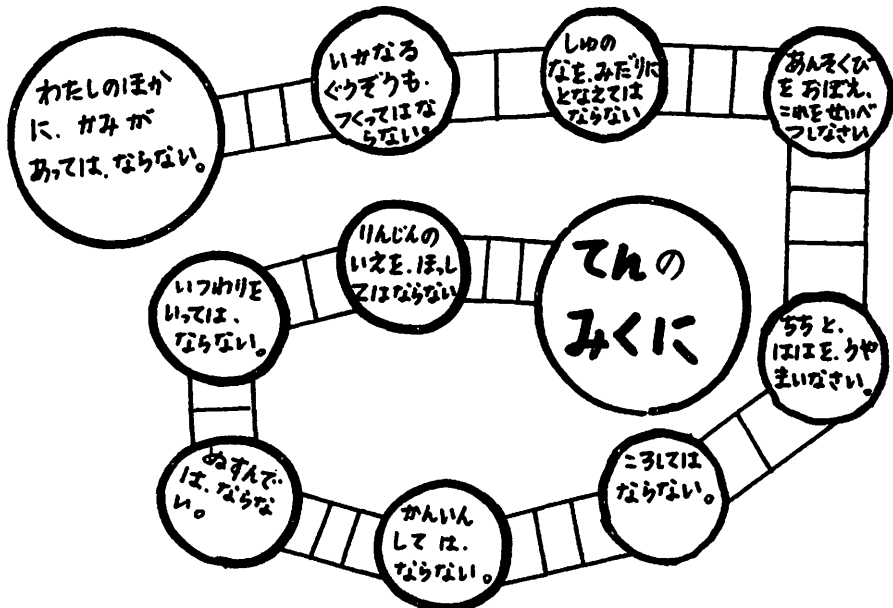
ださいました。イエス様を信じる私たちにも与えられています。神様は、私たちの悪い汚い心を赦してくださり、神様との約束を守って生きていくようにと、カづけていてくださいます。私たちは、約束を守ることが難しいのですが、神様が赦してくださっているから、またがんばることができるのです。

これは、神様が△△くんや〇〇ちゃんのことを宝物だって思ってくださいっているからです。みんなも、神様がみんなのためにくださったイエス様を信じましょう。そして、神様の御言葉を一生懸命聞きましょう。そうすると、いつの間にか、神様のお約束に従うことができるようになるのです。神様はそんなみんなの姿をとっても喜んでくださっています。

〈やってみよう〉

十戒（十の約束）すごろく

- カレンダーなどの裏紙にすごろくを書いて、さいころを振って遊びましょう。
 - 10のポイントを造り、円の中に十戒を書いておきます。
- 「天国」めざして歩みましょう。



〈暗唱聖句〉

出エジプト記 24章 8節後半

〈学びのポイント〉

イスラエルの民が信仰を告白したように、神は子どもたちに「イエスは救い主です」と信仰を告白することを願っておられる。

〈展開例〉

イスラエルの民は、エジプトに下された災い、雲の柱、火の柱、海が分かれば海を渡ったことなど、神様の御業を思い起こしています。

モーセは、神様から与えられた十戒を携えてシナイ山を下りてきました。モーセから神の言葉を聞き、民は声をそろえて「私たちは主が語られた言葉をすべて行います」と告白しました。そして、犠牲のささげものをしました。罪を犯すイスラエルの民の身代りに動物（小羊など）が死に、血が流されるのです。

イエス様が、ご自分を犠牲のささげものと

されるまではたくさんの動物が死にました。

イエス様の十字架の死は一度きりですが、私の為にイエス様が死んでくださったのだと信じるすべての人の為に十字架に架かられたのです。罪が赦され神様の子どもとされ、永遠の命をいただくのです。神様はみんなが「イエス様は救い主です」と信仰を告白することを願っておられます。

聖餐式ではパンを食べブドウ酒を飲みます。パンは裂かれたイエス様の身体、ブドウ酒は流されたイエス様の血を表しています。イエス様の十字架を喜んで感謝しているのです。早く信仰を告白できるといいですね。

〈祈りましょう〉

イエスさまが、わたしたちのために、血をながされたことを学びました。イエスさまの愛に感謝します。わたしもイエスさまとの約束を守ります。イエスさまこそ救い主です。

〈やってみよう〉 モーセは、シナイ山で神さまから十戒をいただきました。

の中にことばを入れて、完成してください。

① あなたには <input type="text"/> をおいて ほかに <input type="text"/> があってはならない	⑤ あなたの <input type="text"/> をうやまえ。 そうすれば、あなたの <input type="text"/> 、 主が与えられる土地に長く生きることが できる
② あなたは、いかなる <input type="text"/> も つくってはならない	⑥ <input type="text"/> してはならない
③ あなたの神 <input type="text"/> の名を みだり に <input type="text"/> ならない	⑦ <input type="text"/> してはならない
④ <input type="text"/> を心にとめ、 これを聖別せよ	⑧ <input type="text"/> ではない
	⑨ <input type="text"/> にかんして <input type="text"/> してはならない
	⑩ <input type="text"/> の家を <input type="text"/> しては ならない

〈ねらい〉

葦の海を渡った出エジプトは旧約聖書全体の最大の出来事かもしれない。しかし、イスラエルと神様の関係を示す点では、この場面がクライマックスであると思われることができる。

〈展開例〉

1. ここにでてくる大切なことばに「契約」

がある。今日の契約にはどんなものがあるか。家を建てる場合の契約で考えてみよう。

→ 依頼主はお金を払う約束(時期も)をする。建築業者はある時期までに、合意した仕様の家を建てる約束をする。(場合によっては)どちらかがそれを実行しなかった場合のペナルティーについても約束する。それは、依頼主は望んだ家を手に入れ、建築業者は代金を手に入れて、どちらもが満足できる利益を得るための約束。

2. 神様と人間の間での契約はどんな内容だろうか。

→ 神様は、イエス様を救い主と信じ従う人に、本来、罪のために滅ぶべき者であったにもかかわらず、天国に入る約束をしてくださる。また、従う者に祝福を与えてくださる。

3. この世の契約と神様との契約の違いはどこだろうか。

→ 神様が契約を破ることはない。また、契約をむすぶことによって神様の側に利益はな

い。一方的な契約。

4. このような一方的な契約をしてくださる、神様のご性質を考えてみよう。

→ 人を救い、愛してくださる神様。出エジプト(特に申命記)では、熱情の神と記す。また、ご自分の民を、聖なる国民、宝の民と呼んでくださる(19:5, 6)。

5. イスラエルの人々がこの契約で守るべきことは何だっただろう

→ 十戒を初めとする神様の戒めに従うこと。しかし、戒めに従うことの以前に、神様を愛することが求められている。申命記では「主を愛せよ」と繰り返し教えられる。その愛が戒めの実践として表れる。

6. 契約の血とはなんだろう

→ 契約の締結を示すもの。その真の意味は、イエス様の十字架によって明らかになる(マタイ 26:28)。

7. 11節で、「神を見て」の食事となる。その光景を想像してみよう。

→ 神様との驚くべき近さの中にある、天国的光景。これこそ、出エジプトのクライマックスなのかもしれない。礼拝における礼典(聖餐)も連想させられる。(このすぐ後に、人々が金の子牛像をあげるといふ大きな罪の記事があり、人間の弱さをも思わせられる。)

ねらい

○十戒は、神と民との約束（契約）に基づく愛と信頼の精神を土台にしていることを学ぶ。

展開例

○十戒は、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」（出エジプト 20:2、十戒の序文）という、神の偉大な救いの御業に基づいている。すなわち、神の恵みが選考している。十戒は、この恵みへの感謝と応答として守られる性質のものであることを理解しよう。

話し合ってみよう！

○主イエスが、マルコ 12:28-31 で述べておられる第一のおきてと第二のおきてが、十戒の一戒～四戒と五戒～十戒に対応していることを確認しよう。また、その意味は何だろうか。

祈り

神様との約束を守れるように、いつも感謝する心を与え続けてください。

○暗唱聖句○

出エジプト 24:8b

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 出エジプト記 24章 3～8節
- 月 出エジプト記 24章 9～11節
- 火 出エジプト記 24章 12～14節
- 水 出エジプト記 24章 15～24節
- 木 出エジプト記 20章 1～2節
- 金 出エジプト記 20章 3～11節
- 土 出エジプト記 20章 12～17節

☆三日記☆

テキスト ヨシュア記 3章

(1) 流れる川(1-8)

神の働きを見て、意を決したヨシュアとイスラエルの民は、いよいよ約束の地に入ります。そのためには目の前の大河ヨルダン川を渡らなければなりませんでした。

ヨルダン川とは、「流れる川」という意味です。パレスチナにある川の大半は雨季だけ水が流れ、他の季節は全く乾燥している涸れ谷・涸れ川ですが、このヨルダン川だけはいつも水が流れている珍しい川ということで、その名がつけられたのでした。これまでの長い荒れ野の放浪の後、豊かなヨルダン川の流れを見て、その水に足を浸したときのイスラエルの人々の感激と驚きは、さぞ大きかったことではないでしょうか。川には水がいつも流れているのが当たり前日本の感覚とは、全く異質の自然理解がここにあることに注意しなければなりません。

そのヨルダン川はよりによって「春の刈り入れの時期」、つまり大麦収穫の時期で、「水は堤を越えんばかりに満ちていた」のでした(15)。子供から老人、小さな家畜を含む大集団が、どうやってここを渡ることができるでしょうか。しかし、神はヨシュアに意外なことを命じます。契約の箱を祭司にかついで川を渡れ(6)、そうすれば「水がせき止められ、ヨルダン川の水は、壁のように立つであろう」と(13)。

(2) 信じて行う信仰へ(9-17)

ここで求められたのは、ヨシュアの神に対する信仰です。信じて、行うことです。ここ

にこれまでとは違う、信仰の在り方が求められます。荒れ野の40年間は信じる前に、神の不思議な御業が先立ちました。先に神の奇跡と恵みのしるしが与えられて、民は神を信じたのです。しかし、約束の地に入るこれからは、この神を信頼して、自分たちの手で獲得していかなければなりません。そこにおいても神の恵みが先行し、先立つ神の御業の中で彼らが約束のものを獲得していくのですが、そこではまず神への信仰が求められるのです。ヨシュアとイスラエルの民は、信じて一步を踏み出します。すると神の言葉通りに、川の水はせき止められて、川床は干上がり、「民はすべてヨルダン川を渡り終わった」のでした。

これがかつてのモーセを彷彿とさせる出来事であることは、言うまでもありません。ヨシュアにもモーセと同じ神の力が与えられ、神の助けがあるということを示すことで、彼を「大いなる者」としたのでした(7)。そのときヨシュアは、民に「生ける神があなたたちの間におられ」と宣言します(10)。これから入っていくカナン神々のように、冬になると死んで春によみがえる不安定な神ではなく、イスラエルの神は常に「生きておられる神」なのです。これからのイスラエルは、この信仰のもとで、信仰の闘いを担っていくのです。「生ける神」の生きた働きの中に生かされているという、信仰の現実を強く見据えていく信仰なのです。

(三川栄二)

テキスト ヨシュア記 3章

【単元のねらい】

私たちを守り導いて約束の御国に入れてくださる神の恵みの確かさを覚えつつ、いかなる試練や困難のときにもみ言葉にふみとどまる信仰を学びたい。

「約束の地に入る」

イスラエルの人々は、モーセさんにひきいられて、四十年の間荒れ野を旅してきました。そして、今いよいよカナンの地に入ろうとしています。カナンの地は、神さまが前から、イスラエルの人々にお与えになると約束してくださっていたすばらしい土地です。神さまの祝福に満ちた住まいです。もうその土地が広がっているのを見渡すことができるほどのところまで来ました。長く苦しい旅路がもうすぐ終わり、安息の地でのしあわせな生活が待っています。イスラエルの人々の喜びはどれほど大きかったことでしょう。

けれども、イスラエルの人たちは、目の前にとても大きな、そして深い深い川が横たわっているのを見たのです。ヨルダン川という名の川です。そしてカナンの地は、この川の向こうがわにありました。そこにたどりつくためには、ヨルダン川をわたっていかなければなりません。

このときにはもうイスラエルのリーダーは、モーセさんからヨシュアさんに交代していました。そしてヨシュアさんは、この大きな川の前に立って、とほうにくれました。イスラエルはとても大きな集団です。そのなかには、もう年老いてしまった人々もあれば、小さな子どもたちもいます。そのすべてを無

事にヨルダン川を渡らせて、向こう岸のカナンにまで導いていくなど、とてもできないだろうとヨシュアさんには思われたのです。

そのとき、ヨシュアさんの目に入ってきたものがありました。それは、イスラエルの行列の先頭で祭司という神さまのご用をする人々がかついでいた、契約の箱と呼ばれる箱です。その箱の中には二枚の石の板がおさめられていました。モーセさんがかつてシナイの山で、神さまからいただいた二枚の石の板です。そこには神さまのみ言葉が刻まれていました。十の戒めのみ言葉です。

このみ言葉が日曜学校の礼拝や、あるいは主の日の礼拝で読まれる教会は多いと思います。十戒は私たちにとってそうであるように、イスラエルの人々にとっても、人生の旅路を導く神さまの恵みのみ言葉であったのです。

ヨシュアさんは気づいたのです。今までの、荒れ野の四十年の旅路にも、ずっとこの箱が私たちとともにあった。神さまは私たちといつともともにいまして、私たちを守り導いてくださった。私たちは私たち自身の知恵や力によってではなく、神さまのみ言葉に守られて、ここまで旅してくることができたのではないか。だから、神さまはこれからも私たちとともにいて守ってくださる。どんなに苦しく、つらいことがあっても、かならず助けてくだ

さる。

そのとき、神さまはヨシュアさんにお命じになりました。さあ、わたしの言葉をおさめた箱をしっかりとかついだまま、ヨルダン川の中に足を踏み入れなさい。足を踏み入れるだけでなく、流れの中にふみとどまっていなさい。川の水がどれほど深く、流れがどれほどはやくても、恐れることはない。わたしの言葉にしたがうなら、わたしはかならずあなたがたを約束の地に導き入れる。

ヨシュアさんとイスラエルの人々は、神さまのみ言葉にしたがって、契約の箱をかついだまま深い川の中に足を踏み入れました。すると川の水はせきとめられて壁のように立ち、川のまんなかになんのかわいた道ができました。イスラエルの人々はひとりのこらずそのかわいた道をわたって、カナンにたどりつくことができたのです。

皆さんの目の前にも、ヨルダン川のような深い川が立ちはだかることがあるでしょう。

さまざまな失敗をしてしまったり、お友だちや家族の人たちとぶつかってしまったり、けがや病気をしてしまったりということがあるときに、とほうにくれてしまうことがあるでしょう。

けれども、そのときにはヨシュアさんとイスラエルの人々がヨルダン川をわたっていったときのことを思い出してください。神さまのみ言葉をたずさえて、み言葉にしたがって川の中に足を踏み入れたことを思い出してください。

どれほど大きな困難や危険、また試練にあうときにも、イエスさまは私たちとともにいて、私たちを助け、守ってくださいます。嵐の中でも洪水の中でもイエスさまに信頼して、イエスさまのみ言葉にしっかりと踏みとどまるなら、私たちは神さまの恵みのみわざを見ることが出来ます。神さまからくる大きな平安を知ることが出来ます。

(木下裕也)

【今日の暗唱聖句】 ヘブライ人への手紙 13章8節

イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。

〈ねらい〉

大きな困難の中でも、いつも共にいてくださる主を信じ、御言葉に聞くことを心に刻み込みましょう。

〈展開例〉

みんなは大きな川を見たことがあるかな。その川には橋もないし、船もないけど、反対側まで行かなくちゃいけないとしたらどうするだろうね？泳いでわたる？途中で流されちゃうかもしれないよ。

イスラエルの人たちは、神様が約束してくださったカナンに入るために、大きな川を渡らなければなりません。ヨシユアさんはとても困ったけど、神様の「わたしの言葉

にしたがうなら、わたしはかならずあなたがたを約束の地に導き入れる」という約束の御言葉を信じて、神様が教えてくださったとおりにして、川を渡ることができました。

僕たちや私たちが同じようにして川を渡ることはないでしょう。でも、イスラエルの人たちが目の前の大きな川をわたらなければならず、たいへん困ったときのように、私たちがとても困ったときに、神様はみんなと一緒にいてくださいます。イエス様が大好きで、イエス様を信じているみんなを助けるために、神様は、御言葉を通して私たちがカづけて、導いてくださるのです。

〈やってみよう ①〉

絵を描こう！

- 画用紙を用意して、今日のお話について、自由に絵を描いてもらおう。
- 川を渡る様子を紙に書いておいて、色を塗ってもよいでしょう。
- その絵を見ながら、どういうお話だったか、振り返りましょう。

〈やってみよう ②〉

工作をしよう！

魚のぼり紙

よいにするもの

- 画用紙 (色画用紙でもよい)
- 色紙
- のり
- はさみ

① 色紙を魚の形に切りとる。

② 図のように折り曲げる。

③ はさみを適当に切りこみちようをつける。

開く。

色々なちようを作って楽しんでみよう。

できあがった魚を好きなところに貼ってみよう。

〈暗唱聖句〉

ヘブライ人への手紙 13章 8節

〈学びのポイント〉

1. 何事も神様が導いてくださる。
2. 神様を信じて、御言葉に従うことを学ぶ。

〈展開例〉

モーセに導かれ、エジプトを出て 40 年がたちました。アブラハム、イサク、ヤコブの時から約束してくださった土地、カナンが目の前にあります。男の人でエジプトを出た時から生きている人はヨシュアとカレブだけでした。モーセは死に、今までモーセを助けてきたヨシュアが新しい指導者です。カナンへ行くには、大きなヨルダン川を渡らなければなりません。小さな子どもや老人、牛や羊などの動物、たくさんの荷物、とても渡れそう

にありません。でも、誰も文句を言う人はいません。神様がいわれたとおり、十戒の入った契約の箱を祭司たちがかついでヨルダン川に入ると、川の水は壁のようにせきとめられ、無事に渡ることができました。十戒は神様の御言葉です。十戒が入った契約の箱が先頭でした。皆そのあとについてきました。不可能に思えることも神様を信じて御言葉にしたがつて歩む時、約束してくださったことは必ず果たされるのです。毎日の歩みを神様のために歩みましょう。

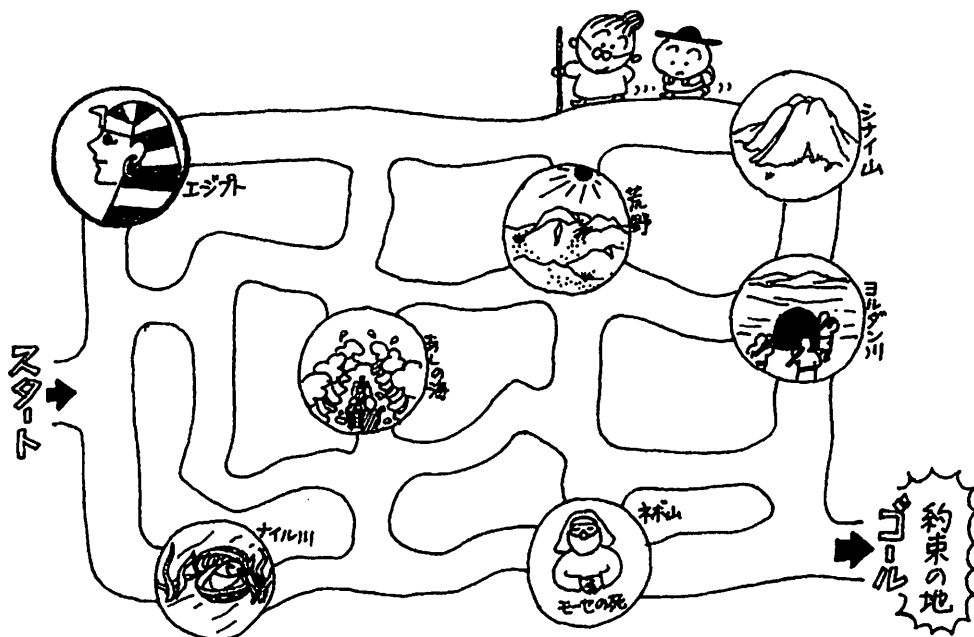
〈祈りましょう〉

ヨルダン川に進んでいった人たちの勇気におどろきます。弱いときにこそ神さまが力をくださるのですね。神さまが生きておられることは、なんとすばらしいことでしょう。

〈やってみよう〉

約束の地に入る

スタートから出発して、同じ道を二度通らないようにして、すべてのところへよってください。同じ十字路を通ってもいけません。



〈ねらい〉

この少し前のことは申命記に記されている。エジプトを出たとき大人だった人たちが死に（ヨシュアとカレブ以外）、世代が代わっている。神様はカナンの地に入ろうとする人々とも契約を結ばれた。その後、モーセは死に、指導者はヨシュアに移る。約束の地に入るのは、約束の実現を体験する喜びであるとともに、神様との特別に親しい関係の時の終わりでもあった。

〈展開例〉

1. 40年の旅の時はどういう意味があるのか。
→ 40年の旅は、厳しさの体験とともに、神様との特別な関係が与えられた至福の時と見ることができる。そこでは、神様による特別な守りがあり（たとえば、申命記29:4）、火の柱、雲の柱を見ることにより神様のご臨在を知り、また、モーセを通して神様の言葉を親しく聞くことができた。40年を通して神様は民を恵み、訓練し、ご自分の民の群れを形成された。
2. カナンの地に入るとはどういう意味があるのか。
→ 神様の約束の地に入る。それは大きな祝福。しかし、神様との特別な関係の時の終わりでもある。また、その地において、人々の

罪も、さまざまな形で現れることになる（士師2:1-3、2:10-12）。

3. モーセを継いでイスラエルの人々をカナンの地に導く働きをするヨシュアに対して、神様は「強く、雄々しくあれ」と繰り返し語られた（ヨシュア1:6、9）。ということだろう。
→ ヨシュアへの励まし。それとともに、新しい時代に入るイスラエルへの励ましとも取れるかもしれない。コリント一16:13のように。それは、神様との特別な関係の時を過ごした後、本来の時の中に入り込む人々への励まし。礼拝の最後に、日常生活に進む我々に与えられる派遣・祝福の言葉のようでもある。「あなたがどこに行ってもあなたの神、主はともにいる」（ヨシュア1:9）。基本的には、生けるまことの神に依り頼む信仰に雄々しく立つことが求められている。偽りの神々をしりぞけて、まことの神を神として歩むことへの励まし。
なお、ヘブライ人への手紙では、この約束の地に入った出来事が（エジプトを出た人々が約束の地に入れなかったことが）、私たちにも与えられた安息の約束につながると論じられている（3,4章）。議論は難しいが、新約と旧約の連続性において大切なところ。

ねらい

- 信じて行う勇気をも、主なる神が与えてくださることを学ぶ。

展開例

- ヨシュアがヨルダン川を渡って、カナンに入国する際、神はヨシュアに励ましの言葉と臨在感を与え、またエリコの情報などを通して、確信を強めさせました。ヨルダン川渡河に際して、水を引かせる奇跡をも加えてくださり、多くの方法で勇気を駆り立ててくださることを学ぼう。何かを実践する時には、このヨシュア記のやり方を思い起こすとよい。

話し合ってみよう！

- 実践する勇気が与えられるためには、成功の見通しが与えられることも必要であることを、エリコの情報の記事を通して話し合ってみよう。

祈り

- 周りの状況を判断しながら、信じて行う勇気をお与えください。

○暗唱聖句○

ヨシュア 1:9

○祈りの課題○

聖書日課

日	ヨシュア記 1章 1～9節
月	ヨシュア記 1章 10～18節
火	ヨシュア記 2章 1～13節
水	ヨシュア記 2章 14～24節
木	ヨシュア記 3章 1～4節
金	ヨシュア記 3章 5～11節
土	ヨシュア記 3章 14～17節

☆三二日記☆

テキスト サムエル記上 17章 41 ~ 54 節

〈神のための戦い〉

イスラエル軍とペリシテ軍とは谷をはさんで向き合いました。ペリシテは総力戦ではなく、代表戦士による一騎討ちを提案します。ペリシテ軍の代表として進み出たのがゴリアトという名の兵士でした。

ゴリアトは3メートルちかい巨人で、50キロをこえる鎧で武装していました。彼を見たイスラエル軍は恐れおののき、誰も彼と戦おうとはしませんでした。

この戦いに名乗りをあげたのは羊飼いの少年ダビデでした。彼がこのときすでにサウルのかわりにたてられるイスラエルの王として聖別されていた(16-13)ことは重要です。ダビデはこのとき、父の使いで偶然戦場を訪れたにすぎませんでした。その彼がゴリアトと戦うため名乗りをあげたのは、神と神の民を辱め、「生ける神の戦列に挑戦」(26)したゴリアトに対する憤りからでした。ダビデは明確に、これは神のみ名を守るための聖なる戦いであることをわきまえていました。そしてそうである以上、神がみずから彼の背後にあって戦いたもうこと、必ず彼を守って勝利を与えてくださることを信じていたのです。ダビデとゴリアトの戦いは、まことの神と偶像の神々との戦いであると言ってよいでしょう。

サウル王はダビデに自分の武具、青銅の兜と鎧をまわせます。しかしダビデはこれを脱ぎ捨て、自分の杖を取り、川岸から滑らかな石を五つ選んで袋に入れ、石投げ紐を手にしてゴリアトに向き合います(38-40)。ほとんど

ど丸腰にちかい無防備な姿で、戦闘に慣れた兵士たちから見れば、常識はずれのいでたち映ったに違いありません。しかしダビデはいつもこの姿で荒れ野を跋扈する莽猛な獅子や熊と戦い、羊たちを守っていたのです。

〈信仰による勝利〉

ゴリアトはあまりにも無防備な姿で自分の前に立ったダビデに驚きあきれつつも、ダビデを嘲笑し、お前を空の鳥や野の獣の餌食にしてやろうと威嚇します。対するダビデは、ゴリアトは剣や槍や投げ槍を頼みにしているが、自分の頼みは万軍の主の名である。そして主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことをすべての者は知るだろうと応じます。

勝負は一瞬のうちに決しました。ダビデが最初に放った石がゴリアトの額に命中し、彼はうつぶせに倒れ、ダビデはゴリアトの首をとります。まさに信仰による勝利です。神が戦い、神の民に勝利をもたらしてくださったのです。

この聖書箇所は、私たち自身の信仰の戦いにも貴重な示唆を与えます。私たちの前に壁のように立ちだかるゴリアトとは、何でしょうか。ダビデがたずさえた武器は、神のみ言葉でした。

信仰者の戦いは、いつも神が味方し、勝利したもう戦いです。み言葉と祈りによってなされる戦いです。

(木下裕也)

8月10日 「ダビデとゴリアト」 説教展開例

テキスト サムエル記上 17章 41～54節

〔単元のねらい〕

現代を生きる子どもたちは、様々な信仰の戦いを強いられることになる。その戦いの中で神様の御守りを確信し、神様の御力に依り頼むことへと導きたい。

「信仰に立つ戦いを戦おう」

みんなは礼拝に来て神様を礼拝しています。そして、神様が私たちを守ってくださることも知っていると思います。でも、怖いことや困ったことがあつたりすると、神様が一緒にいてくださることや、私たちを導いてくださることを忘れてしまうことがたくさんあります。

イスラエルの人たちがヨシユアさんによって約束の地に入ってから何年もの月日がたちました。約束の地、カナンでのイスラエルの人たちはそこに家を建てて生活も落ち着いて普通の生活が出来るようになりました。約束の地に入って、周りの国々から何回も攻められるうちに、イスラエルの人たちは、だんだんと神様が守ってくださっていることを忘れてしまいました。

その生活の中で、イスラエルの人たちはあることにふと気がついたんです。それは何だったと思う？・・・それはね、イスラエルには他の国のような王様がないということだったんです。イスラエルの周りの国には王様がいる、王様はその国を守り、王様はその国の人たちの生活がしやすいようにいろいろと考えて導いていました。でも、イスラエルには王様がいまいませんでした。だから、イスラエルの人たちは、周りの国のように自分たち

にも王様がほしいと思いました。その願いを神様は聞いてくださり、最初の王様サウルをイスラエルのために選んでくださったのです。そのことをイスラエルの人たちはたいへん喜びました。

そのサウル王様の時代に、神様を信じていないペリシテ人がイスラエルに戦争を仕掛けてきました。ペリシテにも王様がいるけど、イスラエルにも王様があります。イスラエルの人たちはそのことだけで安心していました。だけど、その戦いが始まると、とんでもないことが起こりました。なんと、ペリシテの軍隊の中に、背の高さが3メートルぐらいもあって、50キロぐらいのよろいも平気で着てしまう力持ちの、ゴリアトという大男がいたんです。3メートルというと普通みんなのお家の床から一階の天上までがほしい 2.7メートルだから、それよりも高い巨人だったんだね。その大男のゴリアテは毎日毎日、イスラエルの人たちの前に出てきて「イスラエルの腰抜け！誰かこの俺と戦うことの出来るやつはいないのか！一騎打ちで戦んだ。誰か俺の前に出てこい」って、叫ぶんです。イスラエルの人たちは怖がって、誰も出ていきません。

そんなことが続いたある日、この戦いにかり出されたお兄さんに会うために、ダビデと

いう少年がやってきました。ダビデは神様をとっても熱心に信じて、神様の力を信じている人でした。そのダビデさんがイスラエルとペリシテが戦っているエラに来たとき、あのゴリアトがまた叫んでいます。イスラエルの人たちは怖がってどンドン下がってしまいます。イスラエルの中には、ゴリアトと戦う人はだれもいませんでした。

それを見ていたダビデは「神様をばかにして、神様に挑戦するあの男は何者ですか！」とゴリアトに対してとっっても腹を立てました。そして、「僕が行きます」とダビデは言いました。たぶんダビデはこの時、12歳になったかならないかぐらいでした。だからきっと自分の倍以上あるようなゴリアトと戦うと言い出したのです。すごいよね。しかもダビデはゴリアトなんて全然怖くないと思っていたんです。なぜだろうね？・・・

ダビデは羊飼いだから、何度も羊を襲うオオカミやライオンと戦ったことがありました。でも、だからゴリアトが怖くなかったのではないのです。ダビデは神様がこの神様をばかにする人と戦ってくださると信じていたのです。そして、神様が神様の民のイスラエルを守ってくださると信じていたのです。だから全然怖くなかったのです。小さなダビデを

見てゴリアテは笑いました。しかもダビデは武器を何も持っていません。ただいくつかの小さな石ころと石投げの道具以外はね。でも、たったそれだけで大男のゴリアトを倒してしまっただけです。

この戦いは、ただイスラエルとペリシテの戦いではありません。神様が本当の神様であることを示す神様のための戦いでした。大人は誰も神様が助けてくれることを信頼できませんでした。だけど、ダビデだけは神様が助けてくださることを信じて、勝利したのです。

みんなも教会に行っていることや神様を信じていることでばかにされることもあるかもしれません。それに、日曜日に教会に来るより楽しいこともたくさんあるかもしれません。そのときに、神様の方に向きたいけれども、楽しいことや楽な方に行きたくなるものです。そのときに戦う戦いこそ、ダビデさんもやった神様のための戦いなのです。

その戦いは自分の力では勝つことが出来ません。だけど、どんな時でもみんなを守ってくださる神様は神様を信じてお祈りして、みんなが神様により頼むとき、神様はその神様のための戦いに勝てるように助けてくださるのです。
(春名義行)

〔今日の暗唱聖句〕 詩編 18編 36節

あなたは救いの盾をわたしに授け／右の御手で支えてくださる。

あなたは、自ら降り／わたしを強い者としてくださる。

〈ねらい〉

信仰の力を子どもたちの心に刻み込み、神に依り頼んで戦うことへと招きましょう。

〈展開例〉

みんなはこの部屋の天井に手が届くかな？ 届かないよね。ダビデさんは、この天井よりも大きなゴリアト（身長およそ3メートル）と戦いました。ゴリアトは鎧を着て、兜をかぶって大きな槍をもって、腰には大きな刀をつけていました。ゴリアトは大きな人で力もあつたし、鎧とかもつけて、武器もしっかり持っていたから、誰にも負けないって思って

いたんだよ。そのゴリアトさんと戦ったダビデさんは、羊飼いの服で石投げの道具といくつかの小石を持っていただけでした。でも、ダビデさんが勝ったのです。

それは、いった何でだろうか？ それは、ダビデさんが神様を信じて、神様が助けてくださると信じていたからです。ダビデと共に神さまご自身が、戦ってくださったのです。

イエス様を信じるみんなは、この神様に守られています。みんながとっても困ったときも、神様はその困ったことに立ち向かう勇気と力を与えてくださる方なのです。

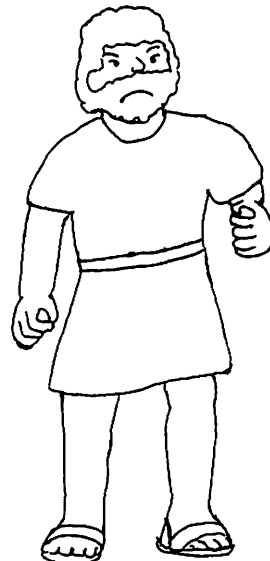
〈やってみよう〉

絵を描こう！

- 下の絵をコピーして、ダビデの持っていたもの、ゴリアトの鎧や兜などを書き加えましょう。
- クイズを出しましょう。
 - ・この絵のダビデは、いったい何をしようとしているのかな？ （石投げ）
 - ・ダビデの持っていた、目には見えない大切なものは？
 - ①神さまを信じる信仰
 - ②てっぼう
 - (①)



ダビデ



ゴリアト

〈暗唱聖句〉

詩編 18 編 36 節

〈学びのポイント〉

1. 子どもたちにも日々の歩みの中で、戦いがある。
2. その戦いの中で神様の御守りを確信し、神様の御力により頼むことへと導く。

〈展開例〉

背丈が 3m ちかくある大男ゴリアト、普通の家の床から天井までが約 2m50cm ですから、さらに 50cm も高いところがゴリアトの頭のとっぺんです。そんな大男が目の前にいると想像してごらんなさい。さぞ恐ろしいでしょうね。サウル王やイスラエルの兵隊たちも、とても恐ろしかったのです。ただ恐くてどうしていいかわからないでいました。私たちも困難にあって、どうしていいかわ

からないことがありますね。ダビデの言葉の中にどうすればいいのかが書いてあるのです。「獅子の手、熊の手からわたしを守ってください。あこのペリシテ人の手からもわたしを守ってくださいるにちがいありません。」「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。」つまり、「神さまが戦ってくださいる」ということなのです。どうしてよいかわからない時、私たちがこのことを忘れてしまっているのです。「神さま助けってください」と素直に祈りましょう。

〈祈りましょう〉

ちいさなダビデが、神さまの力でゴリアテに勝ちました。わたしたちも、ちいさく弱いですが、神さまの力にたよります。わたしの心が、おそれに勝てるよう祈ります。

〈やってみよう〉

暗号表の中から、人、場所をさがそう!

タテ、ヨコ、ナナメに読んでみてね

- ① ダビデのお父さんの名前は?
- ② ダビデが戦った大男の名前は?
- ③ ダビデに注がれたものは何?
(サムエル上 16:13)
- ④ だれがそれを注いだの?
(サムエル上 16:13)
- ⑤ イスラエルは、どこで戦ったの?
(サムエル上 16:13)

ロ	キ	ブ	ア	ア	ダ	ン	ジ
ル	イ	シ	ナ	ゲ	ト	キ	カ
エ	ゴ	ブ	ヤ	ゴ	ラ	ゴ	イ
ム	タ	リ	テ	ベ	リ	シ	テ
サ	ド	タ	ア	ヤ	カ	ア	ブ
カ	ル	ザ	ン	ト	エ	ブ	ゴ
シ	ウ	ミ	キ	モ	ド	ラ	ル
イ	サ	ツ	エ	エ	ノ	エ	ノ

〈ねらい〉

サムエル記には、カナンに入ったイスラエルが王国を築き、確かな国へと成長する歴史が記されている。その前には士師の時代（約200年間）があったが、カナンに入って以来、イスラエルは周囲の国々（特に、ペリシテ）の脅威にさらされていた。そのような中で、イスラエルが確かな国を築くために必要なものは何だったか。

〈展開例〉

1. ダビデとゴリアトとの対決は、二人の個人的な争いではなく、イスラエルとペリシテとの間の戦争だった。聖書は戦争を通して、イスラエルの国が建てられてゆくことを記す。今も、国家にとって、戦争および軍事は必要なことなのか。

→恐らく、イラク戦争を推進した人々の思いの中には、聖書に示された聖戦があったのだろう。ウ告白 23:2 は、限定的に、正義のための戦争を支持している。しかし、戦争を美化することを極力避け、戦争には人間の罪が極限的に現れるものであることを知り、そこにある悲惨さに目を向けるべきだろう。マタイ 26:52 のイエス様のお言葉も大切。

2. ダビデの戦い方はどうだったか。34節、37節のダビデの言葉から考えてみよう。

→34、35節には、自分の実力についての判断に基づいた勝算と戦略（具体的には39、40節）が示されている。37節では、神様への信頼がある。人間的には不可能と思える状況でも（33節）、神様を信頼する信仰が示されている。この二つは、私たちの祈り

の生活を支える、信仰と知恵と関係していると考えていだろう。

なお、ダビデの時代は、神様が強く歴史に関わられた特別な時代であったことも意識しなければならない。神様はダビデをお用いになり、地上における確かな国としてのイスラエルを建てられた。そこには、「万軍の主」としての神様の姿がある。

しかし、今の時代に、子どもたちが様々な悪や暴力に遭遇するときに、信仰に基づいて自分自身で直接的に立ち向かわねばならないと思わせてはいけなだろう。もちろん、それぞれにできる戦いがあるだろう（祈りにおける戦いも）。

3. この時の前に、少年ダビデはすでに王となるための油を注がれていた（16章）。どうしてダビデが王になる者として選ばれたのだろうか。

→神様のご指示によって、サムエルはエッセイの子ダビデに油を注いだ。ダビデが選ばれたのは、外見的な理由によるのではなかった（16:7）。なぜ、ダビデが選ばれたかはわからないが、神様はダビデをお選びになり、彼に「主の霊」をお与えになった（16:13）。それは、救いに入れられる人が選ばれる場合にも同じ。

なお、神様に選ばれたダビデが、まったく正しい人として生涯を歩んだのではなく、罪を犯し、それを悔いつつ歩む人生を送ったことも覚えるべきだろう。地上の国の王による支配には様々な問題が生じることは、ダビデ王、ソロモン王においても見られ、神様はその問題（王を求める人々の思いも）を指摘してれおられた（8:6-9）。

ねらい

- 神が力強い働きで戦ってくださっていることを学ぼう。

展開例

- 信仰の勇者少年ダビデを支えていたのは、神様の力強い働きかけである。預言者サムエルは、すでに少年ダビデに、王となるべく油を注いでいた。「その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった」(サムエル上 16:13)。主の霊の働きを受けて、神の臨在を確信していた。
- ダビデは、主の霊に導かれ、これまでの羊

飼いの体験を生かして、ゴリアトとの戦いに立ち向かった。ダビデは、主の御名により戦い、勝利を確信していた。

話し合ってみよう!

- 少年ダビデの羊飼いの体験が、ゴリアトとの戦いにも勇気を与えているのではないか。話し合ってみよう。

祈り

神様が先に立ち、共に戦ってくださることを信じていくことができますように。

○暗唱聖句○

詩編 18:36

○祈りの課題○

聖書日課

日	サムエル記 上 17章 1～11節
月	サムエル記 上 17章 12～16節
火	サムエル記 上 17章 17～25節
水	サムエル記 上 17章 26～30節
木	サムエル記 上 17章 31～40節
金	サムエル記 上 17章 41～47節
土	サムエル記 上 17章 48～58節

☆三二日記☆

テキスト サムエル記下 7章1～17節

〈ダビデの歩み〉

サウルは、ゴリアトに勝利したダビデを兵士として召し抱えました。このとき、主の御心はすでにサウルにはなく、主はダビデと共にいられて、ダビデに勝利を与えられました。ダビデが勝利を重ねることによって、サウルはダビデをねたむようになり、それはダビデを殺そうとするほどでした。そのため、ダビデはサウルの前から逃亡し、荒れ野をさまよう生活を余儀なくされました。サムエル記上19章から31章まで、ダビデの逃亡生活が書き記されています。ダビデは、何回かサウルを討ち取るチャンスを得ましたが、サウルを殺しませんでした。ダビデは、主が油を注がれたサウルに、最後まで敬意を払いました。

サウルは、最終的に、ペリシテ軍との戦いの中で深い傷を負い、そのため、自ら死を選び取りました（サムエル上 31:4）。王子ヨナタンも同じ戦いの中で命を失いました。それを受けて、まずユダ族の人々がダビデを王とします（サムエル下 2:4）。そして、サウル王家の内部抗争と内乱を収束させたのち、イスラエル全部族がダビデを王として認めることになりました（サムエル下 5:3）。

〈ダビデ契約〉

即位して、ダビデが最初に行ったことは、エルサレムを攻略して、エルサレムを首都と定め（サムエル下 5:9）、エルサレムに神の箱を運び上げることでした。ダビデは、エルサレムに幕屋を張り、神の箱を運び込み、献げ物をささげて神を礼拝しました（サムエル記下 6:17）。ダビデは、新しい国造りの中心に神礼拝を据えようとしたのです。神を礼拝し、神を喜ぶことこそが、イスラエルの国造りの

かなめなのです。おそらくはすでにこの時、ダビデの心の中には神殿を建てる構想があったのでしよう。イスラエルの民は、これまで、幕屋において神礼拝をささげてきました。これは、主なる神が荒れ野を旅する民と共に旅をしてくださるといふ恵みのしるしでした。そして、今イスラエルの民は新しい王国を築こうとしています。ダビデも王宮を建てて住み始めたのです。そうであるならば、主なる神のためにもふさわしい神殿が必要である。それがダビデの考えでした。ここには、ダビデの主への畏れと謙遜さが表れています。

しかし、主なる神は、ご自身には神殿は必要ないとお答えになりました。むしろ、ダビデを祝福して、約束されました。それは、主なる神ご自身がダビデのために家を興すということでした。また、ダビデの死後、子孫の中から跡を継ぐ者が起こされて、その王国を揺るぎないものとするということでした。「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」。これは、主なる神からの一方的な恵みの契約です。これをダビデ契約と言います。

この契約は、地上のイスラエルの王国ではなく、やがて来られる救い主メシアによる神の国についての約束です。救い主イエス・キリストが、贖いのみわざに基づいて、とこしえの神の国を揺るぎないものとしてくださいました。それ故に、主イエス・キリストにあって神を礼拝することが、私たちの生活のかなめとなります。御言葉は、神礼拝を私たちの生活の中心に据えることの大切さを教えています。（望月信）

テキスト サムエル記下 7章1～17節

〔単元のねらい〕

神のために神殿（神の家）を建立しようとするダビデに、むしろ神がダビデのために「家（王朝）」を興してくださると約束されます。この王国もやがては滅亡しますが、それはこの約束が反故にされたということではなく、ここで約束される王国が永遠の王国として揺るぎないのであり、それはダビデの子イエス・キリストによって建てられる王国（神の国）であることを指し示すものでした。歴史上の国家ではなくて、永遠の神の国を指し示す預言であることに思いを向けさせてください。

「わたしはあなたと共にいる」

大男ゴリアトと戦って勝ったダビデは、それからも神さまに助けられて活躍し、ついにイスラエルの王さまになりました。羊飼いだっただビデは、人々（国民）を導く羊飼いである王さまとなったのです。イスラエルでは、王さまは「羊飼い」になぞらえられました。そしてダビデは、この王国を守るために、神さまのための戦いに明け暮れていました。神さまがいつもダビデと共にいて、守ってくださったので、戦いに勝つことができました。おかげでイスラエルも大きな王国になりました。イスラエルの敵を滅ぼすことができたおかげで、国の外も内も平和になりました。

ダビデは、この神さまの恵みになんとか応え、感謝を表わしたいと考えるようになりました。そしてあれこれ考えていた時、ダビデにいい考えが浮かんだのです。神さまの家がまだ建てられていない！ そうだ、神さまのために立派な家を建てよう、そしてそこに、神さまにおいでいただき、いつまでもイスラエルとわたしと一緒にいてくださるようしよう、ダビデはそう考えました。預言者ナタンに相談しますと、ナタンも喜んでくれまし

た。ダビデにはとてもいい考えに思えたので、さっそくとりかかるところにしました。

ところがです。神さまは、家など建てて欲しくはありませんでした。この世界とすべてのものをお造りになったまことの神さまには、家など必要ありません。「この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません」（使徒言行録 17:24）とパウロが話したとおりです。神さまはこれまで一度でも、自分のために家（神殿）を建ててほしいと求めたことはありませんでした。イスラエルの神さまは、ずっと「幕屋」、つまりテントを住みかとしてこられました。それは、イスラエルが荒れ野で苦しんでいた時代に、神さまだけは高い天にいて、安全で安楽な場所であつろいでいたということではなく、神さまも苦しい荒れ野での旅を、イスラエルと共に歩み続けてくださったということでした。わたしたちの神さまは、わたしたちが苦しい時、その苦しみを共に味わってくださり、わたしたちと共にいて守ってくださる神さまなのです。それが、神さまが「幕屋」を住みかとしてこられたことの意味です。

神さまは、ダビデの申し出を断りました。むしろ神さまがダビデに、約束を与えられます。ダビデが神さまを愛して、神さまの恵みに感謝をささげたいと考えた、その心を喜ばれ、神さまがダビデの家（王朝）を興してくださり、これからずっとダビデの家は栄えるという約束です。神さまはダビデに約束されました。「あなたがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう」と。苦しかったこれまでの間、ずっとダビデと共にいて、ダビデを守り助けてくださった神さまは、これからもずっと共にいてくださるばかりか、ダビデだけではなく、ダビデの子どもたちとも、ずっと共にいて守ってくださるというのです。そして「あなたがどこに行こうとも、わたしは共にいる」という約束を確かなものとするために、神さまは「ダビデの家」を興されると言われたのです。「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」という約束が、「契約」として、つまり決して破られることのない特別な約束として、ダビデと結ばれるのでした。

「あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」。しかし、この約束は、どのようになったのでしょうか。現実のダビデ王国、イスラエルは、いま地上にありません。それでは神さまは、ダビデとの約束を破ってしまったのでしょうか。いいえ！ この約束は、ずっと後の時代にダビデの子孫の中から救い主があらわれ、その救い主であるメシアに

よって、新しい王国、永遠に続く神の国が興されるという約束だったのです。それは、ダビデの子であるイエスさまによって実現しました。そしてイエスさまがたててくださった永遠の王国である神の国、天国に、わたしたちも招き入れられるのです。

神さまはダビデに、「わたしはあなたと共にいる」と約束していただきました。どんなに苦しいときにも、どんなに困った時にも、ダビデは神さまと共にいてくださると信じるのができたので、乗り越えていくことができました。それに必要な勇気と力を、神さまにダビデにくださり、助けて守ってくださったのです。その神さまは、あなたとも共にいてくださいます。どんなときにも、あなたがどこへ行っても、そこで神さまはあなたと共にいて、あなたを守ってくださるのです。それは、インマヌエル、「わたしたちと共にいてくださる神」という名をつけられたイエスさまなのです。ダビデの子であるイエスさまが興してくださる永遠の国とは、イエスさまが、神さまが、私たちいつまでも共にいてくださるところなのです。「あなたがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう」。この約束は真実で、確かです。なぜならそれを約束された方は、永遠に生きるまことの神さまだからです。そしてこの神さまのみ言葉も真実で、永遠のものです。イエスさまを信じる人は、だれでもこの神さまの国に入れてもらうことができるのです。あなたも、イエスさまを信じて、この永遠の国に入れていただきましょう。

（三川栄二）

〔今日の暗唱聖句〕 サムエル記下 7章9節

あなたがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう。

〈ねらい〉

主イエスをお与えくださるとの約束を守ってくださった神様の真実を伝え、主イエスを信じることへと招きましょう。

〈展開例〉

みんなは約束を破ったことがありますか？
 ついつい約束を忘れて破ってしまったりすることって、けっこうたくさんあります。

でも、神様はダビデさんとしてくださった約束を、何年も何十年も何百年も忘れること

なく、守ってくださいました。その約束は、イエス様を私たちのために与えてくださるといふ約束でした。その約束を変わることなく守ってくださって、本当にイエス様を与えてくださいました。そして、イエス様による救いの恵みをお与えくださったのです。

神様の約束は変わることがありません。みんなもイエス様を信じて、一緒に神様のみ国に行きましょう。

〈さんびしよう〉

みんなであそぼう「三つの約束」

○いのちのこば社・太平洋放送協会、『友よ歌おう』、21番

詞 山内 修一 (1971.)
 曲 橋本 子明
 改作 (山内)

三つの約束

おいのりはね (フムフム) まいにしするんだぜ OK
 いつもイエスさま きいててくれるから

1. おいのりはね (フムフム)
 毎日するんだぜ (OK!)
 いつもイエスさま
 きいててくれるから

☆☆

2. みことばはね (フムフム)
 あんしょうするんだぜ (OK!)
 どんなときでも
 みおねがわかるから

3. 教会にはね (フムフム)
 まいしゅう来るんだぜ (OK!)
 げんきなしんこう
 やしなうためだから

☆☆

4. ほくたちはね
 きょうだいしまいだぜ
 おなじ信仰で
 むすばれてるんだもん

〈暗唱聖句〉

サムエル記上7章9節

〈学びのポイント〉

1. 神がダビデに約束された王国は神の国であって、イエス様によって興される。
2. イエス様を信じて入ることができる。
3. 神様はいつまでもともにいてくださる。

〈展開例〉

ダビデは王様になり、イスラエルを治め、神様は、周囲の敵をすべて退けられました。ダビデは宮殿に住むようになりました。

十戒の入った神の箱はまだ天幕の中にあつたので、ダビデは神様の家、つまり神殿が必要だと思いました。でも神様は天幕の意味を教えてくださいました。それは、イスラエルの民をエジプトから導き、先頭に立って民とともに歩むためだと。そしてダビデが神の家

を建てるのではなく、神様がダビデのために「家」を建ててくださると約束してくださいました。「あなたの家、あなたの王国はあなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに硬く据えられる」。王国とは神の国のことです。

これは、ダビデの子孫であるイエス様が永遠に続く神の国を興されるという約束でした。天幕の神様がイスラエルの民を導かれたように、私たちはイエス様に守られ、導かれます。イエス様はまことの王として、私たちといつまでもともにいてくださるのです。

〈祈りましょう〉

ダビデさんの国は、この世の国ではおわらないことを学びました。地上で終わらない神さまの国があることにかんしゃします。神の国のまことの王、イエスさまを信じます。

〈やってみよう〉

暗号文をとこう!

○	◆	::	日	::	日	⊥	◎	✕	∩	◎	∩		▽	,
✕	::	★	..		▽	✕	∩	●	,	○	◆	::	目	□
①	●	-	::	●	∩	◇	◎		::		①	::	⊗	,
⊗	:	∩	目	◎	◎	∩	◆	⊕	▽	目	✕	◆	::	◆
☆	∩	.	∩	◇	○	::	△	◇	∩	.				

○暗号表

○	∩	∩	△	◎	-	∩	①	◎	★	::	⊗	●		◆	✕
あ	い	う	え	お	か	さ	く	こ	し	た	ち	て	と	な	に

目	..	⊕	☆	▽	◇	::	✕	◇	.	日	::	:	⊥	◆	□	
の	は	る	め	も	よ	ら	わ	を	せ	が	ご	じ	よ	ど	ぶ	ゆ

〈ねらい〉

ダビデはイスラエルの二番目の王となった（その間にイシュ・ボシエトとダビデの二人の王が並立した時代があった）。ダビデは少年時代に神様からの油を注がれていた（サム上 16 章）が、ダビデはイスラエルの全部族の長老たちと契約を結び、彼らから油を注がれて、全イスラエルの王となった（サム下 5:3）。王（今日の指導者も）は、神様と人々によって支持される人でなければならない。

〈展開例〉

1. もし、私たちが王になったら、何をするだろう。ダビデは王となって何をしたらうか。

→生徒たちの思いを聞いてから、聖書をたどってみよう。①都にふさわしい場所として、エルサレムを都にした(5:9)。②王が住み、国を支配する場所として、王宮を建てた(5:11)。③子どもたちが与えられた(5:14)。王朝の継続が国の繁栄のために大切。④周囲の敵国を征圧した(5:25)。国の平和の確保。⑤神の箱をエルサレムに移した(6章)。神の箱は、神様が共におられることを象徴する大切なものだった。この記述が詳しいことはその大切さを示している。それ以外は、地上の王としての一般的な働き。

2. ダビデがしたいと望んだができなかったことは何だろう。

→エルサレムに神殿を建て、神の箱を納めること。神様は、神殿の建設をお許しにならなかったが、神様はその思いを喜ばれ、ダビデに大きな祝福と約束を与えられた（礼

拝の聖書箇所）。神殿の建設は、次の王であるソロモンによって実現された。

3. 神様がダビデに与えられた祝福と約束（契約）は何だっただろう。

→イスラエルの平和とともに、「主があなたのために家を興す」(11 節) こと。イスラエルの平和も、ダビデの家を通して実現される。神様のお約束どおりに、この後の歴史で、長く（約 400 年）ダビデの子孫が王として国を治めることになる（ただし、国の分裂を経験する）。ダビデの時代、さらにその次のソロモンの時代は、その繁栄の頂点にあった。

4. やがて、イスラエルは国の分裂、北イスラエル王国の滅亡、ついにはエルサレムも壊滅し、ダビデ王朝も消滅する(BC586 年)。神様の約束はいったいどうなったのか。

→約 400 年の長いダビデ王朝の時代それ自体が神様の約束の実現ともいえる。しかし、ダビデ王朝とともに国が減ったとき、人々はなお神様の約束を信じ、「ダビデの子」の登場による国の復興を待ち望んだ。やがて、神様は人々が期待した「ダビデの子」を越えるメシアとして（マルコ 12:37）、独り子であるイエスをダビデの家系に誕生させられた。

5. そのほかにダビデのした大切な働きでどんなことを知っているか。

→詩編の多くがダビデによるもの、あるいはダビデに由来するもの。

ねらい

- 信仰の勇者ダビデに対して約束された神の国の建設が、主イエス・キリストによって成就されたことを学ぶ。

展開例

- 「ダビデの子イエス」と福音書でしばしば呼ばれるように、ダビデへの神の約束が、とき満ちて、主イエスによって成就された。神の救済の歴史の不思議さについて学ぼう。

話し合ってみよう！

- 信仰の勇者ダビデにも大きな失敗があったことを、サムエル記下 11～12 章から確認しよう。この記事が残されていることには、王を超えた神への畏れがあったことを学び、神を畏れ敬うことについて話し合おう。

祈り

油断して、神への罪を犯すことのないようにお守りください。

○暗唱聖句○

サムエル下 7:12

聖書日課

- 日 サムエル記 下 7章 1～7節
- 月 サムエル記 下 7章 8～17節
- 火 サムエル記 下 7章 18～29節
- 水 サムエル記 下 11章 1～27節
- 木 サムエル記 下 12章 1～25節
- 金 詩編 51編 1～14節
- 土 詩編 51章 15～21節

○祈りの課題○

☆三日記☆

テキスト 列王記上 3章

〈ソロモンの即位〉

神を畏れる謙そんな歩みであったダビデにも、罪のとりことなる時がありました。ダビデは、バト・シェバを奪い取り、その家庭を破壊する大きな罪を犯しました（サムエル下 11 章）。預言者ナタンの叱責を通して、ダビデは率直に悔い改め、神はダビデを赦しました。しかし、この代償はたいへん大きく、ダビデは自らの家庭の崩壊に直面します。息子たちが互いに争い、イスラエルは内乱状態となります。ダビデとバト・シェバの間の息子であるソロモンは、その内乱の中、ダビデの指名により、王として即位しました。ソロモンは、ダビデの息子たちの中で年少でもあり、内乱を経験して、国を治めることの難しさを痛感していたでしょう。このことが、ソロモンの祈りの背景にあると思われます。

〈神の知恵を求める祈り〉

ソロモンは、即位して間もなく、ギブオン（注）の聖なる高台でいけにえをささげて神を礼拝しました。その夜、夢で現れた主なる神に答えて、ソロモンは、自分の小ささ、若さ、知恵の無さを告白し、善悪を判断する知恵、神の御心を聞き分ける心を祈り求めました（列王上 3:6-9）。これは、人間的な知恵ではなく、神の知恵を祈り求める祈りです。ソロモンは、イスラエルを治めるにあたって何よりも大切なこととして、神の知恵を願い求めたのです。この願いには、ソロモンの謙そんな姿が現れており、主なる神が喜ばれる願いでした。主なる神は、知恵に満ちた賢明な心をソロモンに与え、加えて富と栄光と長寿をもお与えくださいました。こうして、ソロモン時代のイスラエルの繁栄が始まりました。

〈その後のソロモン〉

ソロモンは、神の知恵に満ちてイスラエルを治めました。ソロモンの最大の事業は、神殿を建てたことです。ソロモンは、その神殿の完成に際して祈りました。列王上 8:27-28。イスラエルの民の罪の赦しを願い、また隣人との争いを執り成し、戦いに負けたときにも憐れんでくださいという祈りです。飢饉が起こったり、病があつたり、そのような災害に際して民が祈る祈りを聞きあげてくださいと、執り成して祈りました。主なる神は、ソロモンに答えて神殿を祝福し、イスラエルの王座と支配はとこしえであると約束されました（列王上 9:3-9）。そこに見るソロモンの姿は、神の御前にへりくだり、自らが神のしもべであることを知る謙そんな姿です。

しかし、富と権力の誘惑は恐ろしいものです。ソロモンは、恵みとして与えられた豊かさの中で、それをむさぼるようになります。衣食にぜいたくを尽くし、多くの女性を求めました。多くは異国の女性であり、彼女たちの手によって異教の神々が持ち込まれます。イスラエルの衰退は、まず王宮から始まりました。ソロモンは、こうして神の御前に謙そんなさを失い、主なる神は、ソロモンに敵対する者を起こされます。憐れみによってユダ族とベニヤミン族はダビデの子孫に委ねられますが、残りの十部族は別の王を立てて、イスラエル王国は分裂に至りました。統一王国時代はわずか二代で終わったのです。

ソロモンの生涯は、主の御前に謙そんなにへりくだって歩むことの大切さを教え、また、主なる神の恵みをむさぼり、怠惰であることに対する警告でもあります。（望月信）

テキスト 列王記上 3章

【単元のねらい】

やがて神から心が離れて、偶像礼拝に陥るソロモンも、若いときには謙遜で、神に喜ばれる人、そして主に愛される者（エディドヤ、サムエル記下 12 章 25 節）でした。「わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません」という心を、ソロモンが生涯たもち続けていたら、彼の生涯と働きも、この後の王国の命運も違ったものとなっていたことでしょう。わたしたちにも、同じ謙遜さと神への敬虔さが求められます。ダビデが祝福されたのは、神への畏れがあったからでした。

「聞き分ける心をお与えください」

今皆さんには、何か欲しいものがありますか。そしてそれが手に入れられるとしたら、どうしますか。もし神さまがあなたに、「何でも欲しいものを願いなさい。与えよう」と言われたら、あなただったら何を神さまにお願いしますか。今日は神さまからそのようなすばらしい約束をもらったソロモンの話です。

ダビデの後を継いでイスラエルの王さまとなったソロモンは、父ダビデにならい、神さまを畏れ、心から愛して従う心をもっていました。そしてイスラエルの王になろうとしたアドニヤヤ、その他の人々をしりぞけて自分を王にしてくださいました神さまに、ソロモンは心からの感謝の捧げ物をささげたのでした。その夜、夢の中で神さまがソロモンに現れて、「何でも願うがよい。あなたに与えよう」と約束されたのでした。皆さんだったら、そこで何と答えるでしょうか。ソロモンはここで、どんなお願いをしたと思いますか。ソロモンはここで、他の人なら願わないようなことを、神さまにお願いし、求めました。それは何だ

と思いますか。

まだ若くしてイスラエルの王となったソロモンは、イスラエルに住むたくさんの人々を正しく治める知恵が与えられることを、神さまに求めたのでした。しかもそこでソロモンが願ったのは、自分に都合のよいように国を支配するための知恵ではなくて、「聞き分ける心」でした。それはまず何よりも、たくさんの人々の苦しみや痛みを正しく聞き分けて、彼らを正しく裁き、治める心ということでしたが、それだけではなく、なによりも神さまのみ心とみ言葉を正しく聞き分ける心を求めたのでした。神さまから知恵をいただくならば、人々を正しい裁き、国を正しく治めることができます。しかし自分の知恵や力により頼んでは、正しい政治を行うことはできません。ソロモンは、ただすばらしい神の知恵を求めたのではなくて、何よりも神さまの言葉を聞き従い、神さまの知恵を正しく聞き分ける心を求めたのです。わたしたちがなにをするにも、まず神さまに聞き、神さまがなにを望んでおられるか、神さまを第一としていく心をもっているなら、あなたのすること

は何でも祝福されます。神さまがあなたの味方となってくださるからです。

ここではソロモンは、他の人が望むようなこと、たとえば長生きすることや敵を滅ぼすこと、この世の富や財産や栄光といったものではなく、「正しく聞き分ける知恵」を求めました。そして神さまは、このようなソロモンの立派な心を喜ばれ、ソロモンに彼が願った「聞き分ける心」と共に、願い求めなかったたくさんの祝福もお与えになる約束をされたのでした。これまでのだれもソロモンほど知恵のある人は今まで現れませんでしたし、「ソロモンの栄華」(マタイ6章29節)と後の人が言い伝えるほどソロモンの富と財産はすばらしいものとなりました。しかしそれはソロモンがすばらしかったから、すごかったからではなくて、神さまがソロモンに祝福としてお与えになったものだったのです。

残念なことに、ソロモンはこのときの神さまへの心を持ち続けることができませんでした。このときは、ソロモンは「わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません」という謙遜な心と、神さまを心から恐れ、従う思いをもっていました。だから神さまはソロモンを祝福してくださったのです。ところが、神さまがソロモンを祝福し、多くの富と財産、それに名誉と知恵で満たされるようになると、ソロモンは次第に高ぶるようになり、まるで自分の力と知恵で

それを得たかのように考えるようになります。ソロモンの晩年は哀れなものでした。たくさんの外国の女性を自分の妻にすると、その人たちの言いなりになって、まことの神さまを忘れ、心はなれて、偶像を拝むようになってしまいます(11章1～8節)。神さまは二度もソロモンに警告し、偶像を離れてまことの神さまを拝み、神さまだけに従うことを求めますが、ソロモンは聞く耳を持ちませんでした。そしてついには、一つだったイスラエル王国が二つに分裂してしまうことになってしまいます(同9～13節)。それはソロモンが神さまを離れて、神さまの言葉に聞き従わなくなってしまったからでした。そしてイスラエルの人々も、自分たちの王にならうようになってしまいました。もしソロモンが若かった時に持っていた謙遜で従順な心をずっと持ち続けることができたなら、ソロモンもイスラエル王国も、ずっと神さまに祝福されていたはずでした。ソロモンは若い時に、「正しく聞き分ける知恵」を神さまに求めました。わたしたちも同じものがが必要です。自分の知恵に頼ったり、自分の思いや願いのままに生きるのではなくて、神さまのみ心とみ言葉を「正しく聞き分ける心」です。そうして神さまに従って生きるとき、あなたは本当に祝福された幸いな人生を歩んでいけるのです。「主を畏れることは知恵の初め」(箴言1章7節)なのです。(三川栄二)

【今日の暗唱聖句】 列王記上 3章14節

もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう。

〈ねらい〉

まず神様の御言葉に聞き、神様を第一とすべきことを共に学びましょう。

〈展開例〉

みんなはおうちで聖書を読んでいるかな？
ソロモンさんは、神様のことがとっても大好きな人でした。そのソロモンさんが王様になったとき、神様はソロモンさんに「何でも欲しいものを願いなさい」っておっしゃったんだよね。ソロモンさんは、何を願いま

したか？・・・そう、「聞き分ける心をください」ってお願いしたんだよね。神様の御心を聞き分ける心です。ソロモンさんは神様を一番大切にしていたんです。だから、神様の御言葉を聞いて、その御言葉に従って生きようとしていたんだね。

私達も、神様の御言葉を聞くことを大切にして、神様の御心ができるようにしてくださいと、お祈りしましょう。

〈お祈りしよう〉

子どもたち一人一人に、神様にお願いしたいことを聞いてみましょう。
出されたお祈りを神に書いたり、ホワイトボードに書いたりしましょう。
お祈りを絵で描いてもよいでしょう。
出されたお祈りを、先生が助けてあげて、みんなでお祈りしましょう。
主の祈りをお祈りしてもよいでしょう。

天のお父さま

神さまの御心が分かるようにしてください。

.....
.....

このお祈りを、イエスさまのお名前によって、
おいのりします。アーメン。

〈暗唱聖句〉

列王記上3章14節

治めることでした。そして、神様の知恵による政治をして、イスラエルの国は、平和で豊かになりました。

〈学びのポイント〉

1. 神様に願って知恵を与えられた。
2. 神様への謙遜。
3. 主に従わなくなると、国も衰える。

しかし、神様に対する謙遜の心をだんだんと忘れ、ついに偶像礼拝まで行うようになりました。神様に従うことを忘れてしまうと人も、国も滅びてしまいます。

〈展開例〉

ソロモンの願いは、神様の御言葉に聞き従い、正しく聞分ける知恵を第一に求めました。自分のことばかりでなく、神様のこと、イスラエルに住む人々のことを思い、正しく国を

〈祈りましょう〉

ソロモンのかしこさは、ほんとうにすばらしいです。ほんとうのかしこさを、わたしにおしえてください。自分の知識や知恵にたよりません。神さまの言葉にしたがいます。

〈やってみよう〉

ソロモン王ゲーム

ソロモンになって、ソロモンのような聞き分ける知恵を身につけよう。

○遊び方

- ① ソロモン王の役を決める。
- ② ソロモン王役の子は、ほかのみんなから離れておく。
- ③ ソロモン王以外のもので、良い言葉・悪い言葉を考えて、良い言葉・悪い言葉と言う役を割り振る。良い言葉・悪い言葉は、それぞれ同じくらいの長さで、同じ数にする。
- ④ みんなは円になり、ソロモン王役の子が中央に立ち、みんなが同時にソロモン王に向かって、それぞれ割り振られた言葉と言う。
- ⑤ ソロモン王は、その中から良い言葉を聞き取って、当てる。

ソロモン王は、いくつ聞き取れるかな？

役割を変えて、何回か遊んでみよう。

○良い言葉・悪い言葉の例

良い言葉・・・しんせつ、やさしい、りこう、にゆうわ、けんそん、など

悪い言葉・・・いじわる、らんぼう、ごうまん、じぶんかって、のろま、など

〈ねらい〉

ダビデを継いで、ソロモンが王となった。彼はイスラエルの中の反対勢力を駆逐した(2:46b)。また、強国エジプトと縁戚関係を結ぶ(3:1)とともに、周囲の国々を制圧して(5:1)、国の安定と平和を実現した。そのソロモンが王位について間もないころ、彼は夢で「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」との神様のお言葉を聞いた。何を願うべきか。

〈展開例〉

1. 自分たちがこのような神様のお言葉を聞いたらどう答えるだろうか。
→真面目な答えは返ってこないかもしれない。そうであれば、対話の導入にとどめる。
2. ソロモンの答えにはどういう意味があるのだろうか。
→ソロモンの願いが「知恵(聞き分ける心)」であったことを生徒は知っている。その意味を問いたい。それは、王の働きに大いに関係しているのだろう。ダビデの時代から、王の働きを支える人々として、祭司、預言者、将軍がいたことが記されている。ソロモンの周囲には、さらに書記官、補佐官、12人の知事、その他の人々がいたことが記されている(4:2-7)。このことからすると、王に求められた最大の務めは、神様のご意思に従いつつ、その実行の方策をたてることにあったと考えられる。3:16からの記事から、司法的判断もそこに含まれていたことがわかる。それらの働きには、知恵が不可欠であり、ソロモンは王として最も大切な

ものを求めたと言えよう。しかし、そのことと、賢い人が偉いといった理解(学校の成績至上主義など)と混同しない注意が必要だろう。一人一人に異なる賜物が与えられて、神様のご栄光のために働くことの幸いへも、思いを発展させたい。

3. ソロモンのした大切な働きにどのようなことがあるか。
→神殿の建設。それはダビデの願いでもあり、ダビデはそのための様々な物を準備して、その実現をソロモンにゆだねた(7:51)。神殿が完成したときのソロモンの祈り(8章)は、信仰的で感動的なもの。ソロモンの治世の繁栄は有名。箴言の多くも彼に由来するもの(箴言1:1)。
4. イエス様がソロモンの時代の繁栄を引き合いにして言われたお言葉を知っているか。
→マタイ6:29。
5. ソロモンの犯した大きな罪と、それに対する神様の裁きを知っているか。
→11:1-10。人々への支配も過酷だったかもしれない(12:4)。ソロモンの死後、国は南のユダ王国(ダビデ王朝)と北のイスラエル王国に分裂した。それが神様の裁きによることを聖書は記す(11:11-12)。しかし、それでも、神様は、ダビデの子孫による王国の支配の約束をやめることはなさない(11:13)。

ねらい

- 人生の知恵は、神様から与えられることを、ソロモン王の物語から学ぼう。

展開例

- ソロモン王は、神の御心を聞き分ける知恵を求めました。神を畏れ、御心を聞き分ける知恵に満たされた人になることができるよう、祈り求めよう。

話し合ってみよう！

- 知恵と知識は、どこが違うのだろうか。また、知恵ある人間になるために何が必要かを、考えてみよう。列王記上 3:9-14、箴言 1:1-7 を参照。

祈り

知恵ある人間へと成長させてください。

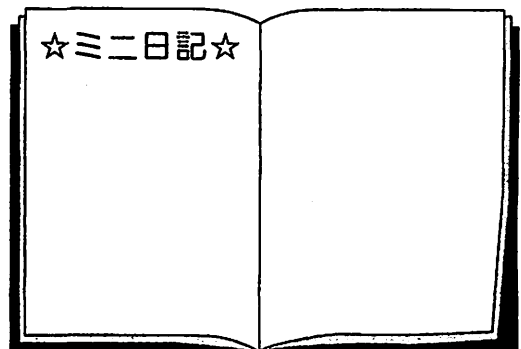
○暗唱聖句○

列王記上 3:14

聖書日課

- 日 列王記 上 3章 1～9節
- 月 列王記 上 3章 10～15節
- 火 列王記 上 3章 16～28節
- 水 列王記 上 8章 12～19節
- 木 列王記 上 8章 20～25節
- 金 列王記 上 8章 26～32節
- 土 列王記 上 8章 33～43節

○祈りの課題○



テキスト エレミヤ書 18章1～17節

1. 平和を災いの計画とする神の民(1-17)

エレミヤより少し前の時代の預言者イザヤは、「わたしたちは粘土、あなたは陶工、わたしたちは皆、あなたの御手の業」(イザヤ64:7)と語り、それゆえ「何をしているのか。あなたの作ったものに取っ手がない」などと粘土が陶工に言うことはできないと言明しました(同45:9)。

同じ本末転倒ぶりを、エレミヤは陶工の家の前で語ります。「陶工は粘土で一つの器を作っても、気に入らなければ自分の手で壊し、それを作り直す」、それと同じことを主なる神がすべての民に、とりわけユダの民にすることは、許されないのかと。エレミヤに委ねられた言葉とは、諸国民、諸王国を「抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植える」言葉でした(18:7, 1:10)。

しかし、その意図は、彼らが悔い改めることで、「もし断罪したその民が、悪を悔いるならば、わたしはその民に災いをくだそうとしたことを思いとどまる」のです(8)。神は確かにご自身の民に対して「災いの計画」を立てておられますが、それは彼らが「悪の道から立ち帰り・・・道と行いを正」すためでした(11)。ですから本当は、「それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるもの」なのでした(29:11)。ところがユダの民は、自らの頑なさや背信によって、それを文字通り「災いの計画」としてしまうのでした(12-17)。

2. 偽預言者とのエレミヤの戦い(18-23)

神に逆らい続ける民にとっては「災いの計画」でしかない預言を語るエレミヤは、非常にわずらわしい存在でした。彼らはエレミヤが預言者であることは認めています(18)。それを認めた上で、それでもエレミヤを亡き者にしようと企てます。エレミヤに対する暗殺計画は、これまでに故郷アナトトの人々によるものがあり(11:21以下)、神殿説教(7章)では激高した祭司と群衆によってあやうく暴殺されかけます(26章)。また大祭司、官僚、王によって迫害され、監禁され、餓死させられそうになります。

しかしエレミヤにとって最も熾烈な戦いは、偽預言者との戦いでした。彼らは神から遣わされたのではないのに、主の御名によって「偽りの平和」を語り、それによってユダとエルサレムの滅亡をさらに確かなものにさせてしまっていたのです(14:14, 5:31, 23:9-40)。その中心人物の一人がハナンヤでした。彼はエレミヤの預言を否定して、二年以内にエルサレムはバビロンから救われると語りました(28章)。またバビロン寄留の捕囚民の間でもアハブ、ゼデキヤ(29:21)、またシャマヤが活動し、民を惑わしていました(29:30)。

エレミヤは、人々が聞きたいこと、期待することを語る偽預言者からの告発と策某に対しても忍耐強い戦いを強いられました。「舌をもって彼を打とう」(18)とは、あるいはこういう偽預言者による対抗預言との戦いが暗示されているのかもしれませんが。エレミヤの戦いは、真理の言葉の戦いであり、災いから真の平和に転換するための救いの言葉の戦いなのでした。(三川栄二)

テキスト エレミヤ書 18章1～17節

〔単元のねらい〕

神様が創造主であるということは、同時に滅びを与えることもおできになる方であるということです。すべては創造主なる神様の御手の内にあります。しかし、子どもたちの恐怖をおおるのではなく、滅びを与えることの出来る神様は、救いをもお与えくださるお方であることを子どもたちの心にしっかりと根付かせ、神様の御言に従う道へと導きたい。

「私たちを愛して造り直す神」

みんなの家にはお茶碗とかお皿とかコップがありますね。その中にはガラスで出来たものとかプラスチックのものとか、陶器で出来たものとかがあるよね。陶器のお皿とかコップとかは、陶器を作る人が粘土をこねて、形を作って、それを大きな窯で焼いて完成させます。だけど、作った人が、その作品を気に入らなければ割ってしまいます。僕たちがそれを見てどんなにすばらしいと思っても、作った人が気に入らなければ割られてしまうのです。

今日の聖書のお話はエレミヤという預言者が神様に陶器を作る人のところへ行くと命令されて、そこに出掛けていったところから始まります。

エレミヤさんが陶器を作る人のところに行くとその仕事を見ていると、粘土をこね、形を作ってもそれを気に入らなければすぐに壊してまた作り直しています。その作ったものが良くないものだったら、壊して作り直すことは作った人の自由です。みんなも学校とかで工作をしてうまくできなかつたり、作ったものが気に入らなければ壊して作り直したりしたこともあるでしょう？ 作ったものが悪ければそれを壊して良いものを作るの

は作った人の自由なのです。

神様がエレミヤさんに陶器を作る人のところで、このような仕事を見せたのは一つのことを教えるためでした。それは、この世界を神様が創造なさった、つまり、神様が作ったのだから、その作品が良いものでなければ、神様は、この世界を壊して、造り直すことが自由に出来るのだということでした。

このエレミヤさんの時代、イスラエルの人たちは、神様からの恵みを与えられていることや神様に守られていることを忘れて、人間の手で石や木を削って作った偶像を拜んだりしていました。たくさんの人たちが本当の神様の方から、偽物の作り物の何も出来ない像の方に向いて神様に逆らっていたのです。神様が創られ、神様によって守られていたのに、イスラエルの人たちは神様に逆らっていたのです。これは、神様の作品としてすごく良いものかな？ それとも、気に入らない悪いものかな？ …。造られた方に逆らっているのだから良い作品ではないよね。悪い作品はどうなるんだっただけ？ …。そう、創った人が気に入らない悪い作品は壊されてもおかしくないんだよね。

神様はこの時、悪い作品となってしまった

イスラエルを滅ぼそうと決めておられたんです。これはひどいことではなく、神様はイスラエルの人たちと契約を結んだとき、神様に逆らうなら裁きを与えると最初からおっしゃっておられたのです。神様の御言葉は正しく必ず本当になるのです。

しかし、それは、滅ぼすことに神様の御心があるわけではありません。そのことを通して、私たちが造り直してくださるのです。神様は、神様に逆らっていた罪を悔い改めて、神様の方に向き直ることを求めておられます。そして、神様の方に向き直るなら、滅びを免れさせてくださるということです。神様は造ったものに滅びをお与えになることのお出来になる方です。でも、神様は神様に悪いことをしていたことに気がつき、神様にごめんなさいと素直に謝る人を滅びから救ってくださるということです。

それはイスラエルの人たちだけではなく、今ここに来ているみんなにも教えられていることなんです。人間はみんな神様に逆らう罪人です。その罪人は私たちが造ってくださった神様から滅びを受けなければいけません。だけど、ただ神様はみんなを滅ぼそうとなさっているわけではないのです。自分の罪に

気が付いて、神様の方に向き直って、神様にごめんなさいと謝るなら、みんなも滅ぼされないのです。

神様はみんなが滅びることのないように、イエス様を私たちに与えてくださったのです。そして、イエス様が十字架に架かってくださって、私たちがそのイエス様を信じるだけで、罪を赦してくださるように神様はしてくださったのです。イエス様を信じることで、私たちは私たちが造ってくださった神様に滅ぼされることはなくなるのです。

神様は私たち人間もこの世界もすべて創造してくださいました。この世界は神様の作品で、最初はとても良いものでした。でも、神様に逆らう罪のためにその作品が、悪いものになってしまったのです。その作品を神様は壊して新しい良いものをお造りになることも出来るのです。でも神様はこの造られた世界を壊すのではなく、造り直そうとしておられます。私たちが滅ぼすのではなく、救い出す道を与えてくださったのです。神様は、悪くなってしまった、壊されてもおかしくない作品である私たちを、それほど深く愛してくださっているのです。 (春名義行)

〔今日の暗唱聖句〕 エレミヤ書 18章6節後半

見よ、粘土が陶工の手の中にあるように、
イスラエルの家よ、お前たちはわたしの手の中にある。

〈ねらい〉

御言葉に聞き従わない者にとって、神様は怒りの神であるが、信じ従う者にとっては救いと愛の神であることを教えましょう。

〈展開例〉

ユダが滅ぼされたことを聞きました。それは、ユダの人たちが神様の御言葉に聞こうとしなかったからです。神様の厳しい御言葉よりも、みんなが喜ぶようなことばかりを言う人の言葉を聞いていたんだよね。そうして、エレミヤさんの語った神様のほんとうの言葉を聞かなかったのです。

神様の御言葉に聞き従わないことを神様はお嫌いになります。神様の御言葉を聞こうとしない人たちにたいして、お怒りになります。

そして、神様は、神様の御言葉を聞く人を喜んでくださり、愛して守ってくださるんだよ。神様は、みんなのお父さんやお母さんと同じように、言うことを聞かなければ叱られるけど、それはみんなを愛しておられるからです。神さまの子どもである、イスラエルの人たちやみんなのことが大好きだからです。神様は、神様の御言葉を聞いて、神様が命じておられることを守る人を、喜んでくださいます。

〈折り〉

悪い心を悔い改めて、神様の御言葉を受け入れて、従うことができるようにしてください。神様の愛の中に置かれていることを信じることができますように。

〈やってみよう〉

工作をしよう!

ころころすべり台

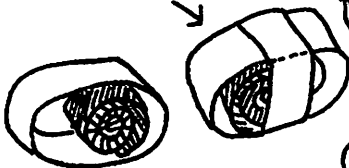
① 幅2cm長さ12cmの画用紙で輪をつくる。



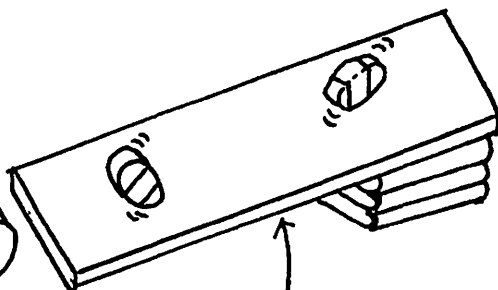
② 厚紙幅1.5cm長さ35cmを丸めセロテープでとめる。



③ 玉を入れて、出ないように紙を巻く。



④ 板に傾斜をつけてころがすとおもしろい動きをする。



〈暗唱聖句〉

エレミヤ書 18章 6節後半

〈学びのポイント〉

1. 神様は創造主である。
2. 神様は罪を悔い改めることを望んでおられる。
3. 悔い改めるならば、必ず救われる。

〈展開例〉

神様は、この世のすべてを創られました。創造主なる神様は、すべてを創ることも、すべてを無にすることもおできになるお方です。

人が罪を犯し神様に従わず、悪の道に進むならば、この世を無くしてしまうこともおできになりますが、神様は預言者を通して本当の神様にたちかえることを望んでおられ、忍耐強く待っておられます。

そして、罪を悔い改めるならば、かならず救いの道を備えてくださいます。

〈祈りましょう〉

神さまが、わたしをつくってくださいました。神さまを信じて、神さまにしたがうためです。エレミヤの教えのように、神さまをうやまい、イエスさまにしたがいます。

〈やってみよう〉

粘土で遊ぼう!

- いろいろな粘土（油粘土、紙粘土など）を用意して、遊びましょう。
- 下図は、小麦粉の粘土の作り方です。参考にしてください。



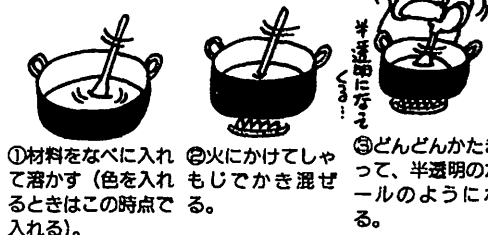
- 用意するもの
- 小麦粉 カップ1
 - サラダ油 スプーン1
 - 水 カップ1
 - 塩 カップ半分
 - 絵の具



密閉容器に入れて冷蔵庫にしまっておくと、長期間持ちます。



裏に磁石をはりつけると、すてきな飾り磁石になります。穴をあけてひもをつけると、オーナメントになります。



- ①材料をなべに入れ、溶かす（色を入れるときはこの時点で入れる）。
- ②火にかけてしゃもじでかき混ぜるときはこの時点で入れる。
- ③どんどんかたまると、半透明のボールのようになる。



- ④火を止めて、さらにかき回す。
- ⑤小麦粉をしいた台の上にあける。熱いので少しさます。



⑥小麦粉をまぶしながら、細工しやすい硬さになるまでよくこねる。

この粘土は、自然乾燥で乾かしましょう。

色つき粘土はそのまま上からニスを塗ると、つやが出てきれいです。色無しときは、乾いてから着色します。

〈ねらい〉

ソロモン王の後、国は北のイスラエル王国と、南のユダ王国(ダビデ王朝)に分裂する。イスラエル王国は神様に背き、その裁きとして BC782 年にアッシリアに滅ぼされた。一方、ユダ王国は滅びをまぬがれたものの、国の中の罪は増していった。そのような中、神様は預言者を用いて、神様に立ち返るよう呼びかけられた。

〈展開例〉

1. ユダ王国の最後の5人の王様(ヨシヤから)について、列王記下がどのように記しているかを調べてみよう。この中で良い王様と記されているのはだれで、悪い王様と記されているのはだれ?

→ 23:24-25、23:31-32、23:36-37、24:8-9、24:18-19。良い王様はヨシヤだけ。

2. どういう王様が良くて、どういう王様が悪いのか?

→ 悪い王様は「主の目に悪とされることをことごとく行った」と記されている。それは、良い王様であるヨシヤの場合(23:24-25)と反対なのだろう。つまり、国に偶像などをつくり、自分で礼拝するだけでなく、国民にも偶像を礼拝させた。そうではなく、神様の戒めに従って、偶像を捨て去って神様に立ち返った王様が良い王。

3. 背くユダの国に対して、神様は新バビロン帝国(ネブカデネザル)による脅威を与

えられるともに、預言者を遣わして、神様に立ち返るように呼びかけさせられた。しかし、神様から使わされていない偽の預言者も現れた。「神様の都であるエルサレムは滅びるはずはない。平和だ」という預言者と、「平和も慈しみも憐れみも取り上げられる」という預言者とどちらが本当の預言者だったのだろう。

→ エレミヤ 16:5 (エレミヤに与えられた言葉)。人々に気に入られることを話す預言者が正しいわけではない。神様から与えられた言葉(預言)を語るのが真の預言者。

4. エレミヤ書 18 章の陶工の手の中にある粘土の話(礼拝の箇所)は、神様がユダの国も滅ぼされかもしれないことを示している。陶工が気まぐれに粘土を潰すように、神様はユダの国を滅ぼされるかもしれないということか。

→ そうではない。たとえ人は滅ぼされても造り主である神様に文句は言えないが、神様は気まぐれで滅ぼされることはない。悔い改めて神様に立ち返る民を、神様は滅ぼされない。また、神様はそのことを強く望まれておられる。預言者はそのことを伝えた。

5. 今の時代に預言者はいるか。あるいは、預言者のような人はいるか。

→ 旧約時代のような預言者はいない。しかし、説教をする牧師の働き、また、神様のみ心を語り示す私たちの働きは、今の時代の預言者の働きといえる。

ねらい

- 神は人間に災いを下すこともあることを学ぼう。
- しかし、それは、私たちが悔い改めと信仰へ導くためであることを覚えよう。

展開例

- 「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。見よ、わたしは災いをこのところにもたらし。それを聞く者は耳鳴りがする」(エレミヤ 19:3)。神は、正義に反する悪が行われるならば、災いを下して罰せられるお方であることを理解しよう。

- 神の御心は、その恐るべきみわざを通して、悔い改めと信仰へと導き、平和と祝福を与えることにあることを理解しよう。

話し合ってみよう!

- ご自分の愛する民に災いを加える、その神の心の痛みについて考えよう。
- 私たちにおいて、災いがなぜ起こるのか、どのような意味があるのか、話し合ってみよう。

祈り

幸いと災いの両方をもたらす力のある神を畏れて歩む者にならせてください。

○暗唱聖句○

エレミヤ 18:6b

○祈りの課題○

聖書日課

日	エレミヤ書	18章	1～10節
月	エレミヤ書	18章	11～17節
火	エレミヤ書	18章	18～23節
水	エレミヤ書	19章	1～5節
木	エレミヤ書	19章	6～9節
金	エレミヤ書	19章	10～13節
土	エレミヤ書	19章	14～15節

☆三日記☆

テキスト エゼキエル書 34章 11～31節

1. 散らされる民を憐れむ神(1-10)

この章ではイスラエルの牧者が告発されています。預言者ミカヤがアハブ王の戦死により兵士が散り散りになって逃亡する様を「イスラエル人が皆、羊飼いのいない羊のように山々に散っている」と表現したとおり(列王下 22:17)、イスラエルの牧者とは具体的には「王」のことで、イスラエルの理想の王であるダビデは、神が「牧場の羊の群れの後からあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした」(サム下 7:8)と言われるように、もとは羊飼いでした。羊飼いが細心の注意を払ってか弱く小さな一匹一匹の羊を見守り、また最大の勇気をもって自分の身を盾として猛獣の危険から群れを守り、さらに忍耐強く群れを導いて養うように、イスラエルの王にはそのように民を治め、守り、導くことが求められました。それは古代オリエン特世界の専制君主とは全く異質な王の姿です。

しかし、北イスラエルと南ユダの歴代の王は、そのような牧者として立てられたにもかかわらず、その任を果たさず、かえって牧者が自分自身を養った結果が、国家滅亡と捕囚という時代でした。そのため、民は国々へと散り散りにされ、搾取され、酷使されて弱り果てて、餌食とされていました。

この預言が、ユダ滅亡直後のものであることに注意しましょう。あえぎ苦しむ民の悲痛な声が、ここには込められており、またそれを聞いて心を痛み、心を引き裂かれる神の痛みが込められています。この章は単なる抽象的な文学表現ではなく、これまでのイスラエルの歴史と、この捕囚という歴史的出来事を踏まえた現実を訴えています。

2. ご自身が民を集め牧する神(11-31)

神は、この悲惨な現実を看過することができず、イスラエルの民の痛みを分かち合われます。神は、いても立ってもいられない思いで、ご自身が散り散りにされた民を諸国から探し出し、そこから集めて救い出し、再び豊かな牧草へと導いて、そこで養うことを宣言されます。「わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする」と(16)。そのためにダビデの子である「一人の牧者」を起こすことが約束されます(23)。

これが実際には、ダビデ王朝が廃絶され、ダビデ国家が終焉した時点で語られていることに注目しましょう。かつてダビデに語られた、ダビデの家(王朝)を永遠に樹立されるという神の契約(サム 7:8-16)はどうしたのかと人々が危惧する中で、ユダ王国滅亡という事態はその約束を反故にすることではないということ、新しい展望が神によって与えられていくことが語られます。

この時代の人々は、それが再びダビデの末裔によるユダ王国の復興によって実現すると期待しましたが、神の計画はもっと遠大で、ご自身の一人子による新しい神の民の復興を意図されたのでした。「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」主こそ(マタイ 9:36)、99匹を残して「見失った一匹を見つけ出すまで捜し回り」(ルカ 15:4)、「失われたものを捜して救うために来た」(ルカ 19:10)「良い羊飼い」(ヨハネ 10:14)なのです。

(三川栄二)

テキスト エゼキエル書 34章 11 ~ 31節

〔単元のねらい〕

私たちがキリスト者として歩む道は、多くの困難や誘惑、誘惑による危険が待ち受けている。そのような中でも、真の牧者が私たちを導いてくださっていることの喜びと安心感へと子どもたちを導きたい。

「本当の羊飼い」

神様に従うことをしなかったユダ王国は、とうとう神様に滅ぼされてしまいました。そして、そこに住んでいた人たちは捕まえられバビロンの国に連れて行かれる事になりました。これは神様の裁きでした。けれど、神様はこの人たちをこのまま見捨ててしまわれた訳ではないのです。

今日の聖書には、イスラエルの人たちが羊の群れにたとえられています。みんなは羊を見たことがあるかな？ 牧場なんかで見たことがある人もいるかもしれないけど、羊は人間がきちんと守ってあげないと生きていくことの出来ない、とっても弱い動物です。だから羊には羊飼いが必要なのです。羊であるイスラエルのために、神様は羊飼いとして何人もの王様を立てられました。けれど、その羊飼いは悪い羊飼いが多くて、イスラエルの人たちを正しく導くことが出来なかったのです。そして、とうとうユダの国は滅ぼされ、バビロンへと連れて行かれました。これは神様が前から予告し、警告していたことでした。けれどイスラエルの人たちは神様の方に向き直らないで、悪いことを繰り返してきたのです。その結果、神様にユダの国は滅ぼされてしまうことになりました。

バビロンに連れて行かれたイスラエルの人

たちは、それでも神様の民であることには変わりありませんでした。神様の羊なのです。しかも、神様が選ばれた羊なのです。だから、神様は、その羊を刑罰の中に入れてそのまま放っておかれることはありません。

今まで神様が御自身の羊を任せられた王様たちは神様の御心に従わず、好き勝手に羊を導き、羊を危険な目に遭わせました。そして、羊を散らせてしまったのです。こんな悪い羊飼いに羊を任せておくことは出来ません。でも、羊には羊飼いがが必要です。ですから神様は羊飼いをもう一度用意してくださると約束なさるのです。でも、今度は他の人にまかすのではなくて、神様御自身が羊飼いとして導いてくださると約束してくださったのです。

この羊飼いは、散らされて危険な目に遭っている羊を一匹一匹探して、そして、守り養ってくださいます。神様御自身が、いなくなった羊である人間を一人一人ていねいに探し出してくださるといなのです。これは、神様が今捕らえられている人たちを救い出し、もう一度神様の国イスラエルを回復してくださるとい約束なのです。

悪い羊飼いの時、イスラエルでは、弱い人たちが痛めつけられ、弱い人たちがたくさん悲しい思いをしてくれました。でも神様が羊飼

いとなったとき、弱い人たちを苦しめてきた人たちは取り除かれるのです。こうしてイスラエルは回復されるのです。

この回復のために、神様は一人の羊飼いを与え、その羊飼いのもとの回復がなされるのです。それは今まで何人もいた羊飼いは違ってたった一人の羊飼いなのです。しかも、神様の御言葉に聞いて神様の御思いを必ず行う羊飼いなのです。この羊飼いが民を導くことで、民は神様との平和の契約の中に入れるのです。この羊飼いが羊飼いとなっているから神様はこの新しい民の神様となってくださるのです。そして、この羊飼いによって、もう一度集められたイスラエルは神様の祝福を受けることができるようにされるのです。

イエス様を信じる私たちは、あのイスラエルの人たちと同じ、神様の羊です。イエス様こそが、羊である私たちを導いてくださる本当の羊飼いです。神様は、ご自身の独り子であるイエス様を、まことの神様ご自身である

イエス様を、私たちの羊飼いとしてお遣わしく下さいました。イエス様というまことの羊飼いによって、私たちは養われます。

この羊飼いは今、私たちを探し出してください。私たちは、迷いだして滅びに向かってしまう、愚かな羊たちです。しかし、この本当の羊飼いであるイエス様が、危険に向かって歩いている私たちを一生懸命探してください、見つけ出してください。そして、私たちを神様の祝福を受けることのできる、神様の民としてくださるのです。そして、神様の民とされた私たちを祝福の内にいつも導いてくださるのです。

私たちがイエス様を信じて歩んでいくとき神様に従うよりも楽しそうに見える道へ誘おうとすることがたくさんあって、苦しむこともたくさんあります。でも、私たちの苦しみをイエス様は知っていてくださって、ちゃんと正しい安全な道を歩くことができるように導いてくださるのです。（春名義行）

〔今日の暗唱聖句〕 ヨハネによる福音書 10章 14節

わたしは良い羊飼いである。

わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。

〈ねらい〉

一人一人を罪の中から捜し出してくださる真の羊飼い主イエスを子どもたちの心に刻み込みましょう。

〈展開例〉

イスラエルの国はたくさんの王様によって支配されてきました。それは神様の羊であるイスラエルの人たちを導くための羊飼いでした。でも、その羊飼いたちは、自分自身を肥え太らせて、羊の面倒を見ず、羊たちが荒れ野に散らされてしまうことになった、そう言

われるようなイスラエルの民の状況でした。そのため、神様は、イスラエルの民を憐れんで、本当の羊飼いをお送りくださいました。それがイエス様です。

イエス様は本当の羊飼いとして、罪のこの世界の中でさまよっている小さな羊を探し出してくださるのです。そのイエス様が探してくださっている小さな羊は○○ちゃんや△△くんなんだ。そのことをよく覚えて、みんなを捜してくださっているイエス様を信じるお友だちになろうね。

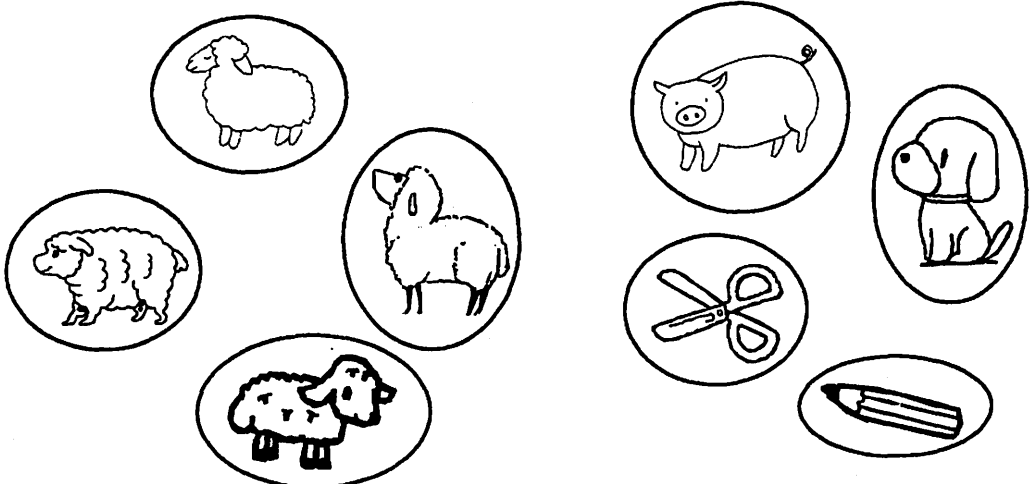
〈やってみよう〉

ひつじあつめゲーム

魚釣りゲームの要領です。

用意するもの・・・ひつじの絵を描いた紙、そのほかのものを描いた紙、ゼムクリップ、たこいと、釣り竿代わりにする長い棒、小さな磁石

あそびかた・・・ひつじの絵を描いた紙にゼムクリップをつけて、床や机の上に戻しておきます。そのほかの絵を混ぜておいて、つり上げてはいけない、などのルールを決めてもよいでしょう。釣り竿代わりにする棒の先にたこいとをつけ、そのたこいと先端に磁石をつけて、ひつじの絵をつり上げて遊びます。ひつじの絵の枚数を人数によって調整してください。



〈暗唱聖句〉

ヨハネによる福音書 10章 14節

〈学びのポイント〉

1. わたしたちは弱い羊です。
2. 神様は、迷った者を探し出してください。
3. イエス様はまことの羊飼いです。

〈展開例〉

わたしたちは羊のように弱く、すぐに道に迷ってしまい自分の力で安全な場所にたどり着くことができません。神様にそむき、御言葉に聞き従わなくなりました。わたしたちに、神様は本当に心を痛み、憐れんでくださ

います。

羊のような弱いわたしたち、迷子になってしまったわたしたちを、一生懸命探し出してください。豊かで平和な牧草地へ導いてくださるために、まことの羊飼いであるイエス様を与えてくださいました。イエス様の御声に従って歩むとき、本当の安らぎが得られます。

〈祈りましょう〉

わたしは小さな羊です。イエスさまが、わたしの羊飼いになってくださったことをかんしゃします。わたしが、迷うとき、わたしを正しい道につれもどしてください。

〈聖書を開きましょう〉

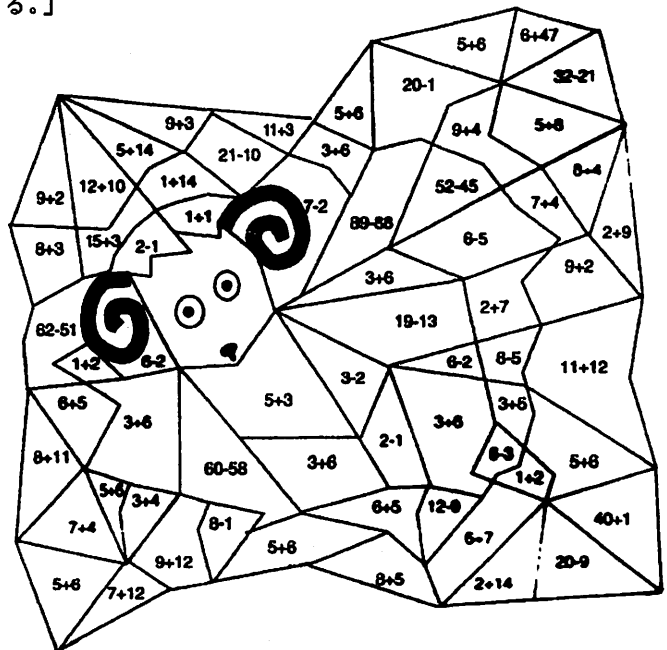
ヨハネによる福音書 10章 14節

- () をうめて、ことばを完成させましょう。
- 「わたしは良い () 飼いである。
- わたしは自分の () を知っており、
- () もわたしを知っている。」

〈やってみよう〉

羊をさがせ

まいごになった一匹の羊をさがしてください。計算して、10より小さい数のところに色をぬってみよう。



〈ねらい〉

エレミヤの預言の言葉を受け入れず背き続けるユダの国に、神様は新バビロニア帝国の軍隊を送り、滅亡させられた（エルサレムの壊滅 BC586）。それによりダビデ王朝も滅んだ。それは、まったくの絶望といえる状況。しかし、そのような絶望的な状態の中でも、神様は祝福の約束を与えてくださる。エゼキエルは、捕囚の民とともにバビロンに連れて行かれ、その地でその預言をした。

〈展開例〉

1. 列王記下が記すエルサレム壊滅の悲惨な状況を学ぼう。
→ 25:1-12。
2. 捕囚（列王下 25:11）とはどういう人々なのだろう。
→ 古代の戦争において、戦勝国は滅ぼした国の人々（特に役に立つ人々）を捕虜あるい

は奴隷として自分たちの国に連れて行った。そのような人々。その中にエゼキエルもいて預言した。その言葉は、捕囚の人々に対しての言葉であるとともに、すべての人々（今の私たちに）向けられた神様の言葉でもある。

3. エゼキエル 34:11-14 を読んで感想を語り合おう。
→ 回復の希望。特に、絶望の中でこの言葉を聞く人々の思いを連想してみよう。
4. エゼキエル 34:23-24 を読んで感想を語り合おう。
→ 「わが僕ダビデ」からイエス様を思うとともに、ヨハネ 10:7 からの箇所「良い羊飼いのたとえを思っしてほしい。ダビデ王朝に代わる真の王として、イエス様が世に来られた。

ねらい

- ユダの滅亡後も（自分の国が減びても）、なお将来の回復の預言の言葉が語られていることに注目しよう。

展開例

- イスラエルの国が減ぼされ、民が散らされてなお、回復の希望の約束が語られる。民族や国を超えた神の支配、神の御国が指し示されていることを理解しよう。

- 真の大牧者イエス・キリストが与えられる喜びを分かち合おう。

話し合ってみよう！

- 国が減びてなお希望を語る預言者が現れたことについて話し合ってみよう。
- 私たちが目を注ぐべき神の御国について話し合ってみよう。

祈り

- 私たちのまなざしを、民族や国家を超えた神の御国に向けさせてください。

○暗唱聖句○

ヨハネ 10:14

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 エゼキエル書 34章1～10節
- 月 エゼキエル書 34章11～19節
- 火 エゼキエル書 34章20～31節
- 水 エゼキエル書 37章1～10節
- 木 エゼキエル書 37章11～14節
- 金 エゼキエル書 37章15～21節
- 土 エゼキエル書 37章22～28節

☆三二日記☆

テキスト イザヤ書 45章1～13節

イザヤ書 44章23節から45章13節まで、新共同訳聖書の小見出しは「キュロスによる解放」としている。これまでほのめかされていたペルシア王の働きが、ここで初めてその名を挙げて語られる。バビロン捕囚からの解放は、言わば第二の出エジプトと言えよう。実に、その解放者は選びの民ではなく、異邦人であった。しかも、イザヤはここで「主が油を注がれた人」とすら紹介している。「メシア」と言われているが、もちろん、救済者、「キリスト」の意味ではない。神に立てられた王、祭司、預言者としての称号である。

しかしここでイザヤが告げるのは、異邦人の活躍ぶりということではなく、真の神、創造者なる神は、異邦人をも、御自身の歴史支配の道具となさることがおできになるという神の主権性への賛美と証しなのである。

何故、神は、この異邦の王をお立てになるのか。その理由をイザヤは三つ教える。一つは、クロス自身にイスラエルの神を知るため(3)。もう一つは、神の選んだイスラエルの救いのため(4)。三つ目は、世界中の民がイスラエルの神こそ真の神、創造者にして主であられることを知らせるためである(6)。

8節では、天と地における神の支配が、コンパクトに見事に歌い上げられている。

しかしながら、9節から15節まで、イスラエルの「吹き」を聞かれた神が、彼らを訴える言葉が語られる。「土の器のかけらに過ぎない」とは、イスラエルの民、選びの民であり、陶工とは、そのイスラエルを造り、選ばれた主である。彼らは、自分達の不信仰、

偶像礼拝の罪によって捕囚の裁きを受けながらなお、選民が異邦人によって救われることに抗議する。神の不義、不正であると神と言い争う。しかし、神は自ら「正義」(13)を主張し、その正義によってこそ恵みを施し、神の民を解放するのであると説得してくださる。しかも神は、彼らの実に世俗的、地上的な心配がどこにあるかも深く理解して、「報酬も賄賂も求めない」と指摘して、説得しておられる。何という優しい配慮であろうか。

ちなみに、ヘブライ語において、正義(ツエデク)と恵み(ツエグカー)とは、同根文字である。その意味で、8節の「恵み」を新改訳聖書は「正義」と訳したが、新共同訳聖書が「恵み」としたことは正しいであろう。神の正義と恵みとは一つのことなのである。

さて、このテキストから、子らに何を語るのか。何よりも、神の歴史支配の確かさへの信仰を養い励ますことであろう。教理の言葉で言えば、摂理の信仰を説くこととなろう(『子どもカテキズム』問13とその解説を参照)。また、我々は未信者に取り囲まれて旅をしている。未信者との正しいかかわり方について考えさせることも大切であろう。子どもたちにとって未信者との出会いもまた神の摂理であり、その中で神の正義と恵みの支配がなされていることを悟らせ、安心して生き、何よりも自らが救いの歴史の表舞台へと召し出されていることを感謝をもって覚えさせたい(『子どもカテキズム』問51を参照)。

(相馬伸郎)

テキスト イザヤ書 45章1～13節

〔単元のねらい〕

バビロンでの惨めな生活は、神の憐れみによってエルサレム帰還へと導かれる。言わば、第二の出エジプトの出来事である。しかし、そこでイスラエルを脱出させるのは、異邦人、キュロス王であった。この空前絶後の御業に対して、イスラエルは自らの選民意識の中でなお、神に文句を言う。自らが土の器のかけらであることをなおも悟らない者がいるのである。ここでは、主なる神が人類の歴史を支配し、救いを完成される大きな幻を仰ぎ見たい。未信者との正しい関係についても考えさせたい。また、我々こそは、神の支配を映し出すための選びの民であること、その務めの重さと幸いを覚えさせたい。

「捕囚からの解放」

神さまに選ばれたイスラエルの人々は、神さまから遣わされた預言者たちの言葉を素直に受け入れませんでした。不信仰と偶像礼拝を止めませんでした。そのためにとうとう自分たちの国が奪われ、バビロンという異邦人の国の奴隷になって連れて行かれてしまいました。しかし、神さまはイスラエルの人々が悔い改めと信仰によってもう一度、故郷のエルサレムに戻って礼拝をささげたい、真の神さまを神さまとして従って生きてゆきたいと祈り願っているのをご覧になりました。そして、バビロン捕囚が始まって50年余りがたちました。バビロンの国は、こんどはベルシアという国によって滅ぼされてしまったのです。イスラエルの人々を支配するのは、キュロスという王様になったのです。

ところがどうでしょう。信じられないようなすばらしいニュースがイスラエルの人々に届きました。「天の神さま、すべての造り主の真の神さまが、私に命じられました。あなたがたは、自分の故郷に戻りなさい。そして、真の神さまの神殿を造りなさい。」何が信じ

られないかと言って、ベルシアの王様はユダヤ人ではありません。神さまの選ばれた民族ではないのです。本当なら、捕らわれているイスラエルの人々を奴隷のようにして、いっそう苦しめたり、利用したりできるのです。世界中で一番力のある王様になったのですから、どんなことでも自由にできるのです。文句を言える国も人も誰もおりません。

そのような王様が、今、イスラエルの神さま、聖書の、真の神さまから使命を与えられています。神さまは、このキュロス王様を用いて世界を治めさせ、イスラエルの人々をエルサレムに帰し、壊されて粉々になってしまった神殿を建て直そうとされるのです。

僕たち私たちは、これまでも何回も、神さまはご自分の約束、契約に真実です。約束を破られることはないと言ってきました。アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を、たとえイスラエルが忘れてしまっても、破ってしまっても、神さまは覚えておられるのです。そして、そのためなら、僕たち私たちが考えられないような素晴らしいこと、想像もできない

ような素晴らしい方法で神さまの栄光、僕たち私たちの救いを実現してくださるのです。

さあ、けれども、そんな素晴らしい方法で救ってくださる真の神さまに対して、素直に有難うございます。私たちの罪をお赦しく下さいと言えないで、逆に、神さまに文句を言う人達もいました。「私たちは神さまが選ばれた特別な人間なのです。そんな私たちが、たとえどんなに力のある王様であっても、神さまに選ばれていないような王様に助けられるなんて嫌だ。どうして神さまは、私たちの中から王様を立ててくださらないのか……。」こんな不平をブツブツ言うのです。

神さまは、そんな人々に対してこのように答えられます。「あなた方は私によって造られた土の器である。土の器が造る人に向かって、どうしてこんな風に造るのかなどと文句を言いますか。私は、天と地を創造した真の神である。世界に正義を実現させ、恵みを与えるのはこの私である。わたしは、世界の全てを支配し、創造する神である。」

僕たち私たちの住んでいるこの国は、まだまだ、イエスさまを信じている人は少ないです。とても悲しいことです。神さまが悲しんでおられます。だから、僕たち私たちは、お友だちを日曜学校に誘います。でも、皆の中でこのようなことを考えたりしたことのあるお友だちはいますか。「イエスさまが真の神

さまなら、もっと教会を強くしてくださらないかなあ。教会に力を与えて、日本の総理大臣もキリスト者となったり、学校の先生もキリスト者の先生になってくれるようにできないのかなあ。」先生も思います。もっともっと、イエスさまの教会が強い教会となって、つまり、イエスさまに従う信仰が強くなって、イエスさまに従う人も増えたら、なんて素晴らしいのだろうといつも思います。

でも、そこで間違えてはいけないことがあります。イエスさまを信じていない人でも、イエスさまがお立てになった人が一杯います。みんなのお父さんお母さんで教会に来ていないお友だちはたくさんいますね。でも、たとえイエスさまを信じていなくても神さまは、深い御計画をもって、僕たち私たちのお父さんお母さんとして与えてくださいました。みんなの学校の先生もそうでしょう。だから、神さまを信じている僕たち私たちは、喜んで尊敬するのです。

神さまは、イエスさまを信じている僕たち私たちを愛しておられ、祝福するためにどんなことでもできるのです。だから、安心して生きて行けます。そして、僕たち私たちこそ、真の神さまを信じているのですから、不信仰に負けないで、神さまの救いの御計画を実現するようにイエスさまを第一にして行きましょう。
(相馬伸郎)

〔今日の暗唱聖句〕 ローマの信徒への手紙 13章1節

人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。

〈ねらい〉

神様は、私たちのために、家族や先生、多くのお友だちを与えてくださっています。神さまから与えられている人間関係を大切にすることを覚えましょう。

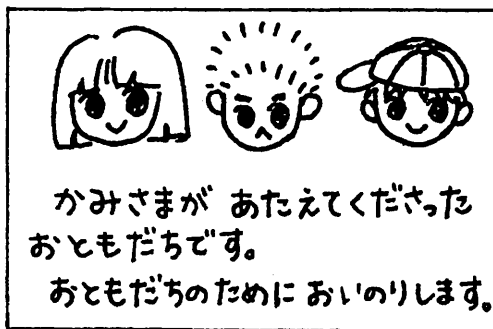
〈展開例〉

みんなにはお友だちは何人いるかな。みんなのお友だちは、○○ちゃんや△△くんのために神様が与えてくださったんだ。お友だち

ばかりじゃなくて、お父さんとかお母さん、みんなの兄弟姉妹も、神様が一人一人のために与えてくださったんだ。神様を信じている僕たち私たちのために、神様はみんなの周りに多くの人たちを与えてくださいました。自分の周りにいるお友だちを、神様からの大切なプレゼントなんだと思ってください。そのときに、周りにいる人たちにもイエス様のことが少しずつ伝えられていくんだよ。

〈お祈りしよう〉

- 私たちの周りの人たち、両親やお友だちの顔を紙に書きましょう。
- 紙の余白に、「神さまがわたし（ぼく）に与えてくださったお友だちです。お友だちのためにお祈りをします」と書きます。
- お祈りしたいことを尋ねて、祈禱課題を書き加えてもよいでしょう。
- 一緒にお祈りをしましょう。
- 時間に応じて、色塗りなどをしてください。



〈暗唱聖句〉

ローマの信徒への手紙 13章 1節

〈学びのポイント〉

1. 神様の約束は変わらない。
2. 神様はわたしたちの救いのためにすべてを用いられる。
3. 神様の約束による平安。

〈展開例〉

バビロンに捕らわれたイスラエルの人々は、長く苦しい生活をしていました。このイスラエルの嘆きを神様は聞きとめ、異邦人であるベルシャのキュロス王を用いて、再びエルサレムに帰還することを御許しになりました。

た。

バビロンからの旅は長い道のりです。神様に不平を言ったりする人たちも大勢いました。そんなイスラエルの人たちでも、神様は心にとめ、祈りを聞き届けてくださること、いつも一緒にいてくださり守ってくださること感謝し、すべてのものを御支配くださる神様を覚えましょう。

〈祈りましょう〉

神さまは、わたしがどこにいても、なんでも知ってくださり、ただしくみちびかれます。学校でも、家でも、神さまは、はたらかれます。安心して神さまを信じています。

〈聖書を開きましょう〉

イザヤ書 45章 1～13節

- この聖書の箇所の中には、「主」という言葉が何度も出てきます。さて、いったいいくつあるでしょうか。数えてみましょう。

(答え = 11コ)

〈やってみよう〉

王様の命令ゲーム

- ① グループの中から王様を一人決めます。
- ② その王様が命令を出します。

命令を出す時の約束は、命令の前に必ず「王様の命令です」という言葉をつけます。他の人は、その命令通りに行動します。でも、「王様の命令です」と言わずに出した命令には従ってはいけません。従った人は失格となります。だれが最後まで残るかな？

○具体例

王様 = 「王様の命令です。立ってください」

みんな = 立つ → OK です。

王様 = 「ありがとう。すわってください」

みんな = 立ったまま → このとき、すわった人は、失格となります。

命令を変えて、繰り返し遊びましょう。

〈ねらい〉

やがて新バビロニア帝国はペルシア帝国（キュロス二世）に滅ぼされ（BC539）、捕囚とされていたユダヤ人が解放された。聖書は、それが神様による救いと記す。イザヤ書40章からはイスラエルの回復の預言、救いの預言が記されている。世界の歴史を支配され、そのために異邦人の王をも用いられる神様のお働きを学ぶ。

〈展開例〉

1. 歴史の本も、新バビロニア王国やペルシア帝国の興亡、そしてユダヤ人の捕囚からの帰還をも記す。聖書の記していることは、それとどう違うのだろう。
→聖書は歴史を支配されるのが神様であることを記す。ペルシア帝国の王キュロスが、新バビロニア帝国を滅ぼしたのも、神様が彼を強くしたから。おそらくキュロスはそれを知らない。しかし、そのような彼を神様はお用いになり、神様のご計画を実現された。
2. 神様を知らないキュロス王をお用いになるのは変ではないか。
→ユダヤ人たちもそのように思った。しかし、イザヤはそのような考えの誤りを陶工と粘土の関係のたとえによって示した(45:9)。そのことは、今の時代にも、神様が力強い

世界の支配者であることを意味している。

3. イザヤ書 42:1-4 とマタイ 12:15-21 を読んでみよう。マタイはイザヤ書を引用して何を示そうとしているのだろうか。
→イザヤの預言は直接にはキュロス王による捕囚の民の解放を指している。しかし、マタイは、その預言がさらに後の時代に、世にこられたイエス様をも指し示していることを示そうとしている。
4. 「傷ついた葦を折らない」、「くすぶった灯心を消さない」とはどういうことだろう。
→傷ついた葦はすぐに折れる。ランプの明かりも灯心がくすぶりだしたらすぐに消えてしまう。それは、傷ついた人間（心も、体も）を指している。そのような、人間（私たち）をいたわり、憐れみ、救ってくださるイエス様。マタイは、そのことを、イザヤの預言に見ている。
5. 神様はユダヤの人たちをなぜ救おうとお考えになったのだろうか。43:10-12、43:25 を読んで話し合ってみよう。
→人間の義しさや信仰のために救われたのではない。「わたし自身のため」。それは、人々が神様の憐れみを知り、喜んで、神様の救いの恵みの証人としての働きをするようになるためではないだろうか。

ねらい

- 信仰者でない人物が用いられて、神の歴史が進展する事例があることを学ぶ。
- 神が歴史の支配者であることを覚えよう。

展開例

- 「わたしはあなたに力を与えたが、あなたは知らなかった」(イザヤ 45:5)。私たちの知らないうちに神に用いられることがあることを学ぼう。
- 主なる神は異邦人の主でもあられる。異邦人も用いられて、神の歴史が紡ぎ出されることを学ぼう。また、神は、悪をも用いて、

善を行い、ご自身のご計画を成し遂げることもなさるお方である。

話し合ってみよう!

- キュロス王のように、神を信じていなくても神に用いられた事例をいくつか挙げて話し合ってみよう。

祈り

神のご支配の不思議さに驚き、神に従う心をお与えください。

○暗唱聖句○

ローマ 13:1

○祈りの課題○

聖書日課

日	イザヤ書	44章 9 ~ 17 節
月	イザヤ書	44章 18 ~ 20 節
火	イザヤ書	44章 21 ~ 23 節
水	イザヤ書	44章 24 ~ 28 節
木	イザヤ書	45章 1 ~ 8 節
金	イザヤ書	45章 9 ~ 10 節
土	イザヤ書	45章 11 ~ 13 節

☆三日記☆

テキスト ネヘミヤ記 8章1～12節

〈靈的再建〉

捕囚の地バビロンから祖国イスラエルに帰還した人々は、ネヘミヤを指導者として、廃墟となっていた都エルサレムの城壁を再建する仕事にとりかかり、数々の困難を克服してこれをやりとげます。

12章27節以下には、完成した城壁の奉獻式の様子が記されていますが、城壁再建の感謝と奉獻を行う前に必要な準備がありました。それは靈的な準備です。

8章には、バビロンからエルサレムに帰ってきた人々が主の日にささげた礼拝のまようが描かれます。神の都を築くことは彼らにとってまさに信仰のわざであり、従って城壁の再建は、そのまま礼拝共同体の再建をも意味したのです。

民はみな神を礼拝するために広場に集まり、「一人の人のようにな」(1)りました。そして立ち上がり、讚美し、祈り、ひざまずき、顔を地に伏せて礼拝しました(6)。

書記官であり祭司であったエズラは、おそらく帰還のさいにたずさえてきた「モーセの律法の書」(1)を朗読し、神のみ心を説き明かしました。朗読は夜明けから正午にまで及び、聞いて理解することのできる者はみな立ち上がって耳を傾けました(3)。

〈主を喜ぶことこそあなたがたの力である〉

神のみ言葉の朗読とその説き明かしを聞くと、民は皆泣いていたと記されています(9)。おそらく彼らは、神のみ言葉に自分たちの罪を鋭く刺され、深い嘆きにおそわれたものと思われる。バビロン捕囚は神の選びの民イ

スラエルの背きの罪を打つために、神が敵国の王を用いて遂行された審判でした。律法の朗読を聞きながら、民はあらためてそのことを深く覚えさせられたのです。

しかし、ネヘミヤとエズラ、そしてみ言葉の説き明かしに当たったレビ人たちは民全員に言います。今日は主にささげられた聖なる日であるから、嘆いたり泣いたりしてはならない(9)。民は神に背いたかつての罪を嘆くところにとどまっていたはならなかったのです。捕囚からの帰還が、神の赦しの恵みであることを覚えるべきであったのです。そして神の都の再建とともに、神が彼らの新しい歩みのために彼らの魂と神礼拝とを再建してくださる恵みを覚えて、神に感謝し神を喜ぶべきであったのです。

彼らは、さらに民に言います。「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」(10)。

神はひとり子の十字架と復活のみわざによって私たちの罪を赦し、私たちの死を永遠の命にかえてくださいました。主の日はひとり子イエス・キリストの復活を記念し、神をほめたたえる日です。イエス・キリストがよみがえりたもうたゆえに、いっさいの悲しみや嘆きはすでに後ろに投げ捨てられています。

主の日の礼拝につらなり、神が与えてくださった救いの恵みを喜び祝うことこそ、私たちの生きる力の源なのです。

(木下裕也)

テキスト ネヘミヤ記 8章1～12節

【単元のねらい】

礼拝は神の民が神と出会い、神と交わり、神がなしてくださった救いのみわざを喜ぶ祝宴である。私たちがこの地上を生き抜く力は礼拝によってこそ与えられる。そのことを今一度深く確かめておきたい。

「礼拝の再建」

神さまの民イスラエルは、バビロンという国によって滅ぼされ、民たちは捕虜となってバビロンに連れていかれ、神の都エルサレムは廃墟となってしまいました。自分の国が減びてしまうということを皆さんは想像できるでしょうか。このことはイスラエルの歴史のなかで、もっとも悲しく、苦しい出来事となったのです。

でも、ほんとうはイスラエルを滅ぼされたのは神さまご自身だったのです。バビロンの国は、そのために神さまに用いらただけです。

神さまがイスラエルを滅ぼされたのは、イスラエルが神さまの民であったにもかかわらず、王も民もこぞって神さまに背き、神さまから離れ、いつわりの神にひれ伏し、さまざまな罪をおかしたからです。神さまは義なるお方ですから、たとえご自身の愛する民だからといっても、その罪をそのまま見過ごすことはおできになりません。愛する子どもを、お父さんが自分の手も痛めて打つように、神さまはご自分のみ手によってイスラエルをこらしめられたのです。

けれども、こらしめの時が満ちたとき、神さまはただ恵みとあわれみによって、イスラエルをおゆるしになりました。民はもういち

ど祖國にかえってくることができました。そしてふたたび国をたてなおすことになったのです。

ゆるされてかえってきた人々は、ネヘミヤという人を指導者として、神の都エルサレムの城壁を再建する仕事を、さまざまな困難のりこえてやりとげました。そして、完成した城壁を神さまにささげました。けれども城壁を再建することにまさってたいせつなことがありました。それは、イスラエルの人々の信仰をもういちどたてなおすことです。そして、とだえていた主の日の礼拝をもういちど再開することです。

民たちは神さまを礼拝するために、主の日に広場に集まってきました。男も女も、老人も子どもたちも、おおぜいの人々が集まりましたが、みな神さまのみ言葉を求める思いはおなじでした。ですから、ひとりの人のように心をあわせたのです。

人々は立ち上がり、讚美し、ひざまずき、祈りました。

そして神さまのみ言葉が朗読され、説教されました。そのときそこにいた人々はみな泣いていました。み言葉を聞くことによってこれまで自分たちがいかに神さまを悲しませて

きたのか、神さまに対して、また隣り人に対して、いかに多くの罪をおかしてきたのかがよくわかったからです。そして、国を失う悲しみが、神さまのこらしめの鞭であったのだということがよくわかったからです。神さまのみ言葉に、人々はみな鋭く心をさされたのです。

けれどもそのとき、み言葉をときあかしていたエズラさんとネヘミヤさんは、人々に言いました。今日は主の日、神さまを礼拝する日なのだから、あなたたちは泣いてはなりません。自分の罪を悲しんでいてはなりません。神さまはあなたたちをゆるして、もういちど祖国にかえらせてくださったではありませんか。神さまはあなたたちをあわれんで、もういちど神さまを礼拝する民としてくださったではありませんか。そのことを喜びなさい。神さまの恵みとあわれみを喜ぶことこそが、あなたたちの生きる力のみなもとはありませんか。

神さまは私たち人間のどのような罪をもゆる

すことのおできになるお方です。神さまの愛と恵みの力は、人間の罪の力をはるかにこえて強いのです。神さまを礼拝するときに、私たちはそのことを確かめるのです。それゆえに礼拝は神さまを喜ぶときです。

主の日はイエスさまの十字架とよみがえりを記念する日です。イエスさまが私たちのかわりに十字架に死なれましたから、私たちのすべての罪はゆるされました。イエスさまが永遠の命によみがえられましたから、いつさいの悲しみや嘆きはもはや後ろに投げ捨てられています。この神さまの大きな恵みを喜ぶことこそ、私たちの命をささえる力なのです。

この力にあずかる場所こそが主の日の礼拝です。礼拝こそ私たちにとってもっともたいせつな場所です。だからこそイスラエルの人々は、まず礼拝を再建したのです。私たちの人生のもといを礼拝に、すなわち神さまを喜ぶわざにしっかりとすえましょう。

(木下裕也)

〔今日の暗唱聖句〕 ネヘミヤ記 8章 10節後半

主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。

〈ねらい〉

礼拝の意味と一緒に考え、喜びの時としての礼拝をささげるよう招きましょう。

〈展開例〉

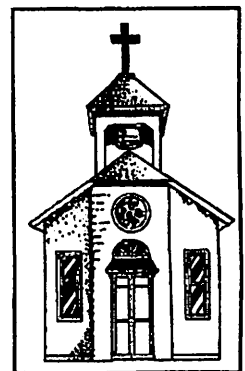
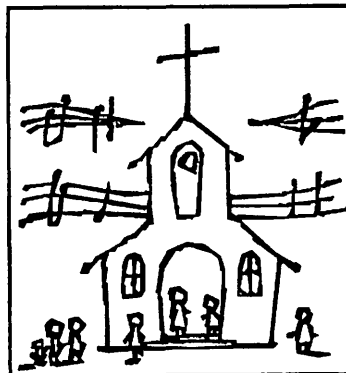
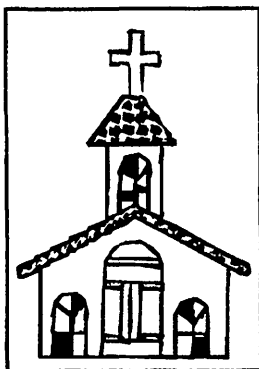
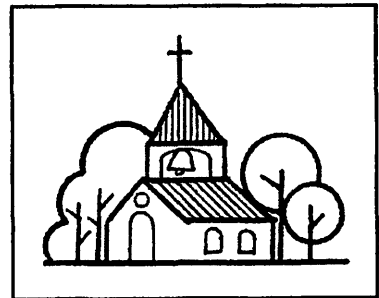
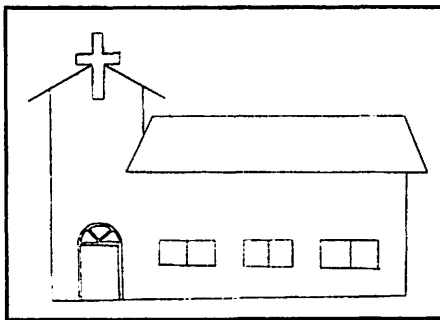
みんなは毎週日曜学校に来て、礼拝をしています。礼拝は何で毎週するのかな？ それはイエス様が十字架に架かって私たちのために死んでくださり、三日目の朝（日曜日の朝）によみがえられたことを覚えるためです。そ

して、イエス様がよみがえられたことを喜ぶためです。日曜日の礼拝を喜ぶことができるのは、イエス様が復活なされたことで、私たちは罪から救われたからなのです。イエス様の復活を記念する日、罪から救われたことを喜ぶこの時、私たちは悲しんでいたり嘆いていたりできないのです。礼拝は喜びの時なのです。

〈やってみよう〉

パズルをつくらう！

- 画用紙を子どもたちに渡して、自由に教会の絵を描いてもらいましょう。
- イラスト集などの教会の絵を拡大コピーして用いてもよいでしょう。
- その教会の絵を、タテやヨコ、ナナメに自由に切り、混ぜます。
- お友だちと交換して、教会を組み立てて遊びます。



〈暗唱聖句〉

ネヘミヤ記8章10節後半

ならなかったのか、今まで犯した数々の罪をもう一度思い起こし、悔い改めました。

〈学びのポイント〉

1. 城壁の完成。
2. 霊的礼拝の回復。
3. 神礼拝は、わたしたちの力の源。

立派な建物や教会がなければ礼拝ができないのではなく、神様の正しさや、恵み深さ、憐れみを心にとめ、まことの神様を喜びをもって礼拝することがどれほどわたしたちの力となっているか、毎週の聖日に確かめましょう。

〈展開例〉

バビロンから帰還した人々はさっそくエルサレムの城壁を再建する仕事にとりかかりました。多くの困難をのりこえて、やっと完成することができました。

どうして長く苦しい捕囚生活をしなければ

〈祈りましょう〉

わたしたちに、日曜日をくださったことをかんしゃします。聖書をよみ、礼拝でまなび、さんびかをうたうことは、わたしのよろこびです。つらいこともわすれて、礼拝します。

〈聖書を開きましょう〉

ネヘミヤ記8章10節後半

「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」

○しおりの大きさの画用紙やカードを用意して、聖句を書き写しましょう。

書いたものをしおりや飾りとして用いましょう。

〈やってみよう〉

○問題を作り、互いに出し合ってみましょう。

問題の例

- ① 聖なる日は、何をする日でしょうか。
(何もしないでじっとしている・友だちと遊ぶ・神さまを礼拝する)
- ② 私たちの力の源は何でしょうか。
(主を喜び祝うこと・食べたり飲んだりすること・寝ること)

〈ねらい〉

新バビロニア帝国は滅ぼされ、ユダヤの捕囚の民は解放された（歴代下 36:22-23、BC538）。ただし、捕囚の民のすべてがただちに帰還したわけではなかった。ユダヤに戻った人々は、苦勞のあげく神殿を再建した。しかし、荒廢した町はさらに様々な復興の手立てを必要としていた。ペルシア王に仕える高官となっていたネヘミヤは、エルサレムに帰還し（BC445）、城壁の再建、および人々の生活と礼拝の改革を進めた。

〈展開例〉

1. ネヘミヤ 1:5-7 は、ペルシアの都市スサにいたネヘミヤのもとにエルサレムの惨状が伝えられ、そのことを悲しんでネヘミヤが祈った祈り。その中で罪のことが祈られている。どのような罪についてだろう。

→捕囚の原因となったイスラエル（南、北両王国）の罪。さらには、エルサレムに帰還した人々の生活における罪（伝え聞いたのだろう）や、自分自身の罪をも思つてのことだろう。神様に祈るとき、罪を悔い、罪の赦しを祈ることが大切。

2. 8章は城壁の修復が終了しその奉獻式（12章）が行われるまでの記事。そこで、モーセの律法が読まれたことにはどのような意味があるのだろう。

→神の民として整えることの大切さ。それは、

単に安全な町に住むだけではない。イスラエルの人々の信仰と、その信仰に基づく生活を整える必要があった。

3. 人々は律法のことばを聞いて泣いた。どうしてだろう。また、ネヤミヤと祭司エズラは、どうして「嘆いたり、泣いたりしてはならない」と言ったのだろう。

→人々が泣いたのは、律法のことばを聞き、自分たちの罪の大きさに気づいたのだろう。礼拝においても、み言葉によって罪が厳しく指摘される。しかし、礼拝は決して絶望で終わるものではない。必ず赦しの宣言と、救いの喜びが与えられる。

4. 8:9-12 にでている二つの「喜び」という言葉を探してみよう。それなに違いがあるだろうか。私たちが経験する礼拝の喜びについて、話し合ってみよう。

→10節は、礼拝における喜びと理解される。12節、食べたり飲んだりすることを通しての喜び。それらは、結びついているもので、そのことは使徒言行録 2:42 の初代教会の人々の生活にも見られる。キリスト者に与えられる喜びは、言葉だけのものでも、満腹するだけのものでもない。礼拝の喜びが、生活の中に現れる。「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」（8:10）。

ねらい

- 礼拝における喜びは、悔い改めの悲しみから生まれてくるものであることを理解する。

展開例

- ネヘミヤ記 8:1-12 を読み、律法の御言葉を聞いて泣いた民が、礼拝において主を喜び祝う者とされたことに注目しよう。悔い改めの涙は、罪赦された喜びを生み出す。
- 真の礼拝は主を喜び祝うことであり、そこに私たちの力の源泉がある。

話し合ってみよう!

- 「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」という御言葉について話し合おう。
- ウェストミンスター小教理問答問 1、「人生のおもな目的」との関係について、話し合おう。

祈り

神を礼拝し神を喜ぶ心をお与えください。

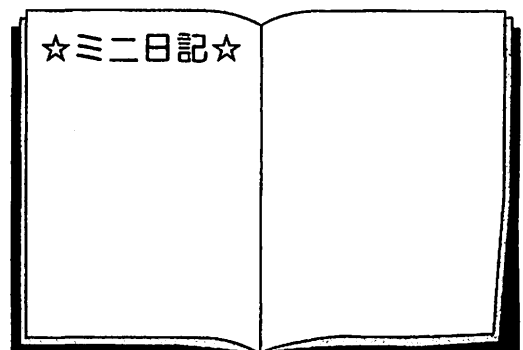
○暗唱聖句○

ネヘミヤ 8:10b

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 ネヘミヤ記 8章 1 ~ 12 節
- 月 ネヘミヤ記 9章 5 ~ 8 節
- 火 ネヘミヤ記 9章 9 ~ 15 節
- 水 ネヘミヤ記 9章 16 ~ 21 節
- 木 ネヘミヤ記 9章 22 ~ 24 節
- 金 ネヘミヤ記 9章 25 ~ 31 節
- 土 ネヘミヤ記 9章 32 ~ 37 節



テキスト エレミヤ書 31章 31 ~ 34節

旧約聖書の中で、「新しい契約」という言葉はここだけに記されている。主イエスは、最後の晩餐において、杯を、あなたがたのために立てられる「新しい契約」とおっしゃった。教会は、これまでの聖書を旧約聖書と呼び、自分たちに与えられた新しい啓示の言葉を新約聖書と呼んだ。つまり、古い契約は、契約の成就者イエス・キリストにおいて完成されたと告げるのである。キリストを信じて、結ばれる者は罪赦され、義とされ、心に律法を書き記されて、律法を喜ぶ者とされるのである。

ただし、誤解してはならないことがある。古い契約は、「祭儀」としてはもはや必要ないが、掟としては新しい契約の時代においてもなんら古びていない。我々は礼拝式で喜びと感謝をもって十戒を唱え、神に賛美をささげている。また、決して、個人的な神関係がここから始まるというようなことでもないのである。神が主権的にイスラエルの民に律法を与え、それによって彼らを神の民として形成される、この律法の目的に変更はない。

それなら、ここでの新しさ、その違いとは何であろうか。それは、古い契約は石の板に記され、民の前に置かれたのに対し、新しい契約は、心に記され、民の（胸の）中に置かれたことにある。

本来、神は、御自身の契約を徹底的に破り続けた民を、御自身の正義の怒りによって、王国を崩壊させ、それっきり歴史から消去されて良いはずであろう。民は自分達に下された、神の怒りと審きを甘んじて受け入れる以外にないはずである。ところが、エレミヤ

は驚くべき預言を語る。神が「とこしえの愛をもってあなたを愛し、変わることなく慈しみを注ぐ」(3)というのである。契約の神、つまり慈しみ（ヘセド=契約の愛）の神(3)が、不変の神でありたもう故に、神の民の救いは成り立つのである。このイスラエルにとっての未曾有の危機の折に、「悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない」とおっしゃった故に、罪の赦しの恵みが際立つ。

エレミヤの預言活動の厳しさは、民の心のかたくなさを指摘し、悔い改めを迫ったことであつた。エレミヤほど、律法を外側から強制され、その恵みを説き聞かされたとしても、律法が心にまで入り、心を動かすことなしには、これに生きることはできないことを知らされていた預言者も少ない。しかし、やがて律法が心に書き記されるときが来るのである。

予らには、この預言は、主イエス・キリストの来臨によってその成就が始まったこと、私どもの心に律法を喜ぶ「新しい心」（エゼキエル書 36:26 他）が与えられていること、しかしなお、「主を知れ」と言って教えなければならぬし、この「新しさ」に留まるためには、信仰の戦いを避けられないことを告げたい。同時に、契約の神は、必ず、「新しい契約」を完成してくださるので、明るく待ち望みつつ生きることができるとを悟らせたい。その証拠として、「キリストの御業」（『子どもカテキズム』問 24）と「聖霊の御業」（『子どもカテキズム』問 65、教会に生きる新しい生）にあずかる私どもの幸いを豊かに味わいたい。（相馬伸郎）

テキスト エレミヤ書 31章 31～34節

【単元のわらい】

これまでの旧約時代における救済史を視野に置きながら、新しい契約が実現されたことのすばらしさと、ご自身の民とのあいだに結ばれた契約を貫き通される神の恵みを覚えたい。

「新しい契約」

神さまは旧約聖書の時代には、神さまの救いの恵みを世界にむかってあかしするために、とくにひとつの民をお選びになりました。それがイスラエルの民です。神さまはイスラエルをほかのどの民よりも愛され、さまざまな恵みを注いでこられました。

しかしイスラエルはその神さまの愛と恵みにこたえるどころか、神さまにそむいて罪をおかしました。それで、神さまはイスラエルを滅ぼされました。正義の神さまは、たとえ愛するイスラエルといえども、その罪を見のがすことはなさいません。神さまはご自分のみ手を痛めつつ、あえてイスラエルを打たれたのです。

けれども神さまは、さばきの時が満ちると、イスラエルをゆるして、またご自分の民としてくださったのです。ちりぢりになって迷い、傷つき、倒れていた羊たちを世話する羊飼いのように、神さまはもうあなたがたの罪は思い出さないことにするとおおせになって、ふたたびイスラエルをご自分のふところに集めてくださったのです。神さまの愛はかぎりなく深いのです。

そして、神さまはエレミヤという預言者の口をおして、すばらしい約束を語ってくださったのです。今朝はその約束について学ぶことにしましょう。

神さまは約束なさいました。

「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(33節)。

旧約聖書の時代にも、神さまはご自身がお選びになったイスラエルの民に、ご自分のみ言葉を与えてくださいました。神さまが荒野を旅していたイスラエルに、モーセさんをおしてシナイ山で、十のみ言葉をさずけてくださったことを思い出してください。

でも、そのときには神さまのみ言葉は、二枚の石の板に刻まれていました。モーセさんはその石の板を受け取ったのです。つまり、そのときには神さまのみ言葉は、まだ私たちの心の外にあったことができます。

でも、エレミヤさんをおして神さまはおおせになりました。わたしは約束する。その日が来たら、わたしはわたしの言葉を、あなたがたの心のなかに、わたし自身の手で刻みつける。

これはすばらしい約束ではないでしょうか。なぜなら、神さまのみ言葉が私たちの心の外にある間は、まだ神さまのみ言葉は私たちから遠いですね。また、いくら神さまのみ言葉が与えられていても、私たちの罪の心そのものが変えられなければ、私たちはそれを

守ることはできません。

けれども神さまは、私たちの心にみ言葉を刻みつけると約束してくださったのです。そのとき、私たちの心そのものが変えられるのです。私たちは罪ゆるされて、罪のためにかたい石ようになっていた心がやわらかくされます。そのように神さまの恵みによって私たちの心そのものが新しくつくりかえられるとき、はじめて私たちはほんとうに神さまを知り、神さまと交わることができるのです。

エレミヤさんが語ったこの約束は、いつ実現したのでしょうか。

それは、イエスさまがこの世においでになったときです。イエスさまは私たちの身代わりに十字架に死なれ、私たちの罪をすべてゆるし、それによって神さまは私たちと仲直りをしてくださいました。イエスさまは私たちの罪の心を、やわらかな従順な心につくりかえてくださいました。

そしてペンテコステの日に、約束どおりイ

エスさまのみ霊がおくだりになりました。そのとき、あの約束はほんとうに実現したのです。私たちの心にみ言葉が記されるとは、聖霊なる神さまが私たちの心に住んでくださって、私たちといつまでもともにいてくださるということだったのです。

「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる」(31節)。

皆さんは旧約聖書、新約聖書というときの「約」とはどういう意味か知っていますか。「契約」という意味です。「契約」とは神さまとの恵みの交わりのことです。エレミヤさんは「旧約」の時代の人でしたが、やがて実現する「新しい契約」のすばらしさについてあらあじめ語ったのです。その新しい契約はイエスさまによって実現しました。神さまのみ言葉は、すでに私たちの心に記されているのです。(木下裕也)

〔今日の暗唱聖句〕 エレミヤ書 31章 33節後半

わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。

わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

〈ねらい〉

旧約から新約へのつながりをつけてあげましょう。

〈展開例〉

旧約とは神様との古い契約（約束）という意味です。旧約聖書の中には、神様がイスラエルの民を愛して選んでくださったとあります。神様はイスラエルをとっても愛して、救いの恵みに入れてくださいました。

イスラエルの人たちは神様が喜ばれる生き方ができたでしょうか？ いや、神様の言うことを聞きませんでした。そのため、神様はお怒りになって、イスラエルの国を滅ぼされたのです。

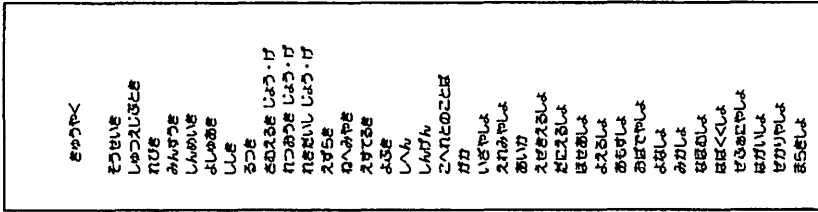
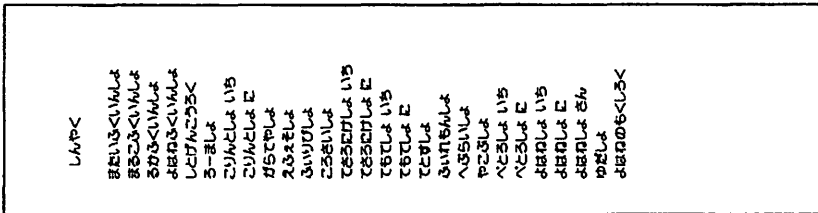
でも、神様のお約束はそれで終わってしまったわけではありません。神様は約束をお忘れになることなく、新しい約束をお与えくださいました。その約束は、救い主イエス様を与えてくださるといふ約束でした。旧約の約束を神様はずっと変わることなく守ってください、新しい救いの約束を私たちにお与えくださいました。それが、主イエスさまであり、新しい約束、新約なのです。

そう、旧約と新約は一つの神様の約束です。私たちを救ってくださる神様の愛の約束が書かれているんです。そのことを覚えて旧約も新約も大切に、聖書を読もうね。

〈やってみよう〉

聖書のしおりをつくろう！

- ①しおりの大きさの画用紙を用意します。
- ②聖書全巻の名前を書いた紙を適当な大きさにコピーして、画用紙にはります。
- ③穴開けパンチで穴を開けて、リボンをむすびます。



※ 104 ページに拡大したものを掲載しています

〈さんびしよう〉

聖書の名前をうたって覚えましょう。
いのちのことば社・日本児童福音伝道協会、『ふくいん子どもさんびか』、19番

〈暗唱聖句〉

エレミヤ書 31章 33節後半

〈学びのポイント〉

1. 神様はわたしたちと契約を結ばれる。
2. 新しい契約は心に記される。
3. キリストによる契約の成就。

〈展開例〉

神様がわたしたちに与えてくださる契約とは、神様の側の一方的な行為によって与えられる救いの約束です。わたしたちがどれほど神様にそむき、神様を悲しませることがあっても、わたしたちの悪を許し、再び彼らの罪を心に留めることはないという素晴らしいも

のです。

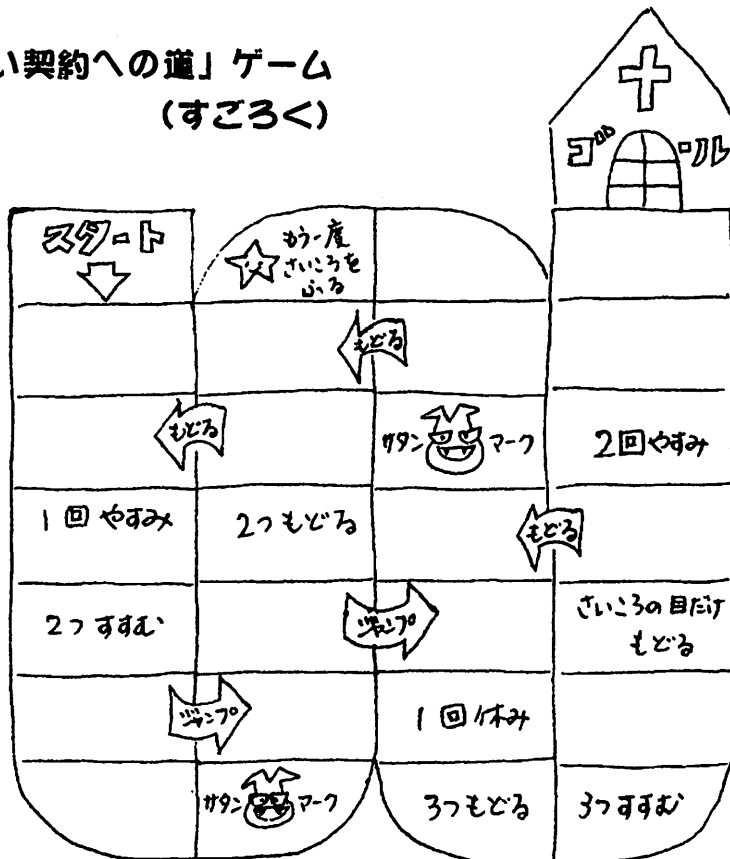
この契約は、イエス様をこの世界の送ってください、イエス様が十字架につけられ、三日目に復活されたことによって実現しました。そして、いま、聖霊によってわたしたちの心に、イエス様が救い主であることを教えてください。

〈祈りましょう〉

神さまは、どんなときも、やくそくをやぶりません。わたしの失敗を、なんどもゆるしてくださいました。いま、わたしのところに、イエスさまがおられます。ありがとう。

〈やってみよう〉

「新しい契約への道」ゲーム
(すころく)



サタンマークがでたら スタートにもどる

〈ねらい〉

エレミヤは、神様に背くユダの国が神様の裁きを受け、国の滅びを経験することを預言した。しかし、滅びの預言とともに、復興の預言も行った。それは、単にユダの復興だけではなく、神の民イスラエルの復興としての終末的祝福を指し示している。

〈展開例〉

1. エルサレムが新バビロニア帝国に滅ぼさ

れたとき、神殿も破壊され、宝も持ち去られた。神殿の中心である神の箱(契約の箱)も略奪されたのだろう。神の箱を納めた神殿を中心とした宗教生活によって、神様のとの関係を保ってきたイスラエルに望みはあるのか。

→神の箱は神様のご臨在を示すものとして大切だった。しかし、エレミヤは終末的祝福を伝える。そこでは、神様ご自身がご自分の民の中にもいてくださる。そのとき、「神の箱は」不要になり、神の民そのものが神様が住まれる神殿になっている(参考 3:16-18)。それは、インマヌエルのイエス様が世に来てくださった新約の世界にはっきりと実現する。

2. 「新しい契約」(31:31)があるなら、「古い契約」もあるはず。それは何だろう。それと比べて、「新しい契約」はどのような違いがあるのだろう。

→「古い契約」は「エジプトの地から結んだもの」とあるように、十戒を中心とした戒めと、そこで明らかにされた神様とイスラエルの関係のこと。「新しい契約」の特徴は、33, 34節からは、「心に記される」、そ

うすると、「兄弟どうし『主を知れ』と言って教える必要がない」、神様は「彼らの罪を心に留められない」、など。それらは新約時代になって、イエス様が世にこられ、律法を完成されたことによって、明らかにされた。

3. 新しい契約つまり新約時代の今の時代の礼拝の特徴は何だろう。

→今は、神の箱だけでなく、神殿もない。世界の各地の教会で、「知っているものとして」神様が礼拝されている(ヨハネ 3:21-22)。それは聖霊がくだり(使徒2章)、聖霊のご臨在とともにイエス様ご自身が一緒にいらしてくださる礼拝(マタイ 28:20)。

4. 旧約時代は新約時代よりも劣った時代ということになるのか。

→キリストの救いがどれだけはっきりと示されているかという点では、そう言えるかもしれない。しかし、旧約の時代なしには新約の時代はあり得ないし、旧約聖書もイエス様による救いを示している。エレミヤ 31:31はその代表的箇所。新約聖書は、旧約聖書としっかりとつながり、その二つで聖書が成り立っている。

5. 「新しい契約」に関係することばを、イエス様が使われたことを知っているか。

→最後の晩餐における、イエス様の聖餐の制定の御言葉(「わたしの血によって立てられる新しい契約」、コリント一 11:25)。それは、教会では、聖餐式のたびに語られてきた。

ねらい

- 神が聖霊において私たちの心の内に住み、私たちにおいて神のみわざが行われる時代が来ていることを学ぼう。

展開例

- 「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。・・・」(エレミヤ 31:33b)。この約束がペンテコステ(聖霊降臨)において成就していることを学ぼう。
- 「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。・・・わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前

たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える・・・」(エゼキエル 36:25-27)

話し合ってみよう!

- 神は、人間を神のかたちに造り、人間に神の言葉を与え、律法を与え、それを心に刻みつけ、聖霊をお与えくださった。こうして、神は私たちを神に応答する者としておられる。神に応答する恵みと祝福について話し合ってみよう。

祈り

私たちの心に神の言葉を書き記し、聖霊をお与えください。

○暗唱聖句○

エレミヤ 31:33b

○祈りの課題○

聖書日課

日	エレミヤ書	31章 1～6節
月	エレミヤ書	31章 7～9節
火	エレミヤ書	31章 10～17節
水	エレミヤ書	31章 18～20節
木	エレミヤ書	31章 21～26節
金	エレミヤ書	31章 27～34節
土	エレミヤ書	31章 35～40節

☆三日記☆

《9月28日分 幼稚科教材》

きゅうやく

そうせいき
しゅつえいじぶとき
れびき
みんすうき
しんめいき
よしゆあき
ししき
るつき
さむえるき じょう・げ
れつおうき じょう・げ
れきだいし じょう・げ
えずらき
ねへみやき
えすてるき
よぶき
しへん
しんげん
こへれとのことば
がが
いざやしよ
えれみやしよ
あいか
えせきえるしよ
だにえるしよ
ほせあしよ
よえるしよ
あもすしよ
おばでやしよ
よなしよ
みかしよ
なほむしよ
はばくくしよ
ぜふあにやしよ
はがいしよ
ぜかりやしよ
まらぎしよ

しんやく

またいふくいんしよ
まるこふくいんしよ
るかふくいんしよ
よはねふくいんしよ
しとげんこうろく
ろーましよ
こりんとしよ いち
こりんとしよ に
がらてやしよ
えふえそしよ
ふいりびしよ
ころさいしよ
てさろにけしよ いち
てさろにけしよ に
てもてしよ いち
てもてしよ に
てとすしよ
ふいれもんしよ
へぶらいしよ
やこぶしよ
べとろしよ いち
べとろしよ に
よはねしよ いち
よはねしよ に
よはねしよ さん
ゆだしよ
よはねのもくしろく

日曜学校 2003年度カリキュラム (2003年10～12月分)

—救済史に基づく一年間のカリキュラム—

月 日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
10月5日	洗礼者ヨハネ・神の小羊	ヨハネ福音書 1:19-34	ヨハネ 1:29
	小羊キリストの贖いによってキリストの証人とされた光栄と使命を学び、招く		
10月12日	カナでの婚礼	ヨハネ福音書 2:1-12	ヨハネ 1:14ab
	主イエスを信仰によって迎えて、主が共にいてくださる幸いと確かさへと招く		
10月19日	ニコデモとの対話	ヨハネ福音書 3:1-16	ヨハネ 3:16
	救いは恵みである。主イエスと結ばれて新しい人とされる喜びへと招く		
10月26日	サマリアの女との対話	ヨハネ福音書 4:1-26	ヨハネ 4:24
	真の礼拝をささげて、人生の目的を満たすことへと招く		
11月2日	ベトサダの池でのいやし	ヨハネ福音書 5:1-18	ヨハネ 5:17
	悩みを知り、近づき解決してくださる主イエスを知り、摂理の信仰へと招く		
11月9日	5000人の給食	ヨハネ福音書 6:1-15	主の祈り・第四祈願
	日々の必要を主イエスに求めさせる。信仰が生活そのものとなるよう招く		
11月16日	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ福音書 9:1-12	ヨハネ 9:3
	主イエスの力を知り、主と共に働き、主のみわざを担うことへと招く		
11月23日	父に至る道	ヨハネ福音書 14:1-7	ヨハネ 14:6
	キリストこそ救いの頂点、救いの唯一の道であることを学び、伝道へと励ます		
11月30日	待降節・マリアへの予告	ルカ福音書 1:26-38	ルカ 1:28
	主が共にいてくださる恵みを喜ぶことへと招く		
12月7日	待降節・マリアの賛歌	ルカ福音書 1:39-55	ルカ 1:47
	自らを小さくして、主なる神をほめたたえることへと招く		
12月14日	待降節・ヨハネの誕生	ルカ福音書 1:57-66	ルカ 1:63-64
	神を信頼して待ち望み、希望のうちに忍耐し、祈り続けることへと招く		
12月21日	降誕祭	ルカ福音書 2:1-20	ルカ 2:11
	主イエスを受け入れて、主イエスのお誕生を心から喜び祝おう		
12月28日	一年の感謝	詩編 121編	詩編 121:1-2
	この一年の歩みを感謝し、新しい一年を待ち望み、神に信頼することへと招く		

日曜学校 2003年度カリキュラム (2004年1～3月分)

—救済史に基づく一年間のカリキュラム—

月日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
1月4日	聖霊の降臨	使徒言行録 2:1-13	
1月11日	ペトロの説教	使徒言行録 2:14-42	
1月18日	足の不自由な人のいやし	使徒言行録 3:1-10	
1月25日	ペトロの神殿での説教	使徒言行録 3:11-26	
2月1日	ステファノの殉教	使徒言行録 7:54-8:1	
2月8日	宦官の救い	使徒言行録 8:26-40	
2月15日	サウロの回心	使徒言行録 9:1-19	
2月22日	第一次伝道旅行	使徒言行録 13:1-12	
2月29日	マケドニアの幻	使徒言行録 16:6-15	
3月7日	エフェソでの告別説教	使徒言行録 20:17-38	
3月14日	ローマへの旅	使徒言行録 27章	
3月21日	ローマにて	使徒言行録 28章	
3月28日	受難節		

あ と が き

中部中会教育委員会日曜学校教案誌編集部

主の御名をほめたたえます。

ここに、『日曜学校教案誌』第10号を皆様のお手元にお届けすることができますことを嬉しく思い、主なる神様を心から讃美し、ご支援くださっております諸教会の皆様に、心からの感謝を申し上げます。多くの日曜学校教師の方々、教会の兄弟姉妹方、牧師諸先生方に励まされて、執筆・編集に取り組むことが許されています。すでに執筆陣は、中部中会の枠を超えて、他中会の諸先生方と日曜学校教師会にも広がっています。新たに名乗りを上げてくださる方々も与えられています。多くの方々にこの営みに携わっていただきたいと願っています。

日曜学校の衰退が叫ばれる中、カリキュラムや教案誌のことよりも、子どもを集める方法をまず考えるべきだという議論もあります。しかし、私たちは、日曜学校を神礼拝の営みとして整えることこそが、日曜学校の営みが祝福される筋道であり、また急務であると考えています。

この教案誌が、中部中会のみならず、日本キリスト改革派教会全体の日曜学校の営みの益となることを、心から祈り願っています。さらには、改革派教会の枠を超えて、日本の改革・長老主義に立つ諸教会の日曜学校の営みにも、ささやかながらも貢献できればと思います。

皆様の教会の日曜学校の働きが祝福され、多くの子どもたちに福音の喜びが宣べ伝えられますように。この教案誌がそのために豊かに用いられ、日曜学校の教師がたの助けとなることを心から祈り願っております。また、ぜひ今後も教案誌の発行を支えてくださり、編集部のためにもお祈りくださいますよう、心からお願ひ申し上げます。

なお、印刷・製本には慎重を期しておりますが、乱丁・落丁の場合は、お取り替えいたしますので、ご連絡ください。

Soli Deo Gloria!

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

聖書研究・説教展開例

木下裕也 豊明教会牧師
相馬伸郎 名古屋岩の上传道所宣教教師
春名義行 津島伝道所宣教教師
三川栄二 稲毛海岸教会牧師
望月信 高蔵寺教会牧師

分級展開例

幼稚科 津島伝道所日曜学校
小学科下級 多治見教会日曜学校
小学科上級 神港教会聖書学校
中学科 吉岡良昌(東部中会)
表紙イラスト・弓矢容子

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎(長) 名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也 豊明教会牧師
春名義行 津島伝道所宣教教師
望月信 高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『日曜学校教案誌』

2003年7・8・9月号(季刊)

第10号

2003年6月8日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会

発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部

名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

頒布取り次ぎ 津島伝道所 宣教教師 春名義行

〒496-0038 愛知県津島市橘町2-30

Tel/Fax. 0567-26-4221

頒価 700円(本体価格)

